

---

# 闇色の翹

李音

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

闇色の翅

### 【Nコード】

N84250

### 【作者名】

李音

### 【あらすじ】

世界は夜が帝王となり、闇が全てを深い暗黒に染めていた。波の音が聞こえてくる。ゆるやかな揺れが海が穏やかであることを教えてくれる。船に揺られる少女の魂は、今の世界と同じく暗澹としていた。

裕福な商家の娘であった美しき少女シャイアは突如として目の前で父を殺され、自らは訳の分からないうちに奴隷船に放り込まれる。その船の中で恐ろしい力を持ったフェアリー、黒妖精のコツペリア

の主となり、父を殺した者への復讐を誓う。悪魔に魂を売った少女と黒い妖精の前では、仇となった者は一片の情も与えられはしない。シャイアとコッペリアを中心に、多くの少女と妖精が織成すダイクフアンタジー。

## 覚醒 - 1 (前書き)

かなり残酷で混沌とした物語になります。苦手な方はご注意ください。それでも先に進んでくれるという方は、妖精と人間の織成す悲愴な物語に最後までお付き合い頂けると嬉しいです。

## 覚醒 - 1

世界は夜が帝王となり、闇が全てを深い暗黒に染めていた。

波の音が聞こえてくる。ゆるやかな揺れが海が穏やかであることを教えてくれる。船に揺られる少女の魂は、今の世界と同じく暗澹あんたんとしていた。

少女の名は、シャイア・カレーニヤという。父親が殺された直後に、突然やってきた男達に捕らえられ、暴力の末に、無理やり貨物船の倉庫に押し込まれた。周りで多くの噁り泣きが聞こえる。ここには奴隷として売られたり捕らえられた少女たちがいた。

シャイアは倉庫にたった一つある窓を見上げていた。月光は十八歳の少女を照らす。整った顔立ちに銀色の長髪と青い瞳が信じられないほどの魅力を醸し出している。肌はパールのように白く滑らかで、薄着一枚で月光に照らし出される姿は、少女とは思えない妖艶さがあつた。

どうして、こんな事になったの。どうして、お父様が殺されなければならないの……。

保然とする少女、もはや流す涙すら枯れていた。

『フェアリープラント……気をつけ……て……』

父が息を引き取る前に残した言葉を思い出すと、少女の中に凄まじい怒りが燃え上がった。魂が抜けたようになっていたシャイアの顔が、憤怒で歪み、あまりの悔しさに下唇を噛んだ。

フェアリープラント……許さない、お父様を殺し、わたしから全てを奪った、必ず、必ず復讐してやる！

シャイアは決して諦めなかった。闇の中で息を殺し、いつか必ず出来る脱出の隙を、獲物を狙う雌豹のごとくじつと待ち続けた。

「いいかてめえら、こいつには絶対手をふれちゃあいけねえ。ましてや開けようなんて思っくんじゃねえぞ」

船長は船室に集めた部下達に言った。屈強な海の男達は、海賊と殆ど変わらないような仕事を生業としている。

「そんなでかい錠前がかかってるんじゃ、開けようにも開けられませんぜ」

船員の一人が机の上の一抱えもありそうな紫色のオルゴールを指差して言った。

「念には念をだ。こいつは魔のオルゴールだからな」

「そいつはフェアリーを眠らせる箱でしょう？ 一体どんな奴が中にいるんでしょうね」

「馬鹿なことを言うな。こいつが存在した都市はことごとく滅んでるって話だ。俺達はこのいつを無事に届ける事だけを考えるんだ」

へい、と船員達が声を揃えて返す。それにもかかわらず、興味深そうにオルゴールを見つめている者が多かった。

「都市が滅ぶなんてただの伝説でしょう」

「あながちそうとも言えねえ。こいつを運ぶだけで一千万ルビー貰えるんだ」

どよめきが起こった。男達は信じられないという顔を見合わせる。みんなオルゴールよりも一千万という報酬に興味に移った。箱を運ぶだけでそれだけ貰えるのだ。こんな美味しい話はない。

「しかし、こんな危ないものを欲しがる奴がいるんですねえ」

「いや、こいつは博物館行きよ。これで都市崩壊伝説も終わるってわけだ」

船長の合図で、船員達は持ち場に戻っていった。船長は部屋に一人残って、いわくつきのオルゴールを常に見張る役に徹した。

スキンヘッドの男が豪腕に少女を抱えて部屋に入ってきた。

「放しなさい、汚らわしい！」

「今放してやるよ、ほら」

男は少女をベッドに放った。少女は小さな悲鳴を上げて横たわる。そして、顔だけを上げて男を睨みつけた。少女には似つかわしくな

い悩ましい姿を見せるのは、シャイアだった。男は舌なめずりをして近づいてきた。

「自分の立場がわかってねえようだな」

それから、男はシャイアか細い首を掴み、ベッドに押さえつけた。男が首を掴む手に力を入れると、気管が狭められてシャイアは苦しげなうめき声をあげる。しかし、決して許しを買ったり助けを求めたりはしなかった。その気の強さが、男をさらに高揚させた。それから男はさらにシャイアの首を死なない程度に締め上げて弱らせる。「どうだ、少しはわかったかい」

シャイアは目を閉じて荒く息を吐き、豊かな胸の膨らみを上下させていた。その悩ましの姿が男をさらに興奮させた。

そして男がシャイアの乳房に手を出そうとした。その時だった。今まで死んでいたようなシャイアの目がかつと開いた。男が身震いするほど恐ろしく鋭い眼光だった。シャイアは男が怯んだ隙に、筋肉の塊のような腕に力いっぱい噛み付いた。

「ぐあああつ！」

凄まじい痛みにも男は思わず悲鳴を上げる。同時に肉が引きちぎられる異様な音を聞いた。

シャイアは部屋を飛び出して、走りながら男から千切った肉を吐き出した。男は激痛に顔をしかめながら、怒りに任せてシャイアの後を追った。しかし、噛まれた腕の出血が凄まじく、そちらの方が気になって仕方がない。

「くっそお！ 女が逃げたぞ！」

男が忌々しげに叫ぶと、船員達が集まってきた。

「おい、その腕はどうした？」

「何て女だ、腕を噛み千切りやがった！」

「どの女だ？」

「銀髪の女だ！」

シャイアが逃げ出すと、騒ぎは船中に広がった。もちろん、船長もその報告を聞いた。

「よりによって一番上玉の奴を逃がすとは、海にでも飛び込まれたら大損だ！ とりあえず人手を上に戻せ！ 中に隠れているなら後でじっくり探せばいい！」

そう言っただけで船長も部屋を出て行った。魔のオルゴールを後に残して行ってしまったのだ。これが上玉のシャイアでなければ、船長が出て行くことはなかっただろう。これは、なるべくしてこうなったと言える。

シャイアは宿命に導かれるようにオルゴールの部屋に逃げ込んだ。そして、内側から鍵をかけると、その場に泣き崩れた。どうあがいても逃げられるはずがないと分かっていた。そして、捕まったら酷い目に合わされるということも。シャイアが途方にくれて立ち上がると、机の上にある紫のオルゴールが目に入った。外では船員達が騒いでいるはずなのに、そんなものはまったく聞こえなくなった。ただ、緩やかな波の音だけが異様に大きく耳の奥に響いた。

シャイアは引かれるようにオルゴールに近づいた。宝箱のような形をした紫色のそれは、大きな錠前が外れていた。そして、何の前触れもなくゆっくりと箱が開いていく。完全に蓋が開いたと思うといきなり何かが飛び出した。シャイアはびくつとしてそれを見上げた。宙に佇む小さな少女は、おもむろに六枚ある闇色の翅を開き、真紅の瞳でシャイアを見下ろした。

「フェアリー？」

シャイアは息を飲んだ。フラウディアでは珍しくない生き物だが、目の前にいるようなフェアリーは初めて見た。青銀の髪を黒いリボンで束ね、裾にフリルの付いた赤紫のドレスを着て、向こう側が透けて見える闇色の翅には赤や緑の光がオーロラのように蠢うごめいている。その姿は異様かつ美しかった。

「地獄の季節がやってくるよ。わたしの名はコッペリア、わたしは季節を告げる風」

自分をコッペリアと言ったフェアリーは、さも楽しげで邪悪な笑みを浮かべた。



「人間よ、力が欲しければわたしと契約するといい」

コッペリアが片手を上げると、オルゴールの中から赤い宝石をあらったペンダントが浮遊して、シャイアの手の中に落ちた。

「ピジョンブラッドのペンダントさ。それを身に着けて、わたしと手を重ねれば契約する事が出来る。正し、お前が契約にたる者でなかった場合は命を貰う」

人外の存在にそんな恐ろしい事を言われても、シャイアは驚くほど冷静だった。

「いいわ。ここにいたって死んだも同然だもの。同じ死なら、可愛いフェアリーに殺された方がまだましよ」

コッペリアは何かを確信したような笑みを浮かべて机の上に降りた。そして、小さな掌を出すと、シャイアはペンダントを首にかけて手を重ねた。すると、ペンダントの宝石が燃えるように激しく光り輝いた。

「何？」

その時、船員たちがシャイアの居所を嗅ぎ付けて、罵倒しながらドアを激しく叩いた。シャイアもコッペリアも、そんな事はまったく気に止めない。

「契約完了。どうやらお前はわたしに相応しい人間のようにだよ。久しぶりにマスターを持つ事が出来た」

コッペリアは心から浮き浮きしたようににやけてから、飛んできてシャイアの肩に腰を下ろした。シャイアは何の抵抗もなくそれを受け入れる。彼女はコッペリアが今の状況ではなくてはならない存在であることを直感していた。

やがてドアが叩き壊されて、船員達がなだれ込んできた。船員達の視線は、シャイアよりもその肩に乗っている幼児ほどの大きさの少女に注がれた。後からやってきた船長が状況を見て戦慄した。

「そ、そ、そのフェアリーは、お、お前、それを開けたのか？」

「開けたんじゃないわ、勝手に開いたのよ」

「こいつら、殺してもいいかい？」

「好きにするといいわ」

マスターの許しを得たコッペリアは、にやつと相手に戦慄を与える笑みを浮かべた。その瞬間、コッペリアの翅が前に長く伸びて、剣のように鋭い切っ先が二人の船員の眉間に突き刺さった。男達は数瞬後に痙攣して白目を向いた。船員達が事態を飲み込めないでいると、水の入った風船が砕けるのに似た異様で気味の悪い音と共に、コッペリアに眉間を貫かれた二人の男達の頭がスイカが砕けるように吹っ飛んだ。周りの男達は血や脳漿のうしょうや眼球をくらってショック状態になり女のように甲高い悲鳴をあげた。

「お、落ち着け！ 女は構うな！ フェアリーだけを狙え！」

船長は何とか恐怖を抑えて言った。しかし、船員達を襲っている混乱は、そんな言葉くらいで収集できるようなものではなかった。そこにコッペリアが飛んでくると、船員達はあっけにとられた。小さな少女が可愛らしく笑うと、船員達は救われたような気がした。しかし、その救いをあざ笑うかのように、何人かがいきなり首と胴を寸断された。肉塊と化したものから噴水のように血が噴出してあたりを真っ赤に染め、床に転がったいくつかの上半身と下半身の切断部からヘド口のように腸や肝臓が流れ出す。それをまともに見てしまった何人かは気が狂いそうになって叫んだ。

「ひいいいっ！ 助けてえーっ！っ！」

「もう嫌だあっ！」

生き残った船員達は、絶望の叫びを上げて逃げ出した。後に残されたのは、コッペリアとシャイアと腰を抜かして動けないでいる船長だった。船長はもう駄目だと思って死ぬ覚悟をしたが、シャイアはつまらないものを見るような目で見下ろしていた。

「みんな殺していいのかい？」

「海賊じみたのは全部殺しちゃっていいわよ」

コッペリアは鼻歌を歌いながら船長の目の前を通って逃げた船員たちを探しに出た。シャイアは無残な姿をさらす肉の塊を冷ややかに見下ろした。別に怖いとも恐ろしいとも思わなかった。今のシャ

イアの中にあるものは、再び燃え上がった復讐心だけだ。

あの子の力があれば、わたしの望みを果たす事ができる。

その気持ちは確信に近かった。船長は凍ったように冷たい表情のシャイアを見て言った。

「あの悪魔を手懐けた……お前は一体何なんだ……」

「わたしは全てを失った女、ただそれだけよ」

遠くからコツペリアの牙にかかった船員たちの断末魔が聞こえてきた。船長は気が狂ったようになり、頭を抱えてその場にうずくまった。シャイアはその無様な姿に冷笑しながら、自分を陥れた者への憎悪を募らせた。充滿する血の匂いが、少女の復讐心をより一層深いものにしていった。

半刻もすると、先ほどまで狂気に満ちていた船上はすっかり静まり返った。辺りは血の海と化し、無残に切り刻まれた死体が所狭しと転がっている。シャイアはその中を恐れもせず悠然と歩き、舳先までいって水平線の向こうにある大陸の影を見つめた。その時に朝日が現れて、次第に船上の地獄絵図を露にした。

全ての船員を失った船はどこへ行くともわからぬ状態だったが、突然フラウディアに向かって起こった強風を受けて帆が大きく膨らんだ。シャイアはそうなるのが当然とでもいうように、冷然とした様子で少しずつ近づきつつある陸地を見つめている。宿命がシャイアを復讐へと導いていた。

フラウディアの海岸近くにある小さな村に、着のみ一枚の女たちが突然やってきた。早朝にもかかわらず、村人達は異常な事態に外へ出た。一目で奴隷と分かる女達は、過度の恐怖で錯乱気味になり、口々に悪魔だの化け物だのと言っていた。

村の男が何人かで、女達がやってきたと思われる海岸を搜索した。すると、造作もなく漂着した船が見つかった。船の中に入った男達を待ち受けていたのは、この世のものとは思えない地獄だった。最初にそれを見た若い男は、ばらばらにされた死体と血肉の臭いにあ

てられてその場で嘔吐した。外にはそんな死体が幾つも転がっていて、操舵にも首をはねられた船長と思しき者の死体があった。さらに村人達の中へ進むと、一室の前に五人の死体が固まってあった。二人は頭を砕かれて、後の三人は今まで見てきた死体と同じように体をいくつかに切断されている。

「どうやったらこんな風になるんだ……」

「人間にこんな事が出来るのか？」

男達が恐怖と不安に駆られていると、搜索隊に加わっていた七十近い年配の男が部屋の奥にある蓋の開いたオルゴールを見つけた。

「こりゃあ、きつとフェアリーの仕業だ」

「フェアリーだって？ 確かにあれは人間よりも力があるが、こんな事が出来るとは思えない」

「いや、間違いないさ。あそこにある箱がその証拠だ」

他の男達は部屋の机においてある紫の箱を見て首を捻った。

「若いものにやわからんわな。あれはフェアリーを眠らせておく魔法の箱だ。恐らく夢幻戦役以前の強力なフェアリーじゃろう。もしかしたら黒妖精かもしれん」

「黒妖精？」

「フェアリーの創造主エリアノが手がけた闇の力を持つフェアリーたちだ。恐ろしい力を持っていて、中には一人で都市を滅ぼすようなものらしい」

沈黙が流れ、空気が凍りついた。男達は途方にくれたように立ち尽くす。

「そんなのが村の近くにいてもしれないのか、冗談じゃない……」  
「確かに恐ろしいが、女達が生きているところを見ると、分別はあるようじゃな。問題はマスターがどんな人間かということだ。なにせフェアリーは、マスターの言う事を忠実に実行するからのう」

男達は、恐ろしいフェアリーのマスターが好人物であることを祈りつつ船を後にした。

その頃、シャイアは村に入り込んでいた。大木の後ろから村の様子を眺めている。

「服が欲しいわ……」

「取ってくればいいじゃないか」

シャイアの独り言に、側で飛んでいるコツペリアが事も無げに言う。

「簡単に言ってくれるわね」

「あの家がいいよ。今は誰もいないよ」

コツペリアは近くの小屋を指差して言った。

「そんな事がわかるの？」

「わかるさ、人の気配がしないからね」

そもそも、何で人の気配を感じられるのが聞きたかった。しかし、今は余計な問答をしている暇などない。シャイアはコツペリアの言葉に微塵の疑いも抱かずに、指図された家に細心の注意を払いながら忍び込んだ。

確かに誰もいなかった。テーブルにカップや皿が出ていて、食事の用意がしてある。恐らく、船からやってきた女達の騒ぎで外に出ているのだろう。

シャイアは洋服筆筒を漁った。これでもない、これでもないという風に、次々と服を引きずり出す。コツペリアは何をしているかというところ、テーブルの上に用意されたパンやソーセージに嚙り付いていた。

「何やってるんだい、服なんて何だっっていだらう、さつさとしな」と誰か来るよ」

「うるさいわね、黙りなさい」

コツペリアは言われたとおり黙ってパンをかじっていたが、絶えず外の気配に注意を払っていた。シャイアは筆筒の奥底でようやく意中の服を見つけ出すと、それを引っ張り出してわきにかかえた。それからテーブルの様子を見て目を見張った。何と、用意されてた食事が殆ど綺麗になくなっている。最初に見たときは、少なくとも

三人分はあった。

「あなた一人で食べたの？」

「ああ、起きぬけで力を使ってお腹が減ってたからね」

「呆れたわ。そんな小さな体のどこに食べ物が入るのかしらね」

「さあねえ」

クールに答えるコツペリアに、シャイアは微笑した。それから残っていたパンと林檎を服に包み、急いで村を離れた。もはや形振りかまっている余裕はなかった。

シャイアは森の中で適当な木陰を見つけて粗末な服を脱ぎ捨てた。コツペリアはいつの間にかどこかにいなくなり、着替えが終わる頃に戻ってきていた。

「もう戻ってこないかと思ったわ」

「フェアリーはマスターが死ぬか、自分が死ぬか、契約が解除されるまではマスターから離れられないんだよ」

「わたしの側から離れられないなんて、難儀な妖精さんね」

シャイアが皮肉っぽく言っても、コツペリアは気にした様子もなくマスターの姿を眺めた。シャイアは丈の長い黒一色の服を着て、黒いカチューシャまで付けていた。

「なにもそんな真っ黒い服を選ばなくてもいいじゃないか。そうじゃなくても、あんたはただでさえ暗い空気を持っているんだからねえ」

「わたしがどんな服を着ようと、わたしの勝手よ。誰にも指図はされたくないわ」

コツペリアは可愛らしい仕草で肩を竦めてから、小さな皮袋をシャイアに向かって投げた。シャイアがそれをキャッチして中を開けると、金貨が詰まっていた。

「それは役に立つだろう」

「強盗殺人でもしてきたわけ？」

「拝借してきただけさ、人を殺人狂みたいに言わないでくれ」

「あれだけの事をしておいて、よく言うわ」

「誰でも殺すと言うわけではないさ。わたしは死すべき者の命だけを刈取る」

「死すべき者ですって？」

「人間の中には、無為に死ぬ運命を持った者がいるのさ。わたしはそういう命だけを選んで殺せる」

「意味が分からないわ……」

シャイアが不可解な顔をしていると、コツペリアは無表情のまま言った。

「わたしは自然災害みたいなものなのさ」

「なんですって？」

「大地震や大津波は誰であろうと容赦なく殺すだろう。悪人だろうが善人だろうが、大人だろうが子供だろうが関係ない。自然は人間に理不尽な死を与える。無駄に死んでいるように見えても、実はそういう死を運命付けられた人間だけが選ばれて死んでいくんだ。わたしはそういう運命を持った人間を見極める事が出来る。つまり、わたしに殺されると言う事は、自然災害に合って死ぬのと同じという事さ」

「じゃあなによ、この前殺した海賊達は、そういう運命だったっていう事なの？」

「近いうちに海難事故にでも合う予定だったんだろうねえ」

シャイアは話を聞いているうちに、空恐ろしくなった。信じがたい話だが、フェアリーは絶対に嘘は言わない生き物だった。

「そういう運命って、変えられないものなのかしら」

「変えられるよ」

シャイアが恐る恐る聞くと、コツペリアはあっさりと答えた。

「死というのは罪の総決算なのさ。人間は何度も生と死を繰り返し、その過程で常に罪や幸運を積み重ねているのさ。罪が大きくなれば、どこかで清算しなければいけないだろう。それが突然に死という形になって現れる事がある。それが嫌だったら善行を重ねて罪を打ち消せばいいのさ。借金を返すのと同じ事だねえ」

「まるで宗教のような話ね」

「宗教っていうのは、人間が生きる糧を得る為に作ったもんだらう。わたしが言っているのは、あらゆるものを支配する法則さ」

シャイアは、コッペリアの途方もない話を溜息をつき、それから盗んだパンと林檎を食べて少し休みを取った。木の根元に座って両膝を抱えると、贖い難い眠りへの誘惑があつた。船に無理やり乗せられてから今まで殆ど眠っていないので、それは当然の事だった。

『シャイアはお母様にそっくりだね。心は雪のように冷たくて、美しく、でも奥底には優しい温もりを持っている。何者をも寄せ付けない君は、まるで野に咲く一輪の花のようだ』

父親のレアードがそんな事をよく言っていた。

シャイアは豪商カレーニヤの長女として生まれた。庶民でありながら、貴族以上の力を持つ商家の一人娘だ。母は物心つく前に病気で亡くなり、広い屋敷に父と住んでいた。もちろん、メイドや執事はかなりの数がいたが、家族と呼べるのは父親だけだった。

シャイアは幼少の頃から、父親以外には心を開く事がなかった。

誰も彼もが下らない人間に見えて、信用できなかったのだ。屋敷では父親と一緒にいる事が多く、学校では誰も寄せ付けなかった。それに飛びぬけた美しさが拍車をかけて、周りの人々はシャイアを神秘的な存在として見ているほどだった。しかし、そんな事は当人は気にもしていない。くだらないと思っっている人間の考える事なんてどうでもいいのだ。こんな感じなので、シャイアの人間関係は恐ろしいくらいに気薄だ。はつきり言ってしまうえば、父と娘だけだ。それだけに、父親のことを心底愛していた。心を通わせる事の出来る人間は父親だけだった。父はそういうところが母親に似ていると言っていた。

父は、カレーニヤ家に婿養子として迎えられた。母が亡くなつてからは、カレーニヤの事業を父が引き継ぐことになったのだが、その経営手腕は決して良いとは言えなかった。そして、それがシャイ



アが父親に見出した唯一の欠点でもあった。レードは利益を生む事よりも、慈善事業に没頭した。使い切れんばかりの財産を元手に、孤児院を設立したり、貧乏人でも通えるような学校を建てたりと、商人である母の血が濃いシャイアからすれば、無駄としか言いようのない事をしていた。自分だったらもっとうまく利益を出せるのになと思うようなことはいくらでもあった。でも、それ以上に父に対する愛が深かったので、あえて何も言う事はなかった。そして、父が死ぬ間に手がけていたのが、豊かな心を持ち人間との共存を根本としたフェアリーだった。しかし、父はそれを果たせずに何者かの銃弾に倒れたのだった。

シャイアが寒さで目を覚ましたとき、辺りはすっかり暗くなっていた。思っていたよりもずっと長く眠っていたようだった。

季節は春だが、夜はかなり気温が下がる。それでも、シャイアの体はさほど冷えてはいなかった。その理由は、膝と胸の間にコッペリアが入り込んで眠っていたからだだった。赤子を抱いているような温もりの気持ちよさに、シャイアはしばらく目を瞑った。そうしていると、コッペリアが自分を暖めるためにこうしているのだという事を感じた。

「起きたのかい？」

コッペリアが上を向いてシャイアを見ていた。シャイアが起きた事を素早く感じ取っている。このフェアリーは野生の動物以上の感覚を持っていた。

「こんなに長く寝るつもりじゃなかったのよ」

「ま、眠っちまったものは仕方ないさ」

森を吹き抜ける冷たい風に、シャイアは身を縮めた。コッペリアはそれを感じ取って言った。

「このままじゃ冷えちまうよ。どこかで暖を取った方がいいねえ」

「そんな場所はどこにもないわ」

「少し歩けば村に戻るさ」

「暖かい場所には必ず人間がいるものよ」

「そんなのは黙らせればいいのさ」

コツペリアが当たり前のようにそんな事を言うので、シャイアは溜め息をついた。コツペリアは本気でそう思っているのだ。

「駄目よ。今は目立つ事はしたくないの」

シャイアが言っている事は、あくまでも自分の身を護るためだった。コツペリアが誰かに危害を加える事は気にもしないが、それによつて自分に害が及ぶのはごめんだ。

「仕方ないねえ」

コツペリアは面倒そうに言うと、シャイアの懷から抜け出し、翅を羽ばたかせて黒く塗り潰されたような森の闇に消えた。

コツペリアの温もりが無くなると、急に体が冷えていくように感じられた。言いようもない心細さを覚えたシャイアは、殆ど何も見えない暗い森の見渡した。しんと静まり返り、何の気配もしない。感じる事と言えば、宵の肌寒さと背を持たせる樹木の硬い感触だけだ。見上げれば枝葉に遮られて言い知れぬ不気味さを感じさせる満月が目に見え込んできた。

どこまでも寂寥とした夜が、殺された父の事を思い出させる。今のシャイアには何もなかった。あるとすれば唯一つ、妙な巡り合わせによつて、コツペリアという小悪魔の如きフェアリーの主人になった事だ。シャイアは一人ぼっちになって、自分がコツペリアを頼りにしている事に気づかされるのだった。

「あれは使えるわ……復讐の為に利用するだけよ……」

その独り言は、自分に対する言い訳にすぎない。シャイアは、コツペリアを当てにしている自分に苛立ちを感じた。父親以外の者にそんな気持ちを抱くのが、彼女にとっては不可解で気持ちの悪い事だった。

シャイアが物思いに沈んでいると、コツペリアが暗闇の中から突然現れた。自分の体の三倍はありそうな枯れ枝の山を抱えている。それをシャイアの前に無造作に落としていく。今度はシャイアの前

で枯れ枝が山となった。

「これだけあっても意味がないわ」

「これだけのはずがないだろう」

コッペリアが前で手をかざすと、掌から赤い光線が走った。一瞬、シャイアの周りにある闇を鮮やかな真紅が切り裂く。その光が消えて間もなく、今度は炎の赤が闇を照らし始めた。

「便利なフェアリーね」

「人を道具みたいに言わないでくれ」

暖かい。シャイアは素直にそう思った。それは、命からがら暗闇のような世界から抜け出したシャイアが、ようやくほっと出来る瞬間だった。体中にわだかまるような疲れを感じて、体がずんと重くなる。もう喋る事さえ億劫になった。

シャイアは心を空っぽにして、ゆれる炎を見つめていた。コッペリアはシャイアによりそって、やはり炎をじっと見つめている。ただ黙って寄り添っている、幼子と若い母親のようにも見える。

「それは喪服のつもりかい」

コッペリアがぼつりと言うと、シャイアは閉じかけた目をゆっくり開く。コッペリアは、シャイアが着ている服の事を言っていた。

「どうしてそう思うの？」

「お父様が殺されたんだろう」

シャイアは押し黙って、どうしてそんな事がわかるの、と言いたげに眉をひそめていた。

「眠っている間に、お父様お父様って、五月蠅いくらいにうなされてたからねえ」

「……そうよ。お父様はとても優しい人だった、殺されていいような人じゃなかった、それなのに何の前触れもなく、わたしの前からいなくなった。そして、わたしも……」

「それは分かっているよ。話す必要はないね」

コッペリアは必要以上の事には興味を示さない。そういう割り切った所は、シャイアには好感が持てた。

「何で殺されたんだい？」

「知らないわよ……」

「その時の事を話しておくれよ」

「あなたには関係ないでしょう」

「お前はわたしを使って復讐をするつもりなんだろう。だったらわたしには聞く権利があるね」

「何でもお見通ししてわけね……」

シャイアは驚きもせず言った。今まで一緒にいただけでも、コッペリアの勘の鋭さや特別な力を何度も見ている。それくらいの事は分かつて不思議はない。

「いいわ……」

シャイアは、出来る事なら思い出したくない記憶を探った。

その日は天気の良い日曜日で、シャイアは時計の針が朝の十一時を指していたのを覚えている。その時は、メイドのアンナに紅茶を入れさせていた。

「お嬢様、どうでしょうか……」

どう見てもシャイアより年下のアンナが、子供っぽい顔を不安でいっぱいの面にして聞いた。シャイアはその不安を的中させるようなため息をつく。

「お湯が温いわ。淹れ直しなさい」

「も、申し訳ございません」

アンナが今にも泣きそうになって謝ると、窓際のソファで本を開いていたレアドが、微笑をたたえてシャイアに近づいた。シャイアの父は、長いブロンドを後ろに束ねた美男で、シャイアとは正反対に、見るからに気が優しく人が良さそうな感じがする。

「アンナはまだここに来たばかりなんだ。あまり苛めてはいけな  
よ」

「お父様、甘やかしてはいけませんわ。アンナには、この家の事をしっかり覚えてもらわなくては いけません。お茶の淹れ方もその一

つです」

レアードは嬉しそうに笑ってから、シャイアを見つめた。

「まるでお母様のような事を言うね。本当に良く似ている」

シャイアは微笑しつつも、内心は嫌な気分だった。レアードは妻の話をするとき、いつも満ち足りたような顔をする。シャイアは父が自分以外の存在を見つめるのが嫌だった。それがたとえ自分の母親であつても、許せない気持ちになる。

それから、アンナは紅茶を淹れ直し、シャイアがそれを口にしようとした時、ノックの音が聞こえた。

「お入り」

シャイアが許可を与えると、埃っぽい服を着た若い男が入ってきた。庭師のセバスだった。

「ご主人様に会いたいという方が見えています。外でお話をしたいと言っています」

「ああ、すぐに行くよ」

レアードはセバスの後について出て行った。そんな日常のちょっとした出来事が、全てを狂わせるなどと誰も知るはずもない。

シャイアは、緊張して背筋を伸ばすアンナの視線を浴びながら一口お茶を飲んだ。

「…… 今度はいいわ」

「あ、ありがとうございます」

「別に褒めているわけじゃないわ。こんなの出来て当たり前よ」

アンナは恥ずかしそうに顔を紅潮させて、また頭を下げた。その時だった。春の陽気を引き裂く銃声が外から聞こえてきた。それは、屋敷にいる誰もが聞き取れるほど鮮明に響き渡った。そして、誰かが外で叫んだ。

「旦那様！」

シャイアはその声を聞くと、全ての思考が吹き飛び、手からカップを落とした。白い陶器が床で砕けるのと同時に、座っていた椅子をなぎ倒して部屋を飛び出す。

年老いた執事のレバンスが、広い庭の中央でレアードを抱き起こしていた。レバンスは走ってくるシャイアに気づくと厳しく叫んだ。  
「お嬢様、来てはいけません！」

空気を震わせるような大声は、老体からは想像がつかないものだった。しかし、シャイアはそんな声でも聞こえないようで、ただ一心不乱に父の側に駆け寄った。

シャイアが父の姿を見たとき、あまりの姿に声が出なかった。もはやショックを通り越して呆然とした。

レアードは左胸を撃ち抜かれていて、銃創から滝のように血が流れていた。心臓は外れているが、それでも時期に死ぬと言うことは誰の目にも明らかだった。

「……お……父様？」

シャイアは現実とは思えない光景にどうしていいのか分からない。レアードが最後の力で手を伸ばすと、シャイアは正気を取り戻し、膝を突いて父の手を強く握った。

レアードは絶望的に乱れた吐息をしながら、噎せ返って血を吐き出す。白いシャツは血染めの衣装と化していた。

「フェアリープラント……気を……つけて……」

「フェアリープラント、それがお父様を……」

そして、レアードは笑った。深い優しさの込められた微笑は、こんな状況でもシャイアに安らぎをくれた。

「あ……い……」

レアードが言えたのはそこまでで、後はわずかに唇を動かすだけだった。けれども、シャイアには父が何を言っているのか理解できた。

『愛しているよ、シャイア』

声はなくても、シャイアにはそれが頭を中心に直接響いてきたように感じた。

それを最後に、レアードは薄目を開けたまま動かなくなった。全身から力が抜け、シャイアの握っている手も急に重くなった。

「そんな、お父様……………」

シャイアは父が死んだと分かって、涙も出ず、泣き叫ぶ事もなかった。自分の命よりも大切な者を亡くした衝撃は、泣くという行為だけではとうてい物足りない。悲しみを通り越した先には何も考えられない虚無しかなかった。

その時、シャイアは嫌な気配を感じて屋敷の門の方を見た。そこには庭師のセバスが立っていて、何かを深く後悔しているような、それでいて人生で最も大きな事をやり遂げたような、歯切れの悪い笑みを浮かべていた。

それから黒服の男達が屋敷に侵入してきて、シャイアは捕らえられたのだった。

コッペリアに全てを話し終えると、シャイアは重要な事に気がついて、はつとなった。

「どうしたんだい？」

「何でもないわ……………」

ずっと押し込めていた暗い思い出を吐露すると、シャイアの気が少し楽になった。シャイア自身は気づいていないが、心のずつと奥底では、この悲しみを誰かに受け止めて欲しいと思っていた。

「あ……………」

不意に熱いものが瞳に溢れて、頬を伝って流れた。今になってようやく、父を失った事を実感した。コッペリアの前で涙は見せたくないと思った。しかし、最愛の者を失った悲しみは、こらえられるようなものではなかった。

シャイアは膝を抱えると、うつむいて肩を震わせた。

お父様を殺した奴を、私の手で必ず殺してやる！

涙が流れるほどに、父を陥れた何者かに対して、シャイアの憎悪は膨らんでいった。

コッペリアは泣き続けるシャイアには見向きもせず、焚き火に枝を入たり掻き回したりして、炎の加減を見ていた。それは、プライ

ドの高いシャイアに気を使っているのかもしれない。

シャイアはやがて泣きつかれて崩れるように横になって眠った。

焚き火は燃え続けた。コツペリアが消えないように枯れ枝を入れていたからだ。それは、マスターのシャイアの為にしているわけではなかった。

コツペリアは耳を澄まし、時々上を見上げる。そうすると、巨大な月が枝葉の間から変わらず覗いていた。

「そろそろ来るかねえ、あいつが」

コツペリアは、姉妹の到来を予感していた。



## 覚醒 - 2

夜に埋もれた森の上空は、月光だけが唯一の光だった。

黒い森の上を飛ぶ小さな体を、月の光が浮かび上がらせる。その姿は繊細であり優美であり恐ろしくもあった。

背には蝙蝠の翼、ブロンドの長髪が月光を受けてプラチナのように輝き、両目は闇の中で赤紫の光を発している。

それが森の上で急停止すると、小さな体を中心に衝撃波が広がり、森がわなないた。

時間はもう朝方だった。シャイアは急に悪寒を感じてばつと飛び起きた。自分の直ぐ近くに恐ろしい獣でもいるような殺気を感じた。コツペリアが焚き火を挟んでシャイアの対面にちょこんと座っていた。

「お前にも分かるのかい。フェアリーが存在を感じられるという事は、妖精使いとしての資質があるって事だよ」

「何なの？ 近くにすごいのがいるわ……」

「奴が来た。このわたしを狩りにねえ」

コツペリアは、ゲームを楽しむ子供のように、ウキウキした笑顔になった。そして、六枚の黒い翅を開くと、焚き火を吹き消しそうな風圧を残して上昇した。

シャイアは風圧と舞い上がる火の粉に思わず顔を覆った。気がついたときにはコツペリアの姿はなかった。

上空ではコツペリアと漆黒のフェアリーが対峙していた。

「久しぶりだねえ、ニルヴァーナ。お前が最初に来ると思っていたよ。姉妹の中で一番鼻がいいからねえ」

「……覚悟……」

「お前が死ぬんだよ」

シャイアが上を見上げていると、森の上空から剣と剣を合わせて

争うような、甲高い音が響いてきた。

「何が起こっているの……………」

争いの旋律が次第に近づいてくる。それがシャイアの真上まで来たかと思うと、何かの生き物が森に飛び込んできて、小枝を折りながら、体の大きさとは不釣り合いな重さでシャイアの近くに落ちてきた。

シャイアはそれを見て慄然とした。人間を簡単に殺してしまうコツペリアが、黒いフェアリーに押さえつけられている。

「何やってるんだい！ さつさと魔力を送りな！ 負けちまうじゃないか！」

「魔力を、送る？」

コツペリアは舌打ちすると、ニルヴァーナの腹部に蹴りを入れて突き飛ばした。漆黒のフェアリーは、木に激突する寸前で、翼を開いて空中で静止した。

「こんなの見たことない……………」

シャイアは啞然として言った。対になった大きな蝙蝠のような翼に、金糸のように輝く長いブロンドが心に突き刺さるように強烈な優美さを作り出し、膝のすぐ下まである長いブーツも、右側に入りツトの入った短いスカートも、妖艶なボディラインを露にする半袖の上着も漆黒だった。華奢な肩から胸元までを覆い隠すケープと手首を飾るカフスも黒いが、白の刺繍で妖精の姿が一人ずつ描かれていた。コツペリアも独創的なフェアリーだが、漆黒の少女もそれに劣らない姿だ。

「コツペリア……………眠って……………」

ニルヴァーナは静かな声で言った。

「冗談じゃないね。わたしは目覚めたばかりなんだよ、まだまだ遊び足りない！」

コツペリアの翅が開き、全てが蛇のように長く伸びて刃物のように鋭利な切っ先がニルヴァーナに迫った。

ニルヴァーナは片翼を体の前にもってきて、翼の一振りですれら

を弾く。

コッペリアがその隙に突っ込んできて、ニルヴァーナの顔面と首を掴んでそのまま後ろの木に叩きつける。小さな体でもコッペリアの力は、屈強な人間でも振り払えないほど強靱だった。しかし、ニルヴァーナはコッペリアの手首を掴み、押さえつけている手をあっさり引き剥がす。

「くっ、そうだったねえ。夜はお前の世界なんだ。久しぶりなんで忘れていたよ……」

コッペリアはニルヴァーナと目が合うと、さすがに少しぞっとした。その瞬間に、脇腹に強烈な蹴りを貰って茂みの中に突っ込んだ。「コッペリア！」

シャイアは我知らずに叫んだ。

傷ついたコッペリアが、茂みの中からふらっと飛び上がってきた。焚き火の炎に照らし出されるその姿が、酷くみすばらしかった。

「なんて事だい、夜の上にマスターから魔力も貰えないんじゃないか、どうにもならないじゃないか……」

ニルヴァーナが高速で飛び、まるで瞬間移動したように、コッペリアの前に現れる。そして、コッペリアを殴って、燃え盛る焚き火の中に叩き落とした。衝撃で燃える小枝や灰が飛び散って、辺りに火の粉の雨が降った。

シャイアは、コッペリアの無様な姿を見ると、急に言い様のない怒りがこみ上げてきた。

「何やってるのよ、それでもわたしのフェアリーなの……!」

シャイアが怒りを露にすると、それに反応するようにペンダントの宝石が輝いた。シャイアの懷で真紅の宝石が、火傷するかと思う程に熱を持った。シャイアは思わず胸を押さえた。

「きたっ！」

コッペリアの中に力が流れ込んだ。コッペリアは、ぞくぞくするようなエネルギーの胎動に、歪んだ歡喜の笑みを浮かべると、六枚の翹を広げ、まるで弾丸のような勢いで飛び出す。

ニルヴァーナは、コッペリアの想像以上の速さに反応し切れずに、まともに体当たりを食らった。

二つの小さな体がぶつかり合う衝撃が、辺りの空気を震わせる。コッペリアは体当たりした勢いのまま、ニルヴァーナを樹に叩きつけようとした。しかし、ニルヴァーナはくるりと反転、その勢いを利用してコッペリアを投げ飛ばした。

コッペリアは空中で一回転してからぴたっと止まると、翅を広げた。

「バラバラにしてやるよ！」

目に見えないうねりがコッペリアの周囲に生まれて、無数の真空の刃がニルヴァーナに襲い掛かった。

ニルヴァーナは見えない刃を感じる事が出来た。もはや逃げ場はないと知ると、両翼を前で交差させて、漆黒の翼で体を包み込む。その後に、見えない壁と見えない刃がぶつかり合って火花を散らした。それから数瞬遅れて、周りの大木が輪切りにされて、緩慢な軋みとともに、巨大な体をもたげて、大地を震わす振動と共に、数本の巨木が森の大地に沈んだ。

翼を大きく開いたニルヴァーナには傷一つなく、真後ろにある樹齢百年を超える巨木以上の存在感を示していた。

もはやこれは、驚くという次元ではない。シャイアは薄暗い森の中で繰り広げられる夢幻の戦闘を、まるで夢を見ているような気分で眺めていた。

ニルヴァーナは目を細めると、真上に飛んでシャイアたちの前から消えた。それは、逃亡したようでもあり、一時の猶予を与えてくれたようにも思えた。

「夜明けだよ」

コッペリアに言われて、シャイアは空が白み森が明るくなりつつある事によろやく気づく事が出来た。

フラウディアは孤立した島国で、独自の発展を遂げた王国だった。

南側の海岸線に首都シルフリアがあり、島の中心部にはかつての首都であったフェアリーラントがある。

シルフリアを北上して、フェアリーラントとの間にはノルンという村があった。

ニルヴァーナは、ノルンの村から少し離れた屋敷に向かっていた。森の中にひっそりと佇むその屋敷は、屋根裏部屋まで含めて三階建てで、二階の窓が開け放たれていて、ニルヴァーナはそこから入って窓際に立った。

「お帰りなさい」

部屋の片隅で、若い女が花瓶に花を生けていた。女はニルヴァーナに背を向けたまま声をかけた。それから振り向き、窓際に立つ妖精に顔を向けた。女は両目を閉じて微笑を浮かべ、赤みが掛かった長い黒髪は、肩や衣服に触っても、何の抵抗もなく流れる。春らしく若草色のドレスを着て、触れる事が許されないような初々しさと純真さを湛えていた。歳は二十二になる。彼女の名はセリアリス・ミエルと言った。

ミエル家は古くからある妖精使いの家系なのだが、それを知っている者は今の時代には殆どいなくなっていた。

「これ、どうかしら」

セリアリスがほんの少し恥じらいを込めて言うと、ニルヴァーナは飛び上がって花瓶の前に立った。

「……綺麗……」

「ありがとう」

セリアリスは花瓶の花を、赤子を触るように優しく整えた。

「目が見えなくても、これくらいの事は出来る様になるものなのね」セリアリスの薄く開けた瞳から、光のなくなった青い瞳が覗いていた。ニルヴァーナはそれを無表情で見つめる。黒い妖精の瞳は、不気味に輝いていた赤紫から、優しい緑色に変わっていた。

「そうだわ、あなたの大好きなものがあるのよ」

セリアリスは棚から蔓が山盛りになったガラスの器を取り出して、

テーブルの上に置いた。その淀みのない動作は、とても盲目とは思えない。

ニルヴァーナは椅子に座って、苺に手を伸ばした。へたも取らずに次々に苺を口に放り込んでいく。

「コッペリアがいたのね。魔力の放出を感じたから分かったわ」

「うん」

ニルヴァーナの短い答えに、セリアリスはため息をついた。

「コッペリアは、人間を滅ぼすために生まれたフェアリーなのですよ?」

ニルヴァーナは手を止めて答えた。

「そうとは言えない……けど……今は……人間を滅ぼそうとするはず………」

そして、再び苺に手を伸ばす。

「フェアリーが生まれて半世紀、フラウディアの人間達はフェアリーの尊厳をこれ以上なくくらいに破壊してきたわ。今やフェアリーは人間の為に働く便利な道具でしかない。それが人間社会までも墮落させている事には誰も気づかない。わたしだって、こんな世界は滅んでしまった方がいいって思う時もあるわ。でも、それは間違っていると思うの」

ニルヴァーナはただ黙って苺を口に運んでいる。話を聞いているようには見えないが、セリアリスは続けた。

「この世界に無駄なものなんてないと思うの。人間だって何かの意味があつてこの世界に生まれたはずなのよ。確かに人間がいない方が、世界はいつまでも美しく平和だったと思う。でも、それは何か違う気がするのよ。口では、うまく言えないんだけどね……」

ニルヴァーナは山盛りの苺をすっかり食べてしまった。

「……ごちそうさま………」

「もう食べちゃったの、早いね」

ニルヴァーナが飛んできて、セリアリスの肩に腰を下ろすと耳元で囁いた。

「コツペリアは……必ずシルフリアへ……」

「人間を滅ぼすために？」

「……わからない……」

「戦いになるのかしら？」

「さあ……」

「あなたなら、コツペリアを止められる？」

「……あなたが望むのなら……止める……」

セリアリスは窓際まで歩いて、見えない目で空を仰いだ。

「シルフリアへ行った妹が心配だわ……」

「テスラも一緒……」

「そうよね、テスラも一緒だもの安心よね」

そうは言っても、セリアリスの憂いは拭えなかった。彼女の妹は、無茶を承知で突き進むような気性だったのだ。

「妖精女王エリアノよ、フェアリーの創造主よ、われらの親愛なる大叔母よ、どうか妹をお守り下さい」

セリアリスは、妹が心配で祈らずにはいらなかった。

「今朝のあれは何なの？」

シャイアは森の中に切り開かれた道を歩いていた。その肩に座っているコツペリアは、少し間を置いて答えた。

「わたしと同じ黒妖精さ」

「黒妖精って何なのよ。あんなの普通じゃないわ」

「その通りさ。わたしたちは普通のフェアリーとは違う」

コツペリアの答えはそれだけだった。シャイアの目が鋭く尖り、苛つきを露にした。

「ちゃんと説明しなさい」

「どこまで説明すりゃあいいんだい」

「わたしの知らないことは全てよ」

「日が暮れっちまうよ」

「日が暮れても何でもいいから説明なさい」

コツペリアはシャイアの肩の上で小さくため息をついて、仕方ないという風に話始めた。

「今朝の奴はニルヴァーナと言って、この世に最初に生まれた黒妖精だ。人間に分かりやすく言えば、わたしの姉みたいなもんだね」

「お姉様といきなり殺し合いなんて、素晴らしい姉妹愛だわ」

「わたしは、他の姉妹とは相容れぬものがあるから仕方ないのさ」

「他にもあんな化け物じみた姉妹がいるわけ？」

「黒妖精は全部で四人いる」

後二人もコツペリアのようなフェアリーがいるという事にシャイアは眉をひそめた。正直、あまり考えたくない事実だった。

「誰があなたみたいなフェアリーを作ったのかしら」

「私たちは、お母様の手によって生まれた」

「お母様？」

「エリアノ・ミエルと言う名の妖精使いさ。お母様はコアと精霊力の宿った森の土を元にして、人工的に知的生命体を生み出した。それがフェアリーだ」

エリアノは、フラウディアに住む者ならば誰でも知っている名だった。世界で最初のフェアリーを作った女性で、伝説の妖精使い、妖精女王、フェアリーの創造主など、様々な名で呼ばれて人々に親しまれる伝説の人だった。

「エリアノは、当時はフェアリーランドの女王で、尽きる事のない優しさを持ち、民衆からの信頼も厚かったと言われているわ。そんな人があなたみたいに凶暴なフェアリーを作るなんて思えない」

フラウディアでは、エリアノは女神として崇められているくらいなので、シャイアがそう思うのも仕方がなかった。

コツペリアは感慨深そうに目を閉じて、しばらく口を閉ざした。彼女が何を考えているのかは誰にも分からないが、険のない穏やかな顔をしている。コツペリアの性格からして、奇跡的な表情と言っても良かった。

「確かにお母様はわたしを作ったさ。わたしだけじゃない、ニルヴ



アーナも、シルメラも、テスラも、黒妖精はすべてお母様の娘だよ」  
「何の為に……」

「それを話すには、まずはお母様がフェアリーを作った理由から話さなければならぬね」

コツペリアは過去の記憶を整理するのに少し時間を使ってから話し始めた。

「お母様には体の不自由な妹がいたのさ。妹の世話をさせる為に最初のフェアリーを作った。そして、最初に生み出されたフェアリーを元にして、四人の黒妖精が作られ、さらに黒妖精を元にして他の様々なフェアリーが生まれたのさ」

「つまりあなたは、フラウディアに数え切れないほどいるフェアリーの元と言うわけ」

「そういう事になるね。だが、それは大して重要なことじゃない。黒妖精が作られたのには、もっと重大な意味がある」

「重大な意味ですって？」

コツペリアは不適な笑みを浮かべ、言葉に楽しそうな調子を乗せながら言った。

「黒妖精は、人間の運命を審判する存在なのさ。人間とフェアリーの間にあるバランスが著しく崩れれば、わたしは人間を滅ぼす為に最善の行動をする。他の姉妹達は人間を護るために行動する。わたしが勝てば人間は滅びる、姉妹が勝てば人間は救われる。だからわたしは姉妹達と戦う運命にあるのさ」

シャイアはコツペリアが冗談を言っているのかと思った。いくらコツペリアが恐ろしい力を持っていると言っても、人間を滅ぼすというのは大きすぎる話だ。しかし、話している本人はいたって真剣だった。

「あなたの言っている事はとても信じられないわ。あなたが人間を滅ぼすような力を持っているとも思えないし、エリアノがそんなフェアリーを作るというのも不自然だわ。エリアノは平和主義者だったはずよ」

「その通りさ。お母様は人々の幸せを願った。だからフェアリーをお作りになった。人々がフェアリーと手を取り合って生きていけば、素晴らしい世界になっていくと信じていた。だが、お母様は人間の愚かさを無視することが出来なかった。人間とフェアリーの関係が破綻し、取り返しのつかない事態になる事も十分に予想できた。だから、わたしが生まれたのさ。わたしは人の命を刈り取る者、そしてフェアリーの為に存在するフェアリーだ」

「フェアリーの為に創られたフェアリー……」

コツペリアは、エリアノが人間の行く末を憂慮し、悩み苦しんだ末に生み出したフェアリーだった。

「わたし以外のあらゆるフェアリーは、契約者の命令に忠実だし、人間と契約しなければ本来持つ力の半分も出す事ができない。そして、選ぶ権利があるのは絶対的に人間の方なのさ。選ばれたフェアリーは、契約者がどんなに馬鹿な人間でも従わなければならない。フェアリーはそういう風に出来ている生き物なんだ。でも、わたしだけは少し違う。わたしは契約者を選択する事が出来る。契約してしまえば後は他のフェアリーと同じだけどねえ」

「……そう言えば、契約するときに、氣に入らなければ命を貰うとか言っていたわね。契約できなければどうなるのかしら」

「言った通りに命を貰うさ。わたしに命を取られた人間は、ミイラのようになって死ぬ。わたしは奪った命を魔力に変えて、罪深い人間を殺し続ける。魔力が尽きると眠りに入る。そうして、いくつものつまらない街を破壊してきた」

シャイアは急に立ち止まると、複雑な表情を浮かべた。それは、コツペリアの残酷な話に心を痛めているという訳ではなかった。

「どうしたんだい？」

「わたしは、あなたが人間を滅ぼすのに必要な契約者って事？」

「わたしは好みの人間を選ぶだけだ。それに、人間を滅ぼすかどうかは、人間とフェアリーの関係がどうなっているのか分からなければ決められないさ」

シャイアは安堵の中にわずかな嬉しさを混ぜた微笑を浮かべた。しかし、それがコツペリアに好みの人間と言われた事に対する嬉しさだと気づくと、自分自身に苛立ち、腹が立ち、すぐに無表情になつて言つた。

「きつとあなたは、人間を滅ぼすと思うわ」

「お前のような考えを持つ人間は意外に多い。でも、そんなに簡単なことじゃあないんだよ」

「あなたの言っている事はよく分からないわ。でも、あなたが人間を滅ぼしたいと思うのは間違いないわ」

シャイアの言葉は、コツペリアの反論を許さないほど重かった。それは確信と言う名の圧力だった。

コツペリアは何かを言い返そうとしても言えない、なんとも煮え切らない表情をしている。シャイアはそれを面白そうに見つめていた。

シャイアにとっては、この世界がどうなるうが知ったことではなかった。父の仇さえ討てれば、後はどうともなれだ。

それからシャイアは馬車の轍がある道を見つけると、そこで立ち止まった。

「どうしたんだい？」

「町はどっちの方向かしら？」

それはシャイアの独り言だったが、聞いたコツペリアは鼻で笑つて言つた。

「そんな事かい。だったら、あつちの方向に何人かフェアリーが集まっている場所があるよ。そのずっと向こうにはもっともつと沢山のフェアリーがいる」

「そんな事が分かるの？」

「わたしはフェアリーの存在を漠然とだが感じる事が出来るんだよ」「フェアリーの為に存在するフェアリーというだけはあるわね」

シャイアは森の向こうまでずっと続いている道の向こうを見つめて言つた。

「フェアリーが多く集まっている場所は多分シルフリアね。となると、その手前にあるのがクレンシアかもしれない」

シャイアは再び歩き出した。コツペリアは肩に座ったままもう何も言わない。その後シャイアは、昼近くまで歩き続けた。

シャイアの様子は普通ではなかった。並の人間であれば、朝から昼間で歩き通せば苦言の一つや二つはあるだろう。シャイアは無言のまま、目的地を定めた冒険家のように、力強く歩を進める。

「行く当てはあるのかい？」

数時間ぶりにコツペリアが口を開くと、シャイアは首を横に振った。

「じゃあ、どこに向かっているんだい。お前の歩きからは迷いが感じられない。お前は自分の行くべき場所を知っているんだらう」

「行く当てはないけれど、それ以外の当てならあるわ」

「ふうん、これからどうするつもりなんだい」

「決まってるでしょう。お父様の仇を取るのよ。お父様を陥れた奴を見つけて、恐怖のどん底に叩き落とし、醜く無様に這い蹲らせて、最後に殺すの」

シャイアは憎しみと陶醉に、歪んだ苦笑とも歓喜とも取れない笑みを浮かべて、悪魔的な優美さを振りまいた。その様子にはさすがのコツペリアも苦虫を噛んだ。

「仇を取るのはいいが、そんな簡単に犯人を見つけれられるのかねえ」

「必ず見つけるわ。でもその前に力が必要よ。富や権力といった力がね」

「なんだいそりゃあ。さつさとやっちゃえばいいじゃないか」

コツペリアは首をかしげた。シャイアの憎しみの深さをよく理解していたので、そんな悠長なことを言うのが不可解だった。

シャイアは慎重かつ冷徹な人間だ。感情だけで動けば自分の方が敵に討たれる事を心得ていた。

「今のわたしは、恐ろしいフェアリーを連れてるだけの小娘に過ぎないわ。敵はたぶん相当な身分があるはずよ。相手と並ぶだけの力

を持たなければ、簡単に潰されてしまう。たとえあなたの力があつたとしてもね」

コッペリアは不服な顔をして鼻をならした。

「フン、誰が来ようと、このわたしを倒す事なんて出来やしないよ」「そうでしょうね。でも、わたしは普通の人間よ。鉄の玉の一発で簡単に死んでしまうわ。そんな脆い人間を、あなたは守りきる自信があつて？」

コッペリアは黙って悔しそうな顔をして、うんと言えない自分に腹を立てていた。その無言がシャイアに対する答えを十分に与えてくれた。

「だから、力が必要なのよ。すぐにのし上がって見せるわ」

憎しみが、殺意が、シャイアにたゆみなく力を与えてくれた。シャイアの歩はさらに力強く、歩の進みも速くなった。

「死のゲームはもう始まっているのよ。わたしは一つ一つ駒を進め、相手が気付いた時にはチェックメイト、その時お父様を殺した奴らがどんな顔をするのか楽しみね」

シャイアはどうしようもなく暗く歪んだ微笑を浮かべる。今のシャイアには、復讐する事しか見えていなかった。コッペリアはそれを横目で見た。

哀れな娘だねえ。

人殺しが常であるコッペリアですら、全てを失い復讐の炎で身を焦がす少女に憐憫の情を送っていた。

「お腹が空いたよ、シャイア」

日が暮れて森が紅色と影の暗い色彩に染まる頃、コッペリアは急に空腹を訴えた。シャイアはそれを無視していると、

「お腹が空いたよ、シャイア」

コッペリアはそんな言葉を連呼するのだった。あんまりうるさいので、シャイアは幼子を叱る母親のように怒鳴った。

「うるさいわね！ 我慢しなさい！」

コッペリアは切なげな溜息をつく、飛んで来てシャイアの前で両手を開いた。

「何のつもり？」

「寝るから抱っこしておくれ。眠っていれば腹が減ってるのも気にならないだろう」

「仕方ないわね……」

コッペリアは、シャイアに抱かれると、か細い腕の中ですぐに寝息をたてた。コッペリアの穏やかな寝顔は、無邪気な幼子そのものだった。

コッペリアは非情で残酷かと思えば、子供のように幼稚な一面も持っている。シャイアはそれが可笑しくて微笑した。

夜になると、シャイアは大木の根元に座り、コッペリアを抱きながら自分も眠った。コッペリアの温もりがあったおかげで、それほど寒いと感じる事はなかった。

朝靄が漂う薄闇と純白の織り成す世界。そこには靄によって幻想のようにぼやけた姿をしたものが幾つも並んでいた。風が吹きぬけ、靄が蠢くと、その中の一つが姿を現した。四角い石に人の名前と年号が刻まれている。靄の向こうには十字架の影も見えていた。寂寥としていて、まるで人が足を踏み入れることを拒むような不気味さが漂っている。そこはクレンシアという街の近郊にある墓地だった。朝靄漂う墓地の中に動く影が一つあった。その場に似つかわしい漆黒の服を着て、黒いカチューシャまで着けている少女。それはシャイアだった。

シャイアは墓地の周りを掘り起こしている。拾った棒で土を穿っては手で掻き出すという作業を繰り返していた。

コッペリアは飛んでいて、シャイアのやる事をじっと見下ろしている。

お母様、あなたは聡明なお方ですわ。

シャイアは黙々と穴を掘りながら、十五歳の誕生日を迎えたときに、執事のレバンスに告げられた事を思い出した。

レバンスは、母の墓石の後ろ側に相当額の金貨が埋まっていると言っていた。何故そんなものがあるのかと聞いたときのレバンスの答えは、シャイアは今でもはつきりと覚えていた。

『奥様は亡くなる前にこのように言っておられました。ご主人様はお優しい方です、いつか必ず足元を救われる時が来る。その時はお嬢様が、ご主人様をお守りになるようにと。墓所に隠された財産は、奥様がお嬢様の為に残されたものです。十五歳の誕生日が来たら教えるようにと仰せつかっておりました。この事はわたくしとお嬢様以外に知る者はございません。決して他言なさらぬよう』

年老いたレバンスの真剣な顔がまざまざと脳裏に浮かんた。レバンスは、レアードの身に何かが起こることを薄々感じていたのかも

しれない。

シャイアが渾身の力を込めて地面に棒を突き刺すと、先に硬い物が当たった。するとシャイアは、一心不乱に土を手で掻いて、土に埋まっている物の全貌を暴いた。

土中から姿を現したのは、それほど大きくはない金属製の箱で、真上に錆びた取っ手が付いていた。シャイアがその取っ手を持って引っ張っても、土に嵌り込んでいるのと箱自身の重さの為にびくともしなかった。

シャイアが苦戦していると、コッペリアが降りてきて言った。  
「わたしがやるよ」

コッペリアは割り込んで取っ手を握る。鉄製の取っ手が軋み、土の抵抗と箱の重さに耐えかねて悲鳴をあげる。取っ手が壊れる寸前のところで、何とコッペリアは箱を簡単に引きずり出してしまった。シャイアは、コッペリアに秘められた力に、新ためて驚嘆した。驚きもそこそこにして、シャイアは箱の留め金を外して蓋を開けた。瞬間、あまりにも場違いな輝きにシャイアは目を細めた。

箱の中には一枚十万ルビーに相当する金貨がぎっしり詰まっていた。ざっと計算しても臆は下らない額だろう。

その黄金の輝きは、シャイアにとって希望の光そのものだった。

お母様、まさかこのお金が復讐の為に使われるとは思わなかったでしょうね……もう、守るべき人はいないのです。お父様はお母様と同じ場所へ行ってしまったのですから。

シャイアは希望と悲しみを背負って、母の眠る墓地を後にした。

シャイアは金貨を貸し金庫に入れてから、朝のクレンシアを歩いていた。朝市で賑わう人々の雑踏が、シャイアには懐かしかった。カレーニヤ家はクレンシアでも知られた名士だったが、それはもはや過去の事だ。シャイアが今ここにいて感じるものは、心をえぐるような悲愴と不安だった。

コッペリアはシャイアの肩に座って萎れていた。重い金貨を運ん



だ事で、空腹がさらに増して、魂を吐き出すような溜息ばかりついていた。さすがのシャイアも可哀想になってきたので、レストランに足を運んだ。

大衆向けの値段も手頃なレストランは、フラウディア各地にチェーン店があり、人々の人気を集めていた。奥行きのあるガラス張りの建物には、程よい感覚で木製のテーブルと椅子が配置しており、朝からけっこうな数の客が入っている。

「あそこがいいね！ あの窓際の席！」

コッペリアは料理の匂いで急速に元気を取り戻し、シャイアを尻目にさつさと席に座るとメニューを開いた。

シャイアは、コッペリアの一気に上がったテンションに苦笑いしつつ、後から椅子に座った。コッペリアは通常サイズの椅子に座ると、テーブルから頭しか出ないので、人間の子供のようにも見える。「これと、これと、これと、これとね」

コッペリアは次々に指差していく。

「どれだけ食べるつもりなの……」

「いいだろう、腹が減って死ぬ寸前なんだよ」

「大げさねえ」

コッペリアは何でもかんでも食べたいと言うので、シャイアはその要望に答えてやった。

次々と料理が運ばれて来ると、それは客達の注目を集めた。朝っぱらから有り得ない量の料理がテーブルに並ぶのだから仕方がない。その上それをどんどん平らげていくのは、人間よりずっと小さな体のフェアリーなのだ。

シャイアはこの街では目立ちたくなかったので良い顔をしなかったが、コッペリアはそんな事はお構いなしだ。

「何か食べ難いねえ。椅子が低すぎるんだよ」

「あなたが小さすぎるのよ」

コッペリアはナイフとフォークを持ったまま飛び上がり、シャイアの膝の上に降りてきた。

「ちょっと、何をしているの」

「これで食べやすくなった」

コッペリアは何食わぬ顔でシャイアの膝の上に座って食事を続ける。シャイアは溜息をついて紅茶を一口飲んだ。

コッペリアがようやく満足して店を出たとき、シャイアの前にいきなりフェアリーを連れた少女が現れた。彼女はシャイアが店に入るのを見かけて、柱の影ですっと出てくるのを待っていたのだ。

「やっぱり、お嬢様……」

「あなたは………アンナ？」

「そうです、屋敷でお嬢様にお仕えしていたアンナです」

少女があまりにも汚い格好をしているので、シャイアはそれがアンナだと分かるのに時間がかかった。

アンナは青い瞳に涙を溜めて、喜びとも悲しみともつかない光を浮かべていた。

「わたし、もしかしたら誰かが戻ってくるかもしれないと思って、ずっとこの街で待っていたんです」

「誰かが？」

アンナの言い方に、シャイアの冷たい表情が動いた。まるで、屋敷にいた者がすべて消えてしまったような言い様だ。

シャイアはアンナが何か言おうとするのを遮るように、彼女の手を引いて、目立たない路地裏まで連れて行った。その間、コッペリアは二人のやり取りよりも、アンナの肩にしがみついているフェアリーを見ていた。

「あの後、屋敷で何があったの、言いなさい」

シャイアは、アンナの肩を掴んで引き寄せて、まるで脅迫するような陰しさで言った。

シャイアよりもずっと背の小さいアンナは、シャイアの顔を見上げて、瞳に溜めていた涙を零した。

「わたし、よく分からないんです。レバンスさんが、旦那様が撃たれて、お嬢様は連れ去られたと言って、それからとにかく裏口から

逃げろって言つて、わたし必死に逃げたんです。銃声とか悲鳴とかいっぱい聞こえてきました」

アンナはそこで堪え切れずに泣き崩れた。シャイアの足に縋るようにしがみついて、寒さに震える小動物のように弱々しい姿を晒した。

「きつと、旦那様が撃たれたとか、お嬢様が連れ去られたとか、あの時の出来事も、何かの間違いだっと思っていました。お屋敷に戻れば、いつもどおりに皆がいて、お優しい旦那様も、お厳しいお嬢様もいて、でも怖くて怖くて、街にずっと隠れていたら、カレニヤ家がずっと遠くにいつてしまつたつて、街の人たちが噂していたんです」

アンナの話は、涙と嗚咽のために途切れ途切れだったが、それでもシャイアは何が起こつたのか分かつた。

「わたし、噂が気になつてお屋敷に戻りました。そして、もう、何もなくなっていたんです。お屋敷も、お庭も、お屋敷の皆も、何もかも消えて……」

錯乱して泣き続けるアンナを、シャイアは凍りついたような無表情で見下ろしていた。

「わたしたちは運がいいわ。たつた二人だけ、生き残ることが出来た」

アンナの体が強張つた。シャイアは、アンナに信じたくない事実を突きつけた。

「カレニヤ家は消えたんじゃないわ、消されたのよ。カレニヤに関わつた人間は、一人残らず始末されてるに違いないわ」

「そんな、そんな、そんなの嘘ですっ！」

アンナは頭を抱えて、さらに乱れた。何度も何度も頭を振つて、耳に余韻を残すシャイアの言葉を自分の中から追い出そうとしていた。

アンナの肩にしがみついているフェアリーが、光のない虚ろな瞳でアンナを見つめた。そして、慰めるようにアンナの頬を触ると、

アンナはそれで少し落ち着きを取り戻して、頭を振り乱すのを止めた。

「立ちなさい」

シャイアはアンナの手を取って、半ば無理やりに立たせた。

「アンナ、あなたは決してわたしを裏切らない」

「ええ、ええ、お嬢様！ わたしは決してお嬢様を裏切りません！」  
シャイアはアンナをぎゅっと強く抱きしめた。

「わたしは必ずお父様と皆の仇を取るわ。あなたは一緒に来て、それを見届けてちょうだい。いいわね」

「はい、お嬢様……」

シャイアはアンナをきつい抱擁から開放すると、姿の見えない敵に憎悪を掻き立てた。

「このわたしから全てを奪った代償は、あらゆる恐怖、あらゆる苦痛、あらゆる絶望を持って返して頂くわ、必ず！」

アンナはびくつと震えてシャイアを見た。シャイアはもう、アンナの姿を見ていなかった。父に対する愛から生まれる憎しみが、シャイアに鬼か悪魔のような風格を与えていた。しかし、青い瞳はどこまでも深く深く澄んでいて、無垢な憎悪と悲しみが宿っている。アンナはそんなシャイアの姿が、本当に美しいと思った。

かつてカレーニヤの屋敷で庭師をしていたセバスは、今では小さな農場を経営していた。

セバスが農場で馬駆けをしていると、柵の向こう側からじつと自分の姿を見つめる少女がいるのに気付いた。

セバスは少女の姿を遠くから見つめてあと思った。急いで馬を走らせて近づくと、さらに驚愕した。

「君は、アンナじゃないのか？」

「セバス……あなたも無事だったのね」

セバスは一瞬顔を引きつらせて、不自然な間を空けた後に言った。  
「ああ、僕もなんとか逃げ出せたんだよ」

「わたし達以外、みんな殺されたのよ。知ってる？」

「いや……」

セバスはそんな顔をしていいのか分からず、アンナから顔を背けた。アンナに見つめられるほど、セバスは息苦しくなった。

「君は今どうしているんだい」

まるで逃げるようにセバスは話題を変える。アンナはそれに微笑して答えた。

「わたし、どこにも行くところがなくて、偶然ここにあなたがいて聞いたから、会いに来たの」

「そうかい、だったらここで働くといいよ。もちろん給金も払うよ」  
セバスはここぞとばかりにアンナを説得しようとした。セバスは屋敷で働いてたときから、アンナに好意を抱いていたのだ。それはアンナの方でも薄々感づいていた。

アンナは何も答えずに、潤んだ瞳でセバスのこをとじっと見つめて、少女の初々しさと女の艶かしさを漂わせながら、栗色の髪を振り乱して走り去った。

「ま、待つて！ アンナ、どこに行くんだい！」

セバスは馬から下りて柵を乗り越え、アンナの後を追った。

アンナが近くの森に入っていくのを見ると、セバスの胸は否応なしに高鳴る。

だが、森の中で待つていたのはアンナではなかった。黒いドレスを身にまとい、見た事もないフェアリーを肩に乗せた女、その姿を見たとき、セバスはあまりの驚きと恐ろしさに声も出なかった。

「久しぶりねえ、セバス」

「お、お、お嬢様っ！」

「どうしたの？ まるで悪霊でも見ているような顔をして」

シャイアはすくみ上がるセバスから目を離さないで、少しずつ近づいていく。

「今では農場の経営者なんて、お父様の暗殺でどれだけの報酬をもたらったのかしら？」

シャイアは無表情、無感情でセバスに迫った。シャイアの滑らかな肢体から溢れ出す殺意が、セバスをその場に縛り付ける。セバスはついに腰が砕けて尻餅をついた。

「ち、違います。わ、わたしも、命からがらあの場から逃げ出したのです」

「あらあ、おかしいわねえ。あなたはわたしが捕まるのを笑って見ていたじゃない」

「そ、それは、お嬢様の事が心配で……」

「もう嘘はたくさんよ！」

シャイアが叫ぶと同時に、コツペリアの翅が開き、セバスの右手の指が吹き飛んだ。

セバスは何も理解しないまま、人差し指から薬指までが無くなっている手を見て、徐々に表情が険しくなっていた。

「うわあああああつ！！！ 指が、僕の指いつ！！！」

転げ回るセバスの無様な姿を見て、シャイアは暗い微笑を作る。

「正直に言わないと、次は首が飛んじやうかも」

「ひいっ！！？ お許し下さい！！ お許し下さいお嬢様！！」

「お父様の暗殺を企てたのは誰なの」

「フェアリープラント社、僕ははそれだけしか知りません……」

「本当にい？」

「ほ、本当です。僕だってあんな事はしなくなかった。けれど手伝わなければ殺されると脅されていたんです。どうか、お許し下さい」

「……………」

セバスは激しい痛みに耐えながら、息も絶え絶えに、シャイアの足元で命乞いをした。

「それは嘘ね。あなたは最初からお父様の暗殺に関わっていたわ。そうでなければ今まで生きていられるはずがない。その場で懐柔されたのなら、必ず殺されているわよ」

「真実を突かれたセバスは、頭を頂垂れて、シャイアの裁定が穏やかである事を願うしかなかった。

「お父様を撃ったのは？」

「知りません。ただ……」

「ただ？」

「シルフリアで、最も腕のいい撃ち手だと聞きました」

「そう、わかったわ」

セバスはこれ以上ない哀れで情けない顔で、シャイアを足元から見上げる。シャイアは見下ろして微笑した。

「わたしは全てを失ったわ。それなのにあなたは、のうのうと毎日を過ごし、広々とした農場まで手に入れて、不公平だと思わない？」

「い、嫌だ、死にたくない……」

「だあいじょうぶ、命までは取らないわ」

シャイアは肩に乗っているコツペリアに囁くように、しかしセバスには聞こえるくらいの声で言った。

「あの男の右腕を落としなさい」

「わかった」

「うわあっ！！？ 誰か助けてくれーっ！……！」

セバスは慄然と立ち上がって逃げ出した。コツペリアは離れていくセバスの背中を見ながら、真紅の瞳を見開く。それに少し遅れて、セバスは衝撃を受けて前のめりに倒れる。その時、セバスの目の前に、自分の右腕が血煙をあげながら転がってきた。そして森を突き抜ける悲鳴に次ぐ悲鳴、セバスは右腕の切断部を残された左手で押さえて、湧き水のように流れる血で服を染め、胎児のように丸まったまま苦悶した。

「痛い、痛いよお！！？ このままじゃ死ぬ！！？ 助けておくれよお………」

「あなたは死にはしないわ。アンナがお医者様を呼んでいるからね。それにしても、本当に運が悪い人よねえ、事故で右腕を失ってしまったなんて」

それは静かだが絶対的な力を持った脅しだった。セバスは余計な事を言えば必ず殺されるという事を悟らされた。

シャイアは、恐ろしさと痛みですっかり弱ったセバスを後にして、森の奥へと歩いていった。

「殺さなくていいのかい？」

「必要ないわ。あの男は、わたしに対する恐怖に震えながら暮らすのよ。一生苦しみ続けるがいいわ」

ついに死のゲームは始まり、破滅と終焉を司る駒が一つ確実に動いた。

覚醒…… E N D



## 夢幻戦役 - 1

シャイアはクレンシアを離れ、シルフリアの近郊に小さな屋敷を借りた。

シャイアも、そしてアンナも、今までの事で疲れきっているのか、何をするわけでもなく穏やかな時を過ごしていた。

コッペリアは、居間のテーブルに降りて、アンナの連れていたフェアリーと向き合った。

このフェアリーは男の子で、名前はアルと言う。アンナが屋敷から逃げ出すときに、廊下をふらふら飛んでいたので連れてきたのだ。アルはそれといって特徴のないフェアリーだった。背中に四枚ある透明の翅は蜻蛉のようで、黒髪の上にとんがり帽子を被り、くりつとしたインディコライトの瞳が愛らしい。ただ、瞳はいつも虚ろで、アンナの命令がなければ決して動かなかった。

コッペリアがアルの額を押すと、何の抵抗もせずに尻餅をついた。「なんだいこいつは、まるで意思がないじゃないか」

「アルはワーカーですから」

側で見ていたアンナが言うと、コッペリアは訝しい顔をした。

「ワーカー？」

「知らないの？」

「ああ、知らないね。教えておくれ」

「えっと、正確にはフェアリーワーカーって言うんですけど、何種類かの命令だけを実行するフェアリー……とも言えいいかな」  
「ある種の命令だけを実行する意思のないフェアリーよ。命令に従うだけで、喋る事もできないわ。まあ、扱い安い奴隷というところね」

そう言うシャイアは、ゆったりとしたソファに座って何かの書類に目を通していた。

アンナは、シャイアのティーカップに紅茶がない事に気付くと、ティーポットを持ってお茶を注いだ。シャイアは礼も言わず、当たり前のように紅茶を口に運ぶ。

「アルはお料理専門のフェアリーなんです。命令すれば大抵のものは作ってしまうですよ」

コッペリアは、アルの姿を見下ろし、彷彿と湧き上がる怒りで体を震わせた。ただならぬ気配に、シャイアは書類読むのを止めた。

「どうしたの？」

「お母様は、フェアリーは人間と同等の存在だと言っていた。人間と共に歩み、手を取り合い、素晴らしき世界を築いて行く為の、人間と同等の存在だと言っていたんだ。こんなフェアリーがいていいはずがない・・・」

「現実はそのなものではないわよ。フェアリーは人間にとって、便利な道具であり、自身を高める装飾品の一つであり、そして何よりもあらゆる欲求のはけ口となっているわ」

「嘘だ！ そんな事があつてたまるか！」

小さな躯体から、屋敷を揺るがすような叫びが上がった。それにはシャイアもアンナも言葉を失った。

意思を持たないはずのアルも僅かに反応して、濁った目をコッペリアに向ける。

コッペリアは、膝を突いてアルと目線を合わせると、彼のふっくらとした頬を掌で包み込んで目を閉じた。

「これじゃあただの人形だ。生きているとは言えない、フェアリーとは呼べない。今助けてやるからな」

コッペリアはそのまま動かない。シャイアとアンナは、何が起きているのか息を殺して見守った。

「心が強制的に閉ざされているのかい。人間は本当に酷い事をする・・・」

コッペリアの六枚の翅が開き、全身が淡い光に包まれる。その光がアルに移ると、次第にアルの瞳に意思が宿り、英知の光が増して

いった。やがて二人のフェアリーを包んでいた光が消え去ると、コッペリアは立ち上がった。

そして、奇跡が起こった。アルが突然飛び上がり、空中で三回転しながらアンナの目の前まで来て、アンナの目と鼻の先で最敬礼した。

「こんにちはアンナ、僕のご主人様」

「アルが、喋った・・・」

信じられない出来事に、アンナは半ば呆然とした。一般的には、ワーカーが意思を持つ事は絶対に有り得ないと言われていた。

「僕はアンナの事がずっと好きだったよ。アンナは僕が何も分らないって知っていても、色々お話をしてくれたよね。僕の事大切にしてくれたよね。人間達が僕を苛めた時も庇ってくれた。僕は何も喋れなかったけど、心のずっとずっと奥では感謝していたんだ」

「ああ、アル！」

アンナはアルを抱きしめて涙を零した。アンナは、何も喋れずこき使われてばかりいるアルが不憫で、いつも世話を焼いていたのだ。アルに何を言っても答は返ってこなかったが、それでもアルの事が可愛くて、訳もなくアルを苛める料理長に楯突いて殴られた事もあった。アルが喋る事ができたら、自分の言っている事が理解できたらいいのにと、数え切れないほど考えた。そして、それが現実となった時、押し寄せる嬉しさと感動は、口でどうこう言えるものではなかった。

シャイアは信じられない光景を目の当たりにしても、さほど驚いてはいなかった。コッペリアが特別なフェアリーだという事を知っていたからだ。

「何をしたの？」

「お母様から頂いた能力を使ったのさ。普通、自我を失ったフェアリーは、ただの操り人形となり、二度と元には戻れない。だが、わたしには失った自我を引き戻す力が与えられているのさ。アルは、アンナに大切にされていたからよかったのさ」

「良かった？」

「これがもし、人間に酷い扱いを受けているフェアリーならば、自我を取り戻した時から人間を憎み、その命が尽きるまで人間を襲い続ける」

「なるほどね、それは恐ろしい能力だわ」

「そうかね。これはわたしが持つ力の中で、唯一つ平和的な力だと思っているんだけどね」

「それはどうかしら。わたしはエリアノの読みの深さに敬意を表するわ」

「何だって？」

シャイアは笑っていた。まるであらゆるものを知り尽くしたかのような、高慢で嫌らしい笑みだ。コッペリアは自分が弄ばれているような感覚を得て、不快な顔をした。シャイアは明らかに何かを知っている。それが何なのかコッペリアには分からなかった。

「アンナ、いつまでも抱き合っていないで仕事をなさい。辻馬車を呼んで」

「は、はい、お嬢様」

「馬車なら僕が呼んできます」

アルは何も言われないうちに窓から出て行った。

「シルフリアに行けば、全てが分かるわ」

「・・・・・・」

楽しげに微笑するシャイアに、コッペリアは言い知れぬ不安を覚えた。

## 夢幻戦役 - 2

シルフリアは、海岸に発展した都市で、現在ではフラウディアの中心都市となっている。交通機関といえば馬車くらいのもので、それを使うのもある程度裕福な者に限る。大抵の人々は徒歩で移動していた。港には帆船がひしめき、荷降ろしをする水夫の姿が目立つ。さらにルフリアから少し離れた高台には王城があり、そこからまた少し離れて妖精使いを養成するシルフィア・シユーレがある。これらの建物もシルフリアの町並みに溶け込む古風な建造物だ。人々の暮らしたシルフリアの様子から想像できるようにつつましいものであった。

しかし、フェアリーに関する機関だけは異常な発展を遂げている。シルフリアから北に進んだ森の中にフェアリープラントと呼ばれる大規模な実験場があり、フェアリーを生み出す過程で生まれる電気の力によって、様々な最新機器が運用され、実験室ではコンピュータという奇跡の技術まで取り入れられているという話だ。街中にはプラントの運営を司るフェアリープラント社のビルもあった。その二十七階建ての円柱形をしたビルは、最先端の技術を駆使したフラウディア一の建造物であり、木造やレンガの屋敷が居並ぶ中で異彩を放っていた。

シャイアは馬車の中からビルを見ていた。シルフリアの門が近くにつれて、ビルは存在感を膨らませていく。

あの中にお父様を殺した犯人がいる。必ず突き止めてみせる。

シルフリアに入ると、シャイアの言っていた、フェアリーと人間の間係を、探すまでもなく垣間見る事が出来た。

シルフリアの上空には数多くのフェアリー達が飛び交っていた。幻想か楽園か、世界に迷い込んだような光景だ。それは、あくまでも表面的な世界だった。

コッペリアは呆然としている。どのフェアリーも目が虚ろで、意

思を持っていない事が知れた。

「そんな……お母様の叫びは届かなかったのか……」

宙で肩を落とすコツペリアを、通りがかる人々は一人の例外もなく見上げていった。容姿が普通のフェアリーと大幅に異なっている。こついうのは、大抵は上位のフェアリーなのだ。

「ふらふらすんな、このポンコツが！」

コツペリアがその声を聞き、振り向いたとき、真紅の目がきつと鋭くなり、殺意で満たされた。

小太りの中年男が、四人のフェアリーを荷馬車に繋いで引かせていた。荷引き用のワーカーである。フェアリーたちは小さな体でありながら、一人でも牛や馬に匹敵する力があつた。男は牛や馬にそうするように、持っている棒でフェアリーたちを叩いていた。

コツペリアは男の目の前に急降下した。

「なんだ、こいつは……」

男は目を白黒させていると、コツペリアは静かに言った。

「可哀想だろう、フェアリーたちを解放しな」

「な、何言ってやがる」

「開放しなければ、お前を殺す」

男は真紅の瞳に睨まれて、声帯麻痺がしたように声が出なくなつた。男をそうさせたのは、今までに感じた事のない恐怖だ。

「おやめ、コツペリア」

振り向いたコツペリアは、今にも泣き出しそうな顔をしていた。冷たい氷で閉ざされたシャイアの心が、哀れみで疼く。

「だって、こいつはフェアリーを家畜のように扱っているんだよ。わたし達はこんな事をするために生まれて来たんじゃないんだ！」

「言ったでしょう、あなたはきっと人間を滅ぼしたいと思うって。この男のしている事が、人間とフェアリーの関係を象徴しているのよ」

「こんなの、認めない、わたしは……」

「これが現実なの。フェアリーと人間が共存する理想郷なんて、虚

妄もいいところだわ。フェアリーは人間に利用するだけ利用されて、最後には捨てられる。それだけのものよ」

そして、シャイアの言葉を体現するように、コッペリアにとってさらに残酷な現実が押し付けられた。

裏路地から出てきた数人の子供達のはしやぎながらフェアリーを追いかけていた。ただ追いかけてっことをしているのではなかった。金髪で全裸に近い状態のフェアリーは、体中傷ついていて、血を滴らせていた。子供達は、飛ぶことがやっとのフェアリーに、次々と石を投げつける。そして、一番前を走っていた男の子が、コッペリアの直ぐ近くで、フェアリーを棒で叩き落した。墜落したフェアリーは、何度か翅をばたつかせた後、それっきり動かなくなった。

これは、シルフリアの子供達が日常的にやっている遊びだった。野良になったフェアリーを見つけては苛め殺すのだ。

コッペリアの怒りは頂点に達し、人間の子供たちをばらばらに切り刻む姿が脳裏にフラッシュバックする。シャイアの厳しい視線が、それを実現する事を許してくれなかった。

「その男からフェアリーを解放しても、悪い子供達を殺しても、何も変わりはないわ」

シャイアは、コッペリアの気持ちを看透かしたように言う。

「うつ……うあああっ！」

コッペリアはついに自分を押さえきれなくなり、子供達が打ち殺したフェアリーを抱えて上空に飛び上がり、色彩が蠢く闇色の翅を開く。すると、コッペリアを中心に光の波紋が広がった。波紋は町全体に行き渡るほど大きく広がって消える。その時、街中のフェアリーたちの動きが止まり、コッペリアのいる空を見上げる。

「可哀想な姉妹たちよ！　いつか必ずお前達を自由にしてやる！　この罪深い世界から、地獄のような世界から、その無垢なる魂を救い出す！　わたしの命を懸けた約束だ！」

コッペリアは青空に向かって誓いを立てた。すると、コッペリアに抱かれていたフェアリーは、体中から光の粒を散らせて消えてい

く。傷ついてボロボロの体だったが、消える間際の顔は安らかだった。

それから、何事もなかったかのように、フェアリーたちは動き出し、人間に蹂躪された日常に戻っていった。



### 夢幻戦役 - 3

ニルヴァーナは、開け放った窓際に立ち、目を閉じた。

椅子に座って点字の本を読んでいたセリアリスは、小さな従者の異変に気付いて言った。

「どかしたの？」

「聞こえる・・・コッペリアの声・・・」

「声？」

ニルヴァーナは目を開けて天を仰ぐ。

「とても悲しい・・・」

セリアリスは立ち上がり、ニルヴァーナを後ろからそっと抱いた。  
「そんなに悲しい声なの」

ニルヴァーナは無言、ただ一度頷いただけだった。彼女は知っていた。コッペリアの声が、妖精史の終わりと始まりを示唆している事を。

帰ってくると、馬車から降りたコッペリアは、弱った蚊のようにふらふら飛んで、屋敷の中に入って姿をくらませた。

シャイアが探してみると、コッペリアを寝室のベッドで見つけた。コッペリアはベッドに体を埋めて、声を殺して泣いていた。

出かける前のシャイアは、コッペリアがこんな姿をさらすのを楽しみにしていた。いつも冷静な可愛らしい殺人鬼が、ショックを受けのを見てみたいと思っていた。が、いざそれを目の当たりにすると、言いようのない哀れみに襲われるのだった。

「泣いたってしょうがないでしょう。あなたのそんな姿見るのは気味が悪いわ、止めなさい」

シャイアは他人を励ましたり褒めたりした事がないので、どうしたってそんな言葉しか出てこない。コッペリアは泣き続けるばかりだった。

シャイアは眉をひそめて苛つきを面に出すと、コッペリアに両手を伸ばし、表情とは裏腹に優しく抱き上げた。それからベッドの端に座ってコッペリアの頭をなでてやる。それをしばらく続けた。

「聞いておくれよ、わたしたちの話を」

「ええ」

シャイアが短く答えると、コッペリアは自分が生まれた頃の話をした。それは今から五十年前の事、そして夢幻戦役という戦争が起こった時代でもあった。

いくつかのランプが淡い輝きを燈し、狭い部屋にある試験管やフラスコや、さらには何に使うのか検討もつかない機械類を、光が浮き彫りにしていた。その中でも特異だったのが人間の子宮を模倣した四つの水槽だった。それらは全て魔法の羊水で満たされ、一つ一つの水槽で小さな少女が膝を抱えて眠っている。蝙蝠の翼、漆黒の翼、六枚の翅、蜻蛉の翅、少女達はそれぞれ背に翼を持っていた。水槽の一つ一つを、愛おしそうに見ていく女がいた。その姿は部屋の雰囲気似合わないもので、額には涙型のダイヤをあしらったサークレットを飾り、煌びやかなドレスを着ている。

銀に限りなく近い金髪はランプの炎で鮮明に輝き、堀の深い顔は目の覚めるほど端整だった。瞳は穢れのない湖のように緑味のある青で、その宝石のような輝きは、深い知性の現れだった。

この女性こそ、コッペリアの生みの親にして、フェアリーの創造主と呼ばれている、伝説の妖精使い、エリアノ・ミエルだった。

「もう少しだけ我慢してね。目が覚めたら、みんなでお散歩にいきましょうね」

エリアノは実の子供に語りかけるように、コッペリアの水槽を覗き込んだ。その時、コッペリアは薄く目を開けて、エリアノの微笑む顔を見た。それは、五十年経っても色あせる事のない光景だった。エリアノは、四人の黒妖精の誕生を間近にして、これから成すべき事を考えた。

フェアリーは人間に尽くす存在、害をなす事は殆どないわ。このフェアリーたちを元にして、もつとたくさんフェアリーが生まれれば、人間とフェアリーの織り成す平和な世界が出来上がるはず。エリアノは、実現可能と信じている理想郷を思い描いて何ともいえない歓喜を感じた。だが、それを完全に否定して、十分に起こり得る最悪の事態も考えない訳にはいかなかった。

人間は、楽をしたがる動物である。自分の事だけしか見えない人間も多い。世界中のどんな動物もやらない愚かな行為を人間は簡単にやってのける。そんな人間ばかりがフェアリーを利用しようとすれば、どんな事になるのか、考えれば考えるほど恐ろしかった。

エリアノは迷った。人間の優しさと英知を信じたかった。だが、その真逆にある悪魔的な性質も見逃すわけにはいかない。

フェアリーたちを解き放つのは止めた方がいいのかもしれない。  
。。

あまりに迷って鬱々としたエリアノは、そんな事も考えた。しかし、自分の娘同然のフェアリーたちを今更消す事など考えられなかった。そして、一つの結論に至った。

人間がフェアリーたちを苦しめるような事になれば、その時は、絶対に許さない！人間がわたしの可愛い子供たちを苦しめるような世界を作ったら、その時は罰を与えましょう。

エリアノは空想の世界に怒りを煮えたぎらせ、人が変わったように険しい形相になっていた。彼女は瞬間だけ、恐ろしい狂気に支配されていた。

エリアノは黒妖精たちを見ながら、一人一人の能力を頭の中で計っていく。そして、一つの水槽の前で足を止め、中のフェアリーを覗き込む。

「コツペリア、あなたがいいわ。もしフェアリーたちが不幸になったら、救ってあげるのよ。出来るわね」

そしてエリアノは、コツペリアにだけ特別な仕様を与えた。通常、フェアリーと契約する場合、選択権は完全に人間側に依存されるの

だが、コッペリアに限っては契約する人間を選択する事ができた。  
来るべき時に、コッペリアが使命を果たすためには、そうする必要  
があったのだ。

## 夢幻戦役 - 4

フェアリーとは、森の精霊力が宿った土と、コアという魔法の宝石から作り出される人工生命体である。コアは人間で言う心臓に当たり、それ以外の器官は人間と殆ど変わらない。契約を結ぶときはフェアリーの持つコアと同種の宝石が必要になり、コアが良い宝石であるほど、フェアリーの持つ力も大きくなる。そして、瞳の色や輝きが、コアである宝石を象徴する特徴を持つ。

エリアノは、フェアリーたちを世に解き放った。エリアノが生み出した四人の黒妖精たちを元に、多くのフェアリーたちが生まれ、人間達の生活を支えるようになっていった。この頃のフェアリーは、クリエイターたちが一つ一つ丁寧に作っていたので、生まれるまでに時間はかかるが、その代わりに高い能力を持っていた。

それから数年後、フラウディアは史上かつてない不運に見舞われる。海の向こうから、バシュツールと呼ばれる帝国の軍が、フラウディアに侵略戦争を仕掛けてきたのだ。軍勢力というものを殆ど持たないフラウディアは、ひとたまりもなかった。

抵抗らしい抵抗もなく、次々と主要都市が制圧され、残るは中心都市フェアリーランドだけとなった。その時、帝国軍に対抗し得るとして、密かに期待されていた戦力があつた。それにいち早く目をつけたのが、その当時フラウディア王国の大臣だった克蘭セル・コンダルタだった。

克蘭セルは、エリアノが行方不明になる直前まで、フェアリーの軍隊化を唱えていたという。

「フェアリーはシフルリアで生まれた独自の生命体です。諸外国にはほとんど知られていない」

克蘭セルは、女王エリアノに冷笑を見せながら語った。

齡五十近い男の髪には白髪が混じり、人を小ばかにするような笑みには心底にある狡猾な性質が現れている。

「驚くべきは、フェアリーが人間以上の力を持っているということです」

目を閉じてじつと話を聞いていたエリアノは、目を開けて克蘭セルを見つめる。

「何が言いたいのですか」

「バシュトール帝国軍によって、フラウディアは風前の灯火です。今すぐクリエーターと妖精使いを集めるのです」

「彼らを集めてどうしようというのですか」

エリアノの視線が鋭くなり、眼光の刃が克蘭セルに突き刺さる。それでも彼は平然としていた。

「決まっています。フェアリーを戦わせるのですよ。小さな勇者たちは、帝国の魔の手から必ずやフラウディアを救ってくれるでしょう」

「フェアリーは人の心の支えになるべきものです。それ以上の事をさせてはいけないのです。特に武力として使うことだけは決して許しません」

「何故ですか？ 女王様は、このままシルフリアが帝国に滅ぼされても良いと言うのですか？」

「滅びはしません。無条件降伏をするのです。そうすれば誰も傷つかずに済みます」

「国民が我々の言い分を聞いたらどう思いますかな」

克蘭セルの声には聞く者を圧迫するような重みがあった。エリアノは何も言えず、目を細めた。エリアノが思慮に苦しんでいる様子が、克蘭セルには愉快でたまらなかった。

「今だけを見るわけではありません。国政というものは先の先を見極める必要があります。フェアリーを武力として使えば、百年……いえ五十年もしないうちに、人間は悲劇を生み出すでしょう。それこそ、一国を滅亡させるほどの悲劇です」

「もう良い。あなたの理想論は聞き飽きました。国を守る力がありながら、それを行使しないとは、あなたは女王失格です」

克蘭セルが指を鳴らすと、荒々しい足音をたてて武装した衛兵がなだれ込んできた。

「克蘭セル……」

「ふふふつ、愚かなる民衆出の女王には、この辺り降りていただきましょう。さらば、エリアノ。さらば、フェアリーの創造主よ」

エリアノは全てを予期していたように落ち着いている。ただただ、悲観に暮れた瞳で克蘭セルを見つめていた。瞳の奥には、これからフェアリーと人間に起こるであろう悲惨に対する哀れみが、深く深く刻まれていた。

「諸君、よくこの場に集まってくれた。礼を言う」

シルフリア王城内の広大な広場に、妖精使いが大勢集まっていた。そのほとんどが背丈が幼児程度の小人を連れていた。性別は男女共にあり、容姿は様々で、すべてが翅や翼をもっている。彼らを目下にして克蘭セルは叫んだ。

「今、帝国の足音が近づきつつある。シルフリアに侵略する時は近い。しかし、奴らの思い通りにはさせん。我々にはフェアリーがいる！ フェアリーの力を、素晴らしさを世界に知らしめる時が来たのだ！」

空気が重い。フェアリーが作られた理由は、人間の心の支えとなり、道徳的に導くという目的のためだ。多くのフェアリーがその為に働いてきた。障害者の介護、子供たちの遊び相手、人と心を通わせて人のために尽くすのが今までのフェアリーの在り方だった。当然フェアリーと関わりを持つ人間も、そう考えている。克蘭セルの言うようなことは受け入れ難い。克蘭セル自身もそれはよく知っていた。だから、彼は泣いた。

「頼む、シルフリアを救ってくれ！ もう頼みは君たちしかないのだ！」

湿った声が響き渡る。克蘭セルには芝居の才能があるようだ。その言葉は、その場にいた人間には心からの叫びに聞こえた。

「君たちがフェアリーを戦わせるのが本意である事は良く分かっている。それでもあえて頼む！ シルフリアを、人々を救ってほしい！ 正義のために立ち上がってくれ、小さな勇者たちよ！」

克蘭セルは両膝をつき、両手を広げて天を仰いだ。渾身の演技である。まるで神に懇願するような姿に、見ていた人々の心は動かされた。

どつと歓声が沸きあがる。妖精使いたちは国を守るという正義に燃えた。力を使い切ったようにうなだれる克蘭セルは、俯いたままほくそ笑んでいた。

その日、百を超えるフェアリーの一団がフェアリーラントを發った。

民衆たちは光り輝く軍隊を見上げていた。

人々はフェアリーがどれほどの力を持つのか知らない。フェアリーたちは、ただ人間の生活に入り込み、人間の為に尽くしてきた小さな存在だった。それが戦う姿を想像するのは困難な事だった。だから心ある人々は祈った、彼らが無事に帰ってくる事を。

空を進むフェアリーの軍を上から見下ろす黒い姿が四つある。それはコツペリアとニルヴァーナ、その他に黒髪に蜂蜜色の猫目と黒い翼を持つシルメラと、銀髪にコーンフラワーブルーの瞳と群青の翅を持つテスラという黒妖精だった。

「一万や二万の軍隊なら、わたし達だけでも何とかなるだろう。でも、帝国軍は十万を超える軍隊がいるという。それが一気になだれ込んできたら、さすがにどうにもならないな」

シルメラが言うと、コツペリアが侮るように歪んだ微笑を浮かべる。

「帝国は完全に油断しているさ。今フラウディアに在るのは、主力部隊五千程と、予備の増援軍二千程度さ。再び兵を挙げるのにはか



なり時間がかかるだろうねえ」

「それまでに何とかしなければ……」

「わたしが蹴りをつけてやるよ」

コツペリアが言うと、他の黒妖精たちの視線が集中した。

「どうするつもりだ？」

「今に分かるさ」

コツペリアは、これから楽しいパーティーでも始まるような、いきいきとした表情をしている。ただ、真紅の目が獣的にぎらついて、シルメラはそれに嫌なものを感じた。

「……まあいい。わたしとニルヴァーナは夜になったら敵を叩く。わたしたちは夜の方が本領を発揮できるからな」

「承知……」

「あの、わたしはどうしたらいい……？」

テスラがおどおどしながら控えめに言うと、コツペリアが睨んだ。テスラは、ひつと言って後退りする。明らかにコツペリアを恐れているようだった。

「戦う気があるのなら、シルメラとニルヴァーナについていきな」

「えっ？」

テスラは困惑の色を浮かべる。

「戦う気がないのなら聞くんじゃないよ。さっさとどっかにいっちゃまいな」

「ふうう……」

テスラは青い瞳に涙の輝きを加えて俯いた。シルメラがそれを慰めるように言った。

「まあ、そう言うなよ。わたしたちは人間と同じで、向き不向きってものがある。テスラは戦いが終わるまでマスターを守ってやれ。何が起るか分からないからな」

ニルヴァーナがテスラの肩に手を置いて頷く。そのすました顔が、テスラは何よりも嬉しかった。

「ありがとう、姉様たち」

テスラはその場を去り、マスターの待つノルンの村に向かって飛んでいった。

「情けないねえ。あれがわたしたちと同じ黒妖精なのかね」

「わたし達は戦う為に生まれてきたんじゃない。戦いを拒絶するテスラの方が、本来あるべき姿なんだ」

「フン、あんな奴、いてもいなくても同じだけどねえ」

「……言い方よくない……」

シルメラとニルヴァーナの責める視線を浴びても、コッペリアは鼻で笑うだけだった。

「妹思いな姉さん達か。わたしには姉妹なんて関係ないね。与えられた使命を全うするだけさ」

コッペリアは六枚の翅を開くと、姉達を爆風に晒して地平線の向こうに消えていった。

エリアノは、地下に建設された牢獄の最下層に幽閉された。

牢の出入り口は分厚い鋼鉄の扉一つだけ。何もない狭い部屋は、明りすらなく、息が白くなるほど寒い。生けるものの気配は何一つなく、食事もなければ、見回りの兵すら来なかった。普通の人間なら、入って一日で発狂してしまうような地獄だが、エリアノはさらに両手両足を鎖で縛られ、冷たい鉄の壁に礫にされていた。

この地下牢は静かなる処刑場だった。表立って処刑できない者を死ぬまで閉じ込めておくのだ。

エリアノが閉じ込められてから七日が経っていた。妖精の母は、強靱な精神力で今まで奇跡的に生き延びていたが、寒さと飢餓で命はあとわずかだった。

頭を頂垂れ、もう意識は混濁して、寒さすら感じられない。どこからか聞こえてくる水滴の落ちる音も耳に届かない。彼女はそのまま死んでいくはずだった。

エリアノの遠くなっていく意識を呼び戻すように、今まさに戦いを始めんとするフェアリーたちの意思が、エリアノの中に流れ込ん

できた。

「ああっ！」

エリアノは突然叫び、鎖を引きちぎらんばかりの力で手足を動かした。彼女は目の前にフェアリーたちがいるような気がして、手を伸ばそうとしたのだ。手首と足首が擦り切れて、鎖が血塗られていく。

「わたしの可愛い子供たち、戦ってはいけません！ 戦えば歯車が狂ってしまうのです！ あなたたちは不幸になってしまうのです！」

エリアノは死んだように脱力して、弱々しく息切れした。そして、エリアノの中にあるあらゆる力が集中し、世界の外にある巨大な意思と精通すると、残された命を超える力で彼女は叫んだ。

「空よ、全てを創造する偉大なる命よ！ どうか人間に英知を、優しさをお与え下さい？ わたしの可愛い子供たちをお守り下さい、どうか、どうかっ？」

その命を懸けた叫びは、地下深くから、フラウディア中に広がった。その時、フェアリーの軍隊も、それぞれ行動していた黒妖精たちも、まったく違う場所にいながら全てが同時に止まって、フェアリーラントの方を見た。

殆どのフェアリーは、エリアノの声をはつきりと聞く事はできなかった。ただ、心の中に悲しみを誘う響きのようなものを感じただけだ。その中でたった二人だけ、エリアノの声を聞く事が出来たフェアリーがいた。

その一人であるフレイアは、フェアリーの部隊を率いていた。彼女は紫銀の髪にダイヤのように輝く緑の瞳と、背中には光り輝く翅を持つ流麗な姿をしたフェアリーだった。そしてミニサイズの防具を装着し、白いフレアスカートには深いスリットが入っていて、その姿は神話の戦乙女を彷彿とさせるものがある。

フレイアは、エリアノの手によって最初に作られた、起源のフェアリーである。

不意にフレイアが立ち止まってフェアリーラントのある方向を見

つめた。同時に行軍も止まり、他の妖精たちもフレリアと同じ方向を見つめる。フレリアのように声は聞こえないが、何かを感じているのだ。

「お母様の声が聞こえます」

フレリアが言くと、側にいた七色の瞳と翅のフェアリーが、目を丸くした。

「今のは、お母様の声なの？」

フレリアは頷いて目を閉じる。

確かにお母様の言われる通りかもしれませんが。このままではフェアリーは不幸になるでしょう。しかし、これもまた意味のある事だと思ふのです。いつか必ずお母様の声は届きます。わたしはそれを信じて、今は戦おうと思います。

フレリアの手に光が宿り、それは矛の形を成して具現化した。フレリアは手にしたそれで、敵の待つ方角を指した。

「エクレア、行きましょう。今は戦うのです！」

七色のフェアリーが頷き、フェアリーたちは再び動き始めた。

もう一人、エリアノの声を聞いたのはコッペリアだった。コッペリアは海の上に浮遊して、遠くにあるフラウディアの海岸を見つめていた。

お母様、人間たちが道を踏み外したならば、その時に必ずわたしは現れ、姉妹たちを救います。愚かな人間どもに、お母様の悲しみを、姉妹たちの苦しみを、思い知らせてやりましょう。

二人の声は、エリアノの心に届いていた。思いも性質もまったく異なるフェアリーたちだが、一つだけ確かな事は、彼女等がエリアノを心から愛しているという事だ。

エリアノはフェアリーたちの声を聞いたのを最後に、ゆっくり目を閉じて、穏やかな顔で眠った。それが、フェアリーの創造主と呼ばれたエリアノの最後だった。



## 夢幻戦役 - 5

帝国軍の尖兵は五千程の騎馬隊だった。特に優秀な騎士ばかりを集めた精鋭部隊だ。彼らは海岸線から進攻してシルフリアを制圧し、そこから南に向かってフェアリーラントを目指していた。

帝国軍首脳部は、この尖兵だけで決着がつくと踏んでいた。それも当然の事だ。これから攻めようとしているフェアリーラントには軍事力がないのだ。

帝国軍の侵略は特に邪魔も入らずにすんなりと進んだ。誰も抵抗はしない。無条件降伏に近い状態だ。少なくとも首都フェアリーラントまではそうだった。

フェアリーラントを目前にした五千の騎馬隊は、重厚な鎧に身を包み、立ちほだかる者全てを容赦なく打ち砕く悪魔の軍で、まったく抵抗しないシルフリアの人々を虐殺していた。

「おい、何だあれは？」

先頭の列をいつていた騎士の一人が遠くを見つめて言った。隣にいた騎士も釣られて額に手をかざす。

「鳥の群れか？」

「・・・違う、あれは鳥じゃない」

「じゃあ何なんだ？」

「わからないな、一応警戒を・・・」

先頭の騎士がそういいかけた時だった。前方に光が煌き、数瞬後には七色の波動が隊列の中央を貫いた。騎士たちはその光に飲まれて消滅した。

帝国軍は一瞬にして相当数の戦力を失った。いきなり謎の攻撃をしかけられて混乱する。隊列は乱れ、命令系統は迷走、もはや錯乱状態だった。

乱れる軍の上空に光が下りてくる。その姿を見た者は、神々しい姿に混乱を忘れた。

少女の背中にある透き通った蝶の形の翅は七色に煌き、見る角度によって色合いが変わる。黒い瞳にも同じような輝きが乗っていた。七色のフェアリー、エクレアの光臨だった。

「なんて美しい・・・」

騎士たちが感じている魅力は、男が女に感じるものとはまったく異質、例えるならこの世に二つとない至高の宝石を見ているような感覚だ。

「何で来たの？ あなたたちが来なければ、こんなに苦しい思いをすることもなかったのに・・・」

四枚の翅が眩い光を放つ。すると、地面に巨大な魔方阵が浮かんだ。騎士たちは奇怪な現象に戸惑うばかりだった。

「地に雷帝、空に雷神、愚かなる者どもに裁きを与えよう！」

無垢な少女の声が響くと、魔方阵が帯電して、電気が弾けて音を立てる。魔方阵の上にいる騎士たちはわけが分からず眉を寄せた。

七色の少女が片手を天に掲げると、魔方阵から凄まじい電流がほとばしる。魔方阵の上は瞬時に地獄と化した。地上から空に幾筋もの電流が走る。言うなれば地から空へと逆行する稲妻だ。魔方阵の中にいた兵士はひとまりもなかった。声を上げることも出来ずに消し炭になって倒れていく。

その後で小さな兵団が帝国軍に接近してきた。それは言うまでもなくフェアリーラントを守るフェアリーたちだ。

帝国軍五千の兵力に対して、フェアリーの数は百あまり。数の差は歴然としているが、フェアリーたちの力は常軌を逸していた。

火の玉や光線が矢継ぎ早に帝国軍に打ち込まれる。ある者は爆撃に巻き込まれ、ある者は閃光に貫かれて、帝国の騎士たちは次々と倒れていく。

「虫けらどもめ！ 何をしている矢を持て！ あんなものさつさと撃ち落としてしまえ！」

指揮官の檄が飛ぶ。フェアリーの一団に無数の矢が迫った。

その時、白い翼を持った天使の様な少女が出てきて両手を前にかざ

した。すると、微量の光を放つ膜がフェアリーたちを包み込む。矢は硬い音をたてて、光の膜の前に弾かれた。

「ばかな・・・」

指揮官は呆然とした。その視界に三人のフェアリーが飛び込んでくる。彼らは翅の色から服の色まで、赤、緑、橙と、一人一色に染まっていた。

指揮官はあつと声を出した。いきなり地面から蔓が伸びてきて、指揮官をがんじがらめにしたのだ。周りの部下たちも同じように捕まっていた。蔓はか細い割には恐ろしく頑丈で、もがくほどに体を締め付けた。さらに炎の嵐と大地の錐が追い討ちをかける。ある者は火達磨になって転がり、ある者は隆起した大地に貫かれた。指揮官も例外なく犠牲になった。

フェアリー部隊が帝国軍の上空にさしかかると、武具を持ったフェアリーたちが降下した。

帝国の騎士たちはチャンスだと思った。体も小さければ武器も小さいフェアリーだ。まともにやり合って負けるはずはないと誰もが信じたかった。しかし、勝算がなくて敵と戦うほどフェアリーたちは愚かではない。

突撃するフェアリーたちの先頭に行くのは、輝く翅を持つフレイアだった。左腕に光の盾を付け、右手には光の矛を持つ。彼女が地上につくと、帝国騎士が斬りかかってきた。それは造作もなくよけられ、騎士の背中を光の矛が袈裟斬りにする。騎士は血を噴出し、声もなく倒れた。

「かかってくると言うのなら容赦はしません」

フレイアは言った。それは騎士たちに対する警告だったが、逆に火をつけてしまった。

「このチビが！ 調子に乗るなあ！」

数人が同時にかかっていくが、フェアリーは体が小さい上にすばしこいので、捉えるのは容易ではない。どう斬り込んでも当たらない。フレイアはよけた後にカウンターで斬り返した。最初に斬りか



かった騎士は頭部を兜ごと縦に割られ、次に攻撃してきた二人の騎士は、それぞれ首と胸を裂かれて、三人は血煙をあげて同時に倒れた。

フェアリーたちの持つ武器はミニサイズだが、魔力が宿っていて見た目とは相反する破壊力がある。それは騎士たちの鎧兜を難なく破壊して致命傷を与える。

騎士たちはフェアリーの戦士に次々と倒されていく。フェアリーの小さな体に秘められた力は絶大だった。帝国軍は途方に暮れた。

「撤退！ 撤退ーっ！」

もうそうするしかない。まったく予想もしなかった敵に想像を絶する攻撃、混乱は頂点を極め、帝国軍は完全に決壊した。

この日の夜は満月だった。

白銀の月に写る影が二つあった。月に浮かぶシルエットは蝙蝠と鳥のようであるが、月光が照らし出すそれらの姿はまったく別のものだった。

薄明に浮かぶ者は、一人は黒い翼に猫のような瞳と自分の体よりも大きな鎌を持つ少女、もう一人は蝙蝠の翼と闇に光る赤紫の瞳を持つ少女、シルメラとニルヴァーナだった。

シルメラが羽ばたき止めて闇夜の空に静止する。ニルヴァーナもそれに習った。

シルメラは言った。

「本当にこれでいいのか？」

「・・・・・・」

「ニルヴァーナは何とも思わないのか？ これから人間と戦うんだぞ」

「・・・・マスターの命令だから・・・・・・」

ニルヴァーナは無表情で答える。まるで感情というものが感じられない。

「マスターだって、本当はわたしたちを戦わせたくないんだ」

「知ってる・・・」

「フェアリーは人を守るために生まれたはずだ。それなのになぜ人と戦わなければいけない」

「シルメラ・・・」

ニルヴァーナは、シルメラをじっと見つめた。シルメラはしかめ面のまま黙っている。

「・・・マスターの命令は絶対・・・」

「昼間の戦いでは、多くのフェアリーが心を失った」

「わたしたちはそうはならない・・・宝石の輝きが強いから・・・」

「・・・いまさら、うだうだ言っても仕方ないか」

シルメラは余計な事を考えるのを止めた。どの道もう後戻りする事は出来ないのだ。

ニルヴァーナは静かにシルメラを見つめていた。赤紫の瞳には、今にも叱咤されそうな凄みがある。

「・・・もう行く・・・」

ニルヴァーナが闇色の翼を広げて先へ行くと、シルメラは肩を落としてニルヴァーナの後を追った。

二人がいくらかも飛ばないうちに森の中にいくつも光点が見えた。

撤退した帝国軍の焚き火だ。

「見つけた・・・」

「行こう」

二人は漆黒の翼をばつと開いて急降下した。二人の降下速度はぐんぐん上がり、地上つく寸前で直角に曲がって地上と水平に飛ぶ。小さな体でありながら、周りの草木に風圧を撒き散らす程、凄まじい速度だった。そして、帝国軍の陣営が近づいてくるとまた急上昇する。

「二人だけで全滅させる。中途半端に潰すとまた攻めてくるからな」

「・・・了解・・・」

帝国軍を包み込む空気は疲れきっていた。その場にいるだけで気が持ちが沈むような雰囲気だ。

数人の兵たちが焚き火を囲んで話をしている。

「昼間のありやあ一体何だったんだ」

「俺には夢だったように思えるよ」

そう言った男が焚き火に薪を投げ込む。誰もが昼間の出来事を思っていた。途轍もなく恐ろしい、しかし神秘的な体験だった。

「このまま撤退するのか？」

「それはないな。あんなちっこいのにやられて撤退しましたなんて認められるはずがないさ」

「明日には援軍が来て強力な弓を配給するらしい」

「弓なんて、まったく効かなかったじゃないか・・・」

何の予兆もなく焚き火の炎が激しく揺れた。兵士たちは訝しい顔をする。突然、真上から不自然な強風が吹いて焚き火を掻き消した。

「何だ？」

兵士たちは武器を取って立ち上がる。円陣の真ん中に気配が下りてきた。闇闇なので姿は見えないが、何人かは闇の中で光るキャッツアイを見た。

「人間たちよ！　せめて安らかに眠れ！」

闇に閃光が走る。シルメラは大鎌を持ったまま三百六十度回転した。それに数瞬遅れて兵士たちの首が真上に吹き飛んだ。闇の中に血が勢い良く噴出す異様な音がする。シルメラはその身に血を浴びて立ち尽くした。

「ついに、やってしまった・・・」

シルメラの近くで複数の悲鳴が響いた。

ニルヴァーナは敵とすれ違う瞬間に急所を断った。喉を裂かれた兵士たちが血を吹きながら転がる。ニルヴァーナの攻撃があまりにも早いので、襲われた者は何も理解できずに沈んでいった。

辺りが騒がしくなった。誰一人何が起こっているのか理解できていない。次々と仲間が倒されていくのに敵の姿が見えないのだ。

「どうなっているんだ！　誰が、誰がこんなことを！」

惨状を見た帝国の騎士たちは震えた。残酷に切り刻まれた死体は、

人間の仕業とは思えなかった。恐ろしい存在が森の中に紛れ込んでいる。彼らの脳裏に昼間の戦いがまざまざと蘇った。

「これも、フェアリーの仕業なのか・・・」

その時、木々の間から黒塗りの鎌が激しい回転をとまって飛んできた。騎士たちは迫ってくる鎌から散々に逃げ出した。だが、黒い鎌はまるで意思があるように正確に騎士たちを追い回す。一人、また一人と、後ろから胴を断たれて絶命していく。

夜の森は地獄と化していた。帝国兵は引くことも戦うことも出来ずに、見えない敵に命を奪われていった。

「もう嫌だ！ 誰か俺を助けてくれーっ！」

男が一人、助けを求めるように焚き火の明かりの前に来て叫んだ。その男の前に雫が落ちた。男は雨かと思ったが、良く見るとそれは赤かった。

「血！」

見上げると、男が生まれて初めて目にするものがいた。背中合わせに浮いている漆黒の翼を持つ少女たち、一人は血染めを鎌を持ち、もう一人は両手から返り血を滴らせていた。焰に照らされる彼女たちの姿は、何よりも恐ろしく、そして幽玄だった。

「悪魔か・・・」

男は呆然と黒いフェアリーたちを見ていた。そこに仲間が集まってくる。すると、黒い存在から詩のような言葉が紡がれた。

「闇の王は羽ばたき」

「深淵に流るる風を起す・・・」

「命を吹き消す死の風は」

「生を砕く滅びの調・・・」

二人の黒い翼がより大きく広がり、急激に黒い竜巻が起った。近くにいた人間たちはたちまち飲み込まれ、死の螺旋に巻き込まれた。竜巻はとどまるところを知らず巨大になっていく。ただの竜巻ではない。黒い風には命を砕く力がある。巻き込まれた瞬間に死が確定する。

「お母様、お許し下さい・・・」

シルメラは人々の叫びを聞きながら涙を流した。

全てが終わった後、ニルヴァーナとシルメラの周りは荒れ果て、散乱する帝国兵はもうだれも生きてはいなかった。多くの木々が折れて吹き飛び、命を奪う黒い風で草もすっかり枯れていた。動くものは自分たち以外に誰もいなかった。

「今にも意識が吹き飛びそうだ。神にでも祈った方がいいのか」

「・・・私たちは人間じゃない・・・祈るなら・・・」

ニルヴァーナは真上の星空を見上げた。

「お前は何ともないのか、あれだけの人間を殺したのに・・・」

シルメラが言うと、ニルヴァーナは血まみれの両手を見て目を細めた。

「・・・ニルヴァーナ、泣いているんだな。わたしにはわかる」

シルメラは夜空を見上げる。瞳から涙が溢れてきた。

「どうしてこんな事になる！ 私たちは何のために生まれてきたんだ！」

シルメラの叫びが夜空に響き渡る。彼女たちを見下ろす満月と星々が、どこことなく悲しげだった。

ノルンの村では、夢幻戦役から五十年たった今でも、語り継がれている叙事詩がある。

恐ろしい悪魔の群れがやってきた

村を消しにやってきた。

もうだめだ、逃げる、逃げる、村人達

もうだめだ、みんなが生きる事を諦めた

大丈夫、わたしが守るから

美しい人が言いました

村を守る為に美しい人は出ていった

可愛い妖精を連れて出ていった

恐ろしい悪魔達は青い炎に焼かれて死んだ

村を守った美しい女も死んだ

青き炎を纏いし少女が最後に残った

わたしたちは忘れない、あの美しい人を忘れない

それは、エリアノの妹であるリリーシャ・ミエルを称える詩だった。夢幻戦役でノルンの村は消えるはずだった。村を救ったのは、たった一人の女性と、たった一人のフェアリーだった。

その時、バシュートル帝国軍二千の予備軍は、本隊からの連絡が途絶えたのをきっかけに、フェアリーラントに急行していた。まさかフェアリーに本隊が全滅させられたなど、誰も考えられるはずがなかった。

帝国の進軍経路上にはノルンの村があった。帝国軍は残虐な人間が多く、無抵抗の人々を無為に殺すなど当たり前のようにしていた。進軍の途上でノルンの村が滅ばされるのは確実だったのだ。

それを知ったリリーシャは、相棒のテスラを連れて村を出た。しかし、テスラには何も言っていない。それは、テスラが極度に臆病な為に、今から戦いに行くなどと軽弾みに言えなかったのだ。

リリーシャは、姉のエリアノとは違って活発で物事をはっきり言う歯切れの良い性格だった。薄桃色の長い髪をポニーテールにまとめて、青い瞳は少し鋭い感じで、リリーシャの気の強さを語っていた。

リリーシャは、テスラを乳飲み子のように抱いて歩いていく。テスラは、急に出かけると言い出したリリーシャを不思議そうに見上げていた。

「ねえ、テスラ」

「にゅ？」

「姉さんが何でフラウディアの女王になったのか、あなたは知らないわよね」

テスラが首を横に振ると、リリーシャは言った。

「フラウディア王家の人たちが流行病で不幸にあったの」

「不幸？」

「みんな病気で死んじゃったのよ。王家不在になったシルフリアは、国民投票で国の指導者を決めた。そうして選ばれたのが、わたしの姉さんだった。姉さんは、フェアリーを生み出して有名人になっていたからね」

テスラは困惑した顔でリリーシャを見つめていた。

「何だかよく分からないって顔をしているわね。それでもいいのよ、ただ誰かに聞いて欲しいの、姉さんの話をね」

「聞くよお」

テスラは主人の望みににこやかに答える。リリーシャは満面の笑みを浮かべた。

「姉さんはね、皆の幸せの為に頑張りたいって言ってたの。でもね、お城には悪い人がいっぱいいるから、自分はいつかいなくなってしまうかもしれないって言っていたわ。それでも姉さんは頑張ったのよ。税金を軽くしたり、貧しい人に食べ物を与えたり、フェアリーも創った」

リリーシャは、変わらずに微笑のまま話をしていたが、話し方に妙な湿っぽさが混じってきた。テスラはそれを敏感に感じ取って、自分も何だか悲しい気持ちになった。

「姉さんは本当に頑張ったのよ。でも、いなくなってしまった」

「お母様いなくなっちゃったの？」

「ええ、姉妹だからかな、分かっちゃうんだよね。姉さんはもうこの世界にはいない」

「ふうう、そんなのやだあ」

テスラがわあわあ泣き出すと、リリーシャは抱きしめて幼子をあやすように背中を叩いた。

「安心して、姉さんはいつかノルンに帰ってくるわ」

「帰ってくるう？」

「そうよ、姉妹だからわかるの」

「よかったあ」

テスラは顔を上げて、またにっこり笑う。素直に信じるテスラが可愛くて、リリーシャは微笑むと同時に、どうしようと思った。この状態で一緒に戦ってほしいなど、言い難くてしょうがない。

しかし、もう時間がなかった。リリーシャは大きく息を吸い込むと、思い切って言った。

「わたしはノルンを守りたいのよ。ノルンがなくなったら、姉さん返ってこれなくなっちゃうもの。だから、テスラの力を貸して欲しいの」

テスラは、リリーシャの言ってる意味が分からなくて首を傾げた。「もうすぐ帝国軍がここにやってくるわ。素直にノルンを避けて通ってくれるならいいんだけど、そうでなければわたしたちが戦って村を守る」

「ええーっ！」

テスラは驚くと飛び上がって、不安いっぱい表情でリリーシャに言った。

「無理だよお、戦うの嫌だよお」

「お願い、あなたの力が必要なの。このままじゃノルンの人たちもみんな殺されて、姉さんの帰る場所もなくなっちゃう。どうしてもノルンを守らなきゃならないのよ」

「みんな、殺される？」

リリーシャが頷くと、テスラは、『ううーっ』と唸った。

「大丈夫、あなたなら出来るわ」

リリーシャにそういわれると、テスラは何でも出来そうな気がしてきて、勢いよく両手を挙げた。

「わかった、テスラ頑張るよ！」

「ありがとう」

リリーシャが曲げた右腕を出すと、テスラはその上に座った。

「わたしたちは村を守る正義の味方よ。いざ行かん、正義の戦いへ」

「ううーっ、ううーっ」



正義と言ふ言葉は、テスラを鼓舞するのに分かりやすい言語を選んだと言っただけの事だった。にもかかわらず、リリーシャは自分の言った正義という言葉に激しい嫌悪を感じた。

正義ね・・・戦いに正義なんてないわ。わたし達は村を守る事が正義、帝国軍は侵略する事が正義、でもそれは正義じゃない。考え方や目的が違うからぶつかり合って戦うだけの話、戦争に正義も何もないって、よく姉さんも言っていたっけ。

リリーシャが視線を真直ぐ前に移すと、ずっと遠くの方に無数の影が見えた。

戦う事が罪でもいい。例えそうであっても、そのせいで生まれ変わってもずっと苦しむ事になっても、それでもわたしはノルンを、姉さんの故郷を守りたい！

無数に響く蹄鉄の音は聴覚に重くのしかかり、銀の鎧兜を纏った騎馬兵たちは、隊列を組んで隊をなし、巨大な魔物を見るように圧巻だった。その前に立ちふさがる女が一人、彼女の存在感の大きさに、騎馬の大部隊はそれを蹴散らすことは出来なかった。たった一人の人間と、小さな群青のフェアリーが、大軍の進攻を止めた。

「何用だ、女」

先頭の将軍がリリーシャに問う。

「この先にある村を避けて通って頂きたいのです」

「そんな事を言う為に、我々の前に出てきたのか・・・」

「どうか、お聞き入れ願いますよう」

「その勇気に免じて、お前だけは助けてやろう」

「わたしなど、どうなってもかまいません。どうか村を助けて下さい」

リリーシャが訴えても、帝国の将軍はあざ笑うだけだった。

「それは出来んな。わたしの気が変わらないうちに、さっさと消え失せるがいい」

「そうよね。ま、最初から期待していなかったけどね」

リリーシャがころつと態度を変えたので、帝国将軍は兜の下で眉

をひそめた。

「ここから先は通せんば、通れるものなら通ってみなさい！」

「なにい？」

「フェアリーの力は本来、戦いに使われるべきものではないわ。でも、あなた方には見せてあげましょう、フラウディアの英知の結晶、フェアリーの力をね」

リリーシャは懷からカシミールサファイアのペンダントを取り出し、それを両手で握りこんだ。そうすると、青い光が指の隙間から漏れ出し、足元に青い魔方阵が浮かんだ。そして、魔方阵から発生したドーム状の光がリリーシャを包み込む。

「テスラ、力をあげるわ。さあ、みんなを守るために戦うのよ！」

マスターの声に答えてテスラが飛び上がると、背中に四枚ある群青の翅が燃え上がり、青い炎に包まれた。

「地獄より出でたり冥府の炎、深き罪を焼き尽くす魔炎よ！」

テスラの紡ぐ呪文と共に、前方に向かって五つの魔方阵が現われ、呪文が終わると同時に闇色の炎が魔方阵から噴出した。黒い炎は巨大なうねりとなって、前方にあるものを瞬時に灰にする。

テスラの黒い炎は、魔炎と呼ばれる力で、どんなものでも焼き尽くす事が出来た。

魔炎のうねりは帝国軍の最前列から後尾まで突き抜け、帝国軍は縦に長く隊列を組んでいたので、この一撃で大ダメージをこうむった。

帝国軍は二千の兵力のうち、将軍も含めて千以上の騎士が跡形もなく消えた。

テスラは青い火の粉を散らし、炎の尾を引きながら上昇して、人差し指を空に向けた。辺りが薄暗くなり、上空に巨大な魔方阵が浮かび上がる。

殆どの敵兵が、逃げる事も忘れてそれを見上げた。

やがて、魔方阵から黒い炎の豪雨が降り注いだ。小さな火の玉は騎士たちの体を貫通して、無数の敵が蜂の巣になって倒れていった。

「女だ、女を狙え！」

誰かが言っと、数人の騎士がリリーシャに殺到した。マスターであるリリーシャを狙うのは当然の判断と言える。魔力の供給源であるマスターが倒れれば、フェアリーの力は半減してしまうのだ。

そんな事は当のリリーシャも分かっている。彼女は既に、最大の弱点を完璧にガードしている。

騎士たちが剣を振るおうが、矢を射ろうが、全ての攻撃はリリーシャを包む青い光の前に弾かれた。

「考えが甘いよ。あんたたちは、テスラに焼き殺されるか、この場から逃げるか、二つに一つしかない」

騎士たちが戦慄して踵を返すと、目の前にテスラが浮いていた。

テスラの周囲から黒炎が円状に広がり、騎士たちはそれに巻き込まれて蒸発した。

「テスラ、村に行こうとする者は必ず倒しなさい。逃げるのは放っておいていいわ」

「うん、わかった」

テスラは鬼神のごとく戦った。いつもは臆病で震えてばかりいるフェアリーだが、リリーシャと一緒にいるときだけは、勇気を出して戦う事が出来た。

帝国の騎士たちは、ほとんど逃げずに向かってきた。誇り高きバシュートル帝国軍が、虫けらの如き卑小なフェアリーなどに負けるなど、あつてはならない事だった。彼らは死に物狂いでテスラとリリーシャに向かってくる。

テスラの体はいつの間にか青い光に包まれ、内は溢れんばかりの魔力に満たされて、いくらでも戦う事が出来るような気がした。だが、帝国軍もほとんど全滅近いという時に、魔力の供給が急に止まった。

同じ頃、リリーシャは胸を押さえて蹲り、今日明日にも死ぬような病人のように異常な喘ぎ方をした。地面の魔方陣は消滅して、守りの光も消えた。そこに、兜を脱いだ帝国騎士が近づいてきた。

リリーシャはゆっくり立ち上がり、騎士の前で両手を広げた。男はあっけにと取られて硬直した。

「フェアリーの犯した罪は、マスターの罪でもあります・・・」

リリーシャの心臓に刃物を突き立てるような痛みが走った。リリーシャは言葉を切って左胸をわし掴みにすると、苦しい表情のままと言った。

「わたしは・・・あなたの仲間を、たくさん殺しました・・・だから、斬られても文句は言えない・・・」

リリーシャは騎士の瞳を見つめた。純粹で崇高な意思の溢れた瞳は、悲しげに揺れていた。まるで、斬って下さいと言っているようだった。

「いい覚悟だ」

騎士は剣を振り上げ、そして一瞬の躊躇もなく白刃が斜めに走った。リリーシャは、左肩から胸まで斜めに斬られて、ゆっくりと、仰向けに倒れた。

「うあああつ!!?」

後ろから聞こえたテスラの絶叫に、リリーシャを斬った騎士は体を振るわせた。振り向く間もなく、後ろからテスラに髪の毛を掴まれて、激しく左右に揺さぶられる。終いには頭が黒い炎に覆われて放り出された。騎士は苦しむ間もなく首から上が消失した。

「リリーシャあーっ!!?」

テスラは上半身が血まみれになって変わり果てた主を見て泣き叫んだ。テスラの涙がリリーシャの顔に落ちると、リリーシャは目を開けて微笑した。

「しっかりしてよう、死なないでよう」

「テスラ・・・これを、お願い」

リリーシャは手を伸ばして、テスラと掌を重ねた。リリーシャの手が力なく落ちた後、テスラの小さな手の中には血のついたサファアのペンダントが残されていた。

「あなたに、最後の、お願い・・・娘を守って」

テスラは不安と悲しみで顔をくしゃくしゃにして、もうどうしていいのかわからなかった。リリーシャはそれを安心させるように微笑して言った。

「大丈夫、あなたなら・・・出来るわ・・・」

それは、リリーシャ・ミエルとしての最後の言葉だった。

「ふうう、すっかりして、起きてよ、目あけてよぉ！」

テスラがいくら揺すっても、もうリリーシャが答えるはずもなかった。

「ふうう・・・」

テスラの目つきが変わった。生まれて一度も見せた事がない、憤怒に燃える青い瞳が、生き残っている帝国騎士たちを睨みつける。青い炎が宿る翅は、さらに燃え上がって大きくなった。

「ふああーっ！」

例えリリーシャがいなくなっても、残りの魔力で十分に敵の残党を狩り尽すことが出来た。テスラは怒り狂い、もう帝国軍には生き残る術がなくなってしまった。

帝国軍七千の兵は、フェアリーたちの前に打ち砕かれ、フラウデアは侵略から逃れる事ができたのだった。

帝国の皇帝はあまりにも信じがたい報告にしばらく沈黙していた。白髪に白髭のいかつい顔が次第に歪んでいく。

「全てフェアリーにやられたというのか。生き残ったのはたったの一人、おまえだけだ・・・」

皇帝の前に跪いていた男は顔を上げて言った。

「あれは、夢です、幻です、あんな事があるはずがありません！わたしは悪い夢を見ていたんだ！」

男は錯乱していた。男が夢幻と言おうが、帝国軍七千の兵がほぼ全滅した事実は消えない。

「フェアリーは子供や老人の相手をするだけのちっぽけな存在ではなかったのか。噂とはあまりにも違いすぎる。これが事実だとすれ

ば、人間は何と恐ろしいものを作ったのか……」

その時、少女の笑い声が部屋にこだました。近衛騎士たちが声の主を探しつつ剣を抜いた。

「ここだよ」

声の主は突然真上から舞い降りてきた。どこから入ってきたのか、フェアリーが皇帝の目の前に浮いていた。

小さな少女は青みのある銀髪を黒いリボンでポニーテールにして、真紅の瞳には凶暴性が見え隠れしている。何よりも見るものを圧巻させたのは、ゆっくりと開いた六枚の翅だった。左右に三枚ずつ、闇色の翅がついている。闇色と言っても、向こう側が透けて見えるほど透明感があり、さらに赤や緑などオーロラのような輝きが乗っていた。闇以外の色が常に蠢いて変化し続けている。コッペリアだ。「ひいひいっ！ フェアリーっ！」

跪いていた男は、皇帝の前と言うことも忘れて恐れおののいた。

「何だ貴様は！」

近衛兵の一人がコッペリアを後ろから斬ろうとして剣を振り上げた。その瞬間、両腕の手首から上が飛んだ。

「う、うわあああああつ！！？」

その騎士は手のなくなつた事に気づいて泣き叫んだ。他の近衛騎士が身構える。その時、コッペリアが三日月の笑みを浮かべた。

小さな体から白い波紋が広がって消える。それは一瞬の出来事だった。近衛騎士たちはほぼ同時に胴を切断され、墳穴泉のように血を撒き散らして床に崩れた。皇帝の前で萎びていた男も首から上が飛び、その頭が皇帝の足元に転る。生き残ったのは、皇帝と両手を切断された男だけだった。

「あ、あああ！！？ 何だこれは、化け物だ！！ 誰か、誰かーっ！！」

両手のない男はあまりの出来事に発狂した。男が背を向けて逃げ出そうとしたとき、すでに殺された同胞と同じ運命をたどった。体が二つに分かれ、胴から上は真後ろに転がり、下半身は何歩か前に

歩いてから倒れた。

凶悪なるフェアリーは、薄笑いを消さずに言った。

「皇帝、わたしはわざわざシルフリアから出向いて来たんだよ。何か言っておくれよ」

「・・・まさに夢幻の力、フェアリーという存在を見誤った」

「それが死出の言葉かい」

皇帝の体に衝撃が走った。皇帝の額から真直ぐ縦に朱の線が浮いてくる。

「お前は何だ、神か、悪魔か」

「フェアリーだよ」

皇帝は鮮血を散らして座っていた椅子ごと真つ二つになった。辺りには無残な死体が転がり、血のに臭いが充満した。

「ククツ、アハハ、アハハハ、アーッハハハハハ！」

凶悪なフェアリーは両腕を広げて狂ったように笑った。

コツペリアの周りに光が集まってくる。莫大なエネルギーの収束。コツペリアは光に包まれ、極限まで高まったエネルギーがついに爆発した。光は部屋に転がっていた死体を塵と化し、ドーム状に広がりを続けた。そして、城はあつという間に白い世界に埋没した。全てを無と化す死の光の中から、少女の楽しい笑い声がいつまでも聞こえていた。

これが、今から五十年前に起こった夢幻戦役と呼ばれる戦いだっ

た。  
シャイアは全てを聞き終えて、コツペリアが何故これほどまでに悲しむのか知った。

コツペリアは今でもエリアノを母と呼び、心の底から愛していた。その母が望んだ世界は完膚なきまでに破壊され、最も望んでいなかった世界が大手を振るって座している。

シャイアは、最愛の父を目の前で殺された。そのせいかコツペリアの気持ちがあった。

「こんな世界、壊してしまえばいいわ。そして、あなたのお母様が望んだ世界にすればいい」

シャイアに抱かれていたコッペリアは、上を向いて泣きはらした顔を見せた。

「わたしはお前の復讐の為に手を貸す。その代わりに、全てが終わったら、わたしに手を貸しておくれ」

「この世界を壊すのに、わたしの力が必要なのね」

「そうさ」

「いいわ、復讐さえ果たせば、後はどうなったってかまわないものの」

「約束だよ」

コッペリアが小指を立てると、シャイアはそれに自分の小指を絡めて指きりした。

二人は固い約束を交わした。それはシルフリアに地獄を呼び込む魔の契りだった。

夢幻戦役・・・END



## 天使は微笑み、悪魔は嘲笑う - 1

静かに佇むシャイアの屋敷は、人目を避けるように森の一角にあった。

アンナは毎朝起きると、ポストの中を調べるのが癖になっていた。前の屋敷にいたときからの日課で、何も届かないと分かっているにもかかわらず、落ち着かない。

アンナがポストを開けると、

「あら？」

この日はいつもと違った。ポストの中に封筒があったのだ。当て先だけで、発送元の住所はない。封筒にはシャイアの名前が書いてあった。

シャイアたちはひっそりと誰からも隠れるように生活しているのに、アンナは封筒を訝りながら屋敷に戻った。

「お嬢様、お手紙が届いていますよ」

アンナが寝室の扉を開けると、シャイアは鏡の前に立って、服の上からドレスを合わせていた。ベッドの上にもドレスが何着か広がっていた。

シャイアは黙って封筒を受け取ると、すぐに封を切って中身を確認した。封筒に入っていたのは一枚の招待状だった。

「お嬢様、それは？」

「パーティの招待状よ。大した規模ではないけれど、社交界の貴族たちが集まるわ」

「出席なさるのですか？」

「当然でしょ」

「それにしても、一体どなたがその招待状を送ったのでしょうか？ わたしたちがここに住んでいる事を知っている人がいるのでしょうか？」

アンナは得体の知れない招待状に不安を隠しきれず、恐ろしいも

のを見るような目つきで封筒を見た。

「この招待状は買ったのよ」

「買った？」

「お金さえあれば、これくらいのもは簡単に手に入るわ」

「どうしてそんなものをお買いになったのですか？」

「すぐに分かるわ。パーティーは今夜だから、留守をお願いね。あと、たぶんこの屋敷は必要なくなるわ」

「ええ？」

アンナにはシャイアの言う意味がまったく分からなかつたが、シャイアが招待状を見つめて狂気を帯びた微笑を浮かべたとき、ぎくつとした。それで、シャイアがパーティーに行くのは、復讐の為だという事だけは分かった。

シャイアはそれ以上は語らず、再びドレス選びに集中した。アンナは一礼すると、黙って部屋を出て行った。

コッペリアは幼児用の背の高い椅子に座り、テーブルの上のグラタン皿に視線を落とした。表面のチーズが音を立てて香ばしい匂いを舞い上げ、ホワイトソースが焼けたチーズの下で煮えて食欲を誘う音律を奏でる。

コッペリアがフォークを取る姿を、アルが側で宙に浮きながら見守っていた。コッペリアはフォークでソースとチーズが絡み合ったマカロニを突き刺し、よく冷ましてから口にした。

「どうですか、僕の料理の味は」

「・・・まあまあだね」

「え、まあまあ・・・自信あったのにな、コッペリアは厳しいね」「悪くはないけど、まだまだだね」

と言いつつ、コッペリアはいい勢いで料理を口にしていく。そんなのんびりした時間を邪魔するように、シャイアが居間の扉を開けて顔を覗かせた。

「なあに、また食べてるの」

「まるで、わたしが食べてばかりいるような言い方だねえ」

「食べてばかりいるでしょう」

鋭く突っ込まれても、コッペリアは何食わぬ顔で食事を続ける。

「出かけるから早く食べてしまいなさい」

「出かけるだつて？」

「あなたのドレスを買いに行くの」

「ドレス？ そんなもんいらないよ」

「いるの、今夜のパーティには、あなたも連れて行くんだから」

コッペリアは聞き流してグラタンをさっさか口に運んでいく。

「聞いているの？」

「服なんて、これでいいじゃないか」

コッペリアがいつも着ている赤紫色のドレスの裾を引っ張る。

「フェアリーはステータスの一つにもなるのよ。いい加減な格好をさせれば、わたしの品位が疑われるの」

「わたしはアクセサリーじゃないよ」

「約束、忘れたわけではないわよね」

「・・・わかったよ」

コッペリアは不服そうだったが、お互いに協力しあうという約束がある以上、仕方なく受け入れた。

シャイアとコッペリアは、来宴用の豪華な辻馬車で、パーティの会場であるさる貴族の豪邸に向かっていた。季節は初夏に入り、少し蒸し暑い夜だった。

蹄鉄と車輪の音が絡み合い、闇夜の町に響き渡る。街灯に小さな虫が集まって、飛び回る虫の影が、建物の壁に大きく映り、寂寞の中に不気味さを付け加えていた。

まだ寝るような時間でもないのに、夜の街には酔っ払いの一人もいなかった。その理由は、シルフリアの劣悪な治安によるものだ。フラウディアは全体的に治安が低下しつつある国だが、その中でもシルフリアは最も酷かった。殺傷事件など日常茶飯事で、殺人や誘

拐などの悪質な事件も非常に多い。そのおかげでシルフィアには悲惨な事件が起こっても、何も感じない、命に対する感覚の麻痺した人間が増えていた。夜には出歩かないのがシルフィアの常識なのだ。出歩けるのは護衛の付けられる裕福な人間だけだった。

辻馬車を頼んだときには、護衛がいなければ馬車は出せないと言われたほどだ。無論、コツペリアがいるので、それは何の問題もなかった。

馬車は街の中心部を突っ切り、綺麗に区画された貴族街と呼ばれる所まで来た。立派な邸宅が立ち並ぶ金持ちばかりが住んでいる居住区だった。この辺りは見回りの兵隊もいて、まだ治安は良い方だったが、それでも歩いている人は少なかった。

間もなく、一際大きな屋敷の前で馬車は停車した。正面の門を隔てた少し先は別世界だった。まず、明るさが違う。パーティの為に複数特設された常夜灯の光は、街の街灯とは異質な電気の光だ。電気はフェアリープラントの商品で、利用する為には月に相当な額を払わなければならない。この電気も、金持ちに与えられた特権のようなものだ。

庭は真昼のように明るく照らされ、貴婦人や紳士たちは、立ち話をしたり、テーブルでワインを片手に笑談したりと、外の空気に触れながら、思い思い楽しんでいた。

屋敷の窓から漏れる光は、もっと強烈で、その昭光には自然と足が向いてしまいそんな魅力があった。

「中に付けましょうか？」

「ここでもいいわ」

御者は素早く馬車の横に回って扉を開けた。シャイアは柔らかな足取りで馬車を降りると、門の前にいる燕尾服の若者に招待状を見せた。

「ようこそいらっしやいました。どうぞ、今日は存分にお楽しみ下さい」

シャイアは何事もなく迎え入れられた。金持ちが道楽でやってい

るパーティだ。招待状さえ持つていれば、何も疑われる事はなかった。

受付役の若者は、シャイアに見とれて次に来た紳士に咎められた。シャイアは青いドレスを選び、それに合わせて髪にはシルクの青い薔薇を飾っていた。

銀髪に雪肌のシャイアが寒色系のドレスを着ると、さらに肌の透明感が洗練され、光を帯びたような素肌は妖精のごとく美しかった。さらにピジョンブラッドのペンダントが、青いドレスに良く映える。一方、シャイアの肩に居座るコツペリアは、紅色のドレスを着て、青銀の髪を束ねる黒いリボンも、上等のシルクのものに変わっていた。

「窮屈だねえ、何でこんなに裾が長いんだい」

「黙りなさい。今のあなたは、わたしの格を量る材料になるのよ。恥をかかせるような真似をしたら、明日の夕食は抜きにするわよ」

「それは嫌だ」

コツペリアはすまし顔で自分なりに品の良い表情を作る。彼女の場合は食べ物で脅すのが最も効果的だった。

シャイアがパーティの会場に近づく、外にいた貴族たちの注意が一気に降り注いだ。

婦人、紳士、例外なくシャイアの姿に釘付けになる。そして、その次にコツペリアを見て驚嘆の溜息をつく。この順番は、一人の例外もなかった。

特に若い独身貴族は、シャイアの話で夢中になった。

「誰だい、あの美しい婦人は」

「さあ、あんな美人は見た事もないが・・・」

「連れていたフェアリーを見たかい。あんなの見たことないよ。相当な代物に違いない。美しいだけじゃない、あれは才女だね」

屋敷に一步入ると、ワルツの演奏が耳に心地よく響いてきた。奥の演台で、演奏家たちがそれぞれの楽器を持って音楽を奏でている。天井のシャンデリアは太陽のように眩しく、オレンジ色の優しい光

が、屋敷の中にあるもの全てに注いでいた。

シャイアが屋敷の中に入ると、波のように感嘆の吐息が巻き起こった。踊っている最中に、それを止めてまで見る者もいた。たちまち若い貴族たちの間では、シャイアの話題で持ちきりになる。

シャイアの耳元で、会場の嘆息を凌駕する溜息が漏れた。シャイアは嫌な予感がして見ると、コツペリアの視線はある一点に集中していた。

「シャイア、凄いご馳走があるよ。食べてもいいのかい？」

コツペリアは、テーブルに並んだ料理に飛びつきたいのを辛うじて抑えていた。シャイアにもそれがよく分かった。

「あんまりがつつかないでよ。さっき言った事を忘れないようにね」

「わかってるよ」

「好きにきなさい」

シャイアの許しをスタートダッシュの合図にして、コツペリアは燕のような速さで貴族たちの間を飛び抜け、ご馳走の並ぶテーブルに降り立った。すると、燕尾服を着た初老の使用人が近づいてきて言った。

「美しい婦人の、美しい妖精さん。よろしければ何かお取りしましょう」

「そうかい、じゃあ、これとこれと……」

コツペリアは、殆ど全ての料理を指定した。

シャイアは空いているソファに座ってじっとしていた。貴族たちの態度は、彼女の計算通りだった。そして、これからどういう事が起こるのかも予測済みだ。シャイアが自分から動く必要はなかった。

ある程度の地位と財産のある男じゃなければ駄目ね。そして、なるだけ愚かな方がいいわ。それこそ、自分は世界一と思っているくらい馬鹿な方がいい。

シャイアは、若い男たちに目配せをしながら考えていた。

男たちは、シャイアと目が合うと、視線を逸らさずに見つめ返し

たり、微笑を浮かべて愛想を振りまいたり、恥ずかしそうに目を逸らしたりと、十人十色の反応があった。

初なのは駄目ね。あまり真剣だと、こっちもやりにくい。遊んでそうな男がいいわ。馬鹿で、地位も名誉もあって、遊んでそうな男・・・ま、焦らなくてもどうせ向こうから寄ってくるわね。

ワルツの演奏が終わりに近づくいた時に、三人の若い紳士が、わざわざシャイアの側に来て話し合った。シャイアがそれに耳を傾けると、その中の一人がひたすら自慢話をしていた。財産の事や、領地の広さや、地位の高さなど、シャイアに聞こえるように話している。この男はシャイアにアピールしているのだ。それくらいの男なら、この会場にいくらでもいた。

シャイアは飽きた振りをして、その男の様子を観察していた。男はシャイアに相手にされていないと感じると、腹を立てて睨みつけてきた。それでも歯牙にもかけずにいると、男は仲間に懐から何かを出して見せ付けた。

「これが何だか分かるか」

「君、これは・・・」

男が持っていたもの、それは拳銃だった。他の二人はあっけに取られていた。

「こいつは中々便利な物だね。生意気な領民を一発で黙らせる事が出来る。撃つのは領民だけに止まらないけどね」

シャイアはこの男の馬鹿さ加減に笑いたくなかった。男は遠まわしに脅しているのだが、その程度で怯むシャイアではない。パーティの席でそんな物を出すのも常識外れだ。まるで刃物を持って強がっている悪餓鬼のようだった。

こいつがいいわ。

シャイアは男の事を見つめて笑いかけた。すると男は、慌てて拳銃を懐にいれて、機嫌よく笑い返した。

シャイアが照準を定めると、丁度ワルツの演奏が終った。そして、小休止の時間を置いてから、気持ちを高揚させるようなギャロップ

の演奏が始まる。これは、ダンスのパートナーを探せと言う合図だった。

シャイアの前に次々と若い貴族たちがやってきた。シャイアは彼らの申し出を丁寧に通断していった。

例の男は、少し離れて見ていた。自分が選ばれると確信しているから余裕がある。シャイアがそう思わせるような態度を取ったのだ。やがて意中の男がシャイアの前に立った。

男が手を差し出すと、シャイアはそれを取って立ち上がり、ドレスの裾を摘んで会釈した。微笑を浮かべて相手を見つめるのも忘れない。追い撃ちをかけるようにシャイアからほのかに漂う香水の匂い。男はシャイアの魅力にすっかりやられてぼうつとした。

「さあ、踊りましょう」

「あ、ああ」

男はシャイアの手を引き、選ばれし者の栄光を胸に、それが当然と言う様に中央に進み出た。既にパートナーを選んで準備していた貴族たちは、シャイアの為に場所を空けた。

男は嫉妬や羨望の眼差しに陶醉した。シャイアに選ばれなかった貴族たちは口々に噂した。

「あれはユーディアブルグの領主だろう。奴は暴君と呼ばれている男だぞ。あの貴婦人は何であんな男を選んだんだ」

「きつと、旨く口説いたんだろう。女遊びも相当なものらしいからな」

そんな噂は一つや二つではなかった。悪い噂をする貴族たちに大なり小なりの悪意はあるだろうが、ただそれだけではないのも確かだった。

やがて、二度目のワルツの演奏が始まった。シャイアは男と見詰め合ったまま、流麗にステップを踏んでいく。

男は近くで見ると、なかなかの美丈夫だった。背は高い方ではないが、少し癖のある金髪は鮮やかで瑞々しく、鋭い目元から非行少年のような幼さと危なさを感じる。シャイアは鋭い感性で、この男



の性格を瞬時に見抜いた。

「わたしはエルヴィン・シュラード、君の名は？」

「シャイアよ」

「シャイア、何故わたしを選んでくれたんだい」

「あなたなら、わたしの事を分かってくれそうな気がしたの」

「君の事？」

「後で話すわ。今は楽しみましょう」

エルヴィンは満ち足りた気持ちで踊り続けた。シャイアは彼の姿を見ながら、心の奥でほくそえんでいた。

しばらくして、シャイアは踊り疲れた振りをして、エルヴィンを外に連れ出し、二人はテーブルを挟んで向かい合った。

「さっきの事だけど、どういう意味なんだい」

「わたし、最近お父様が亡くなって一人になってしまったの。頼れる身寄りもなくて、とても心細いの・・・」

「それは気の毒に、わたしでよければ力になるよ」

その話はエルヴィンにとって、シャイアを手に入れるチャンスに思えた。

「どうしたらいいのかわからなくて、途方にくれているのよ。お金だけはあるんだけど、それでも一人で生きていく自信がないわ」

「今はどうしているんだい？」

「前のお屋敷は売ってしまって、召使たちも暇をやってしまったわ。今は、シルフリアの近くに小さなお屋敷を借りて、側にいるのはメイド一人とフェアリー二人だけ」

「なるほど・・・」

エルヴィンはどうしたものか考えた。今すぐにも連れて帰りたい気持ちだが、たった今知り合ったばかりで、シャイアがそれを受け入れるのか自信がなかった。それに、貴族として軽率な行動も慎重だった。しかし、目の前の麗人を誘うのに今が千載一遇の機会であるのも確かだ。

二人が話すのを止めると、野外に響いてくる音律と、ワインを片

手に語り合う貴族たちの声が、虫の声と重なり合った。それは、なかなか耳に心地の良い雑音だった。シャイアがそれに耳を傾けていると、屋敷の窓からコツペリアが飛んできた。

コツペリアは二人の間に浮遊して、交互に顔を見た。それでエルヴィンの思考は中断され、彼は見たこともない形のフェアリーに目を見張った。

「こつちにいらっしやい」

シャイアは邪魔して欲しくない気持ちを声色に込めて言った。コツペリアは大人しく従って、シャイアの膝の上に収まった。

「驚かせてしまったかしら。わたしのフェアリーなの」

見ればコツペリアの口の周りがソースで汚れているので、シャイアは引きつった顔をしてハンカチを出した。せつかく作った雰囲気が出た。しかし、コツペリアがここに来たのは、彼女なりの計算があつての事だった。

「もう食事はいいの？」

コツペリアはシャイアに口を拭かれながら頷いた。

「全部の料理を食べてきたよ。パーティーってのはいいもんだね」

「まあ、呆れた子ね・・・」

コツペリアがさらに余計な事を言うので、シャイアは苦虫を噛んだ。

エルヴィンは、突然現れたフェアリーに興味深そうに見つめていた。

「かわいらしいね。わたしはエルヴィンだ、よろしく」

エルヴィンが手を出すと、コツペリアが小さな手でそれに答えた。

「コツペリアだよ」

「それにしても、見たこともない形のフェアリーだが、どこで手に入れたのかね？」

「彼女は、お父様が誕生日に送って下さったのよ。黒妖精と言っていたわ」

「黒妖精だって！！？」

エルヴィンは、シャイアの想像以上に過剰な反応をした。

「珍しいフェアリーらしいわね」

「珍しいなんてものじゃない！ 本当に黒妖精だとしたら、それは大変な事だよ！」

「この子がそんなにすごいのか？」

シャイアは、黒妖精のことはコッペリアから聞いていたが、わざと知らない振りをした。エルヴィンを話に乗せて、目的の方向へと導いていく。

「黒妖精と言えば、あのエリアノが手がけたフェアリーだ。世界中に四体しかいない。アレキシンドライト、キャッツアイ、カシミールサファイア、ピジョンブラッド、それぞれが至宝のコアを持つ最高傑作のフェアリーだ」

「よくお知りなのね」

「ああ、フェアリーには興味があつて、昔色々と調べたからね。黒妖精の名前はどの書物にも載っていなかったけどね、夢幻戦役の時に付けられた渾名があるんだ。宵闇の女帝、漆黒の天帝、断罪の天子、群青の炎帝、それぞれが神の如き力を授かっているという言い伝えもあるんだよ。確かその中に、六枚の翹を持ったフェアリーがいたはずだ」

エルヴィンはコッペリアの姿をじつと見つめた。

「そのフェアリーには、六枚の翹があるね。しかも、見たこともない美しい色彩だ」

「断罪の天子と言うのはわたしの事さ」

「ふむ、その真紅の瞳に、シャイアが身に付けているルビーのペンダント、どうやら信じてもよさそうだね」

エルヴィンは熱っぽく瞳でシャイアを見つめた。

「君は美しいだけじゃない。黒妖精を連れているというだけで、もう一流の才女だよ。わたしは、シャイアと会えたことを心より神に感謝する」

「まあ、そんな、言い過ぎですわ。フェアリーなんて、誰だって契

約する事は出来るのでしょうか」

「フェアリーの主人になれるのは、妖精使いとしての資質のある人だけだよ。最高のフェアリーには一流の人間が主人となるのは定石さ。屑共の中には、ワーカーを可愛がって妖精使いの真似事をして  
いる愚か者もいるがね」

エルヴィンは、どうしてもシャイアが欲しくなった。類まれなる美しさに加えて、黒妖精まで連れていけるとなれば、もう迷っている事は出来なくなった。

「シャイア、わたしのところに来ないか、不自由はさせないよ」

「え？ でも、それは・・・」

シャイアはすぐには飛びつかずに一歩引いた。出来るだけ男の気を引くつもりだった。

「わたしでは駄目かい？」

「いいえ、そうじゃないの。わたしは商家の娘なのよ。貴族のあなたとはとても釣り合わないわ」

「ああ、そんな事かい。最近では貴族と平民が結婚するのは珍しい事じゃないよ。それなりの持参金があれば、問題はない」

「ありがとう、あなたの気持ちは嬉しいわ。少し考えさせてもらえるかしら」

「ああ、もちろん。いい返事を待っているよ」

シャイアはパーティが終わらないうちに馬車を呼んで帰路についた。

シャイアは馬車に揺られながら、窓から見える三日月を見ていた。コッペリアはその隣にぴたりくっついて、シャイアの顔を見上げた。

「何ですぐにあいつの申し出を受けなかったんだい」

「軽い女って思われたくないからね。出来るだけ良い印象を作った方が得でしょう」

「フツ、わたしはお父様からのプレゼントかい。うまい事言ったもんだね」

「いきなり出てくるから、取り繕うのが大変だったわ」

「でも、役に立っただろう」

シャイアは月を見るのを止めて、コツペリアに微笑んだ。

「そうね、結局はあなたのお陰ね。感謝はしているわ」

「約束だからねえ」

馬車は陰気なシルフリアの街を駆けていく。途中で、フェアリープラント社の前を通った。頂上が見えないほど巨大なビルが、シャイアたちを見下ろしていた。

シャイアはこのビルを見る度に、父を殺した人間への憎悪を燃え上がらせるのだった。

## 天使は微笑み、悪魔は嘲笑う - 2

あの後シャイアはユーディアブルグに行き、エルヴィンと結婚した。そして、財産と呼べる物は、すべてシユラード家に入れてしまった。その中でも二億近い持参金は、エルヴィンを非常に喜ばせた。アンナは、シャイアの言う通りになった事に驚いていた。

ユーディアブルグはシルフリアの衛星都市と言える小さな街だ。シルフリアから海岸線を西に上がって十里ほどいったところにある。この街を支配しているシエラード家の豪邸は、海岸に面した高台にあった。

エルヴィンは異常なほどシャイアに尽くした。部屋は三階の一番広い部屋を明け渡し、頼みもしないのにドレスやアクセサリーを買い込んできたり、何人もメイドをつけようとしたりと、至れり尽くせりだった。エルヴィンの溺愛ぶりは、シャイアにとっては好都合だった。

シャイアは何も言わず、エルヴィンのやりたいようにさせていたが、メイドだけは断った。アンナとフェアリーたち以外は、自分に近づけさせなかった。

三階の窓からは、青海を一望する事が出来た。青い空と、それよりもさらに深い青の海、遙か彼方には二つの青を隔てる水平線が見える。それは、永遠に続くかと思うほどに広大な青の世界だった。

シャイアとコツペリアは、二人で窓の外を眺めていた。

窓の縁に立って見ていたコツペリアは、景色に飽きてシャイアの顔を見上げた。

「何だつて、何でもかんでもあの男にやっちゃったんだい。金まで全部やる事はなかったんじゃないのかい」

「いいの、どうせ全部わたしの物になるんだから」

「そうかい」

コツペリアはあっさり答えると、飛び上がってベッドの上に座っ

た。体を上下に揺らして、ふかふかの感触とベッドの弾力を楽しんでいる。

「まだ何か言いたい事がありそうね」

「屋敷の地下に何かいるよ、気配を感じる」

「何かって？」

「たぶん人間だね。地下に隠しておくくらいだから、よほどお前に見せたくないんだろう」

「ふうん」

シャイアは興味なさそうに答えた。その時、扉の向こう側から声がした。

「あのう、お嬢様、ご主人様がお呼びです」

シャイアが扉を開けると、アンナが立っていた。

「ここにはお嬢様なんていないわ」

「あつ、すみません奥様、つい……」

「気をつけなさい」

シャイアは、縮こまったアンナの前を通り過ぎる時に囁いた。

「すぐにお嬢様に戻るかもしれないけれどね」

「は？」

アンナには、シャイアの言う意図がさっぱり分からなかった。

シャイアはコツペリアを伴ってエルヴィンの待つ大広間に行った。

エルヴィンは、鐘形の大窓の前で庭園を眺めていた。

「お呼びになりました？」

「やあ、愛しい人、こつちにおいで」

シャイアが側に来ると、エルヴィンはか細い肩を引き寄せる。そうすると、シャイアはエルヴィンに体を預けた。シャイアから漂うほのかな香りが、エルヴィンをうっとりさせた。

「何を見ていらつしやるの？」

「フェアリーだよ」

庭園ではフェアリーたちがあくせく働いていた。庭の掃除から植木の剪定や炊事洗濯まで、それぞれの仕事に応じたフェアリーが屋

敷には多くいた。

「まったく便利なものだよ。あれは死ぬまで飲まず喰わずで働いてくれるのさ。その上、人間を使うよりもずっと安く上がる。フェアリープラントは本当にいいものを作ってくれた」

シャイアはコッペリアの様子に注意した。エルヴィンの言葉は、コッペリアが怒るに値すると思ったからだ。しかし、コッペリアはすましてシャイアの側についていた。

「どうだい、素晴らしいだろうシャイア。ここはわたしの支配する街だ。君はユーディアブルグの女王なんだよ」

「あなたって素敵」

シャイアは夫の頬に手を触れて笑いかけ、エルヴィンは絶世の微笑に酔いしれた。エルヴィンは、シャイアが側にいる時は、自分が選ばれた人間だと思わずにはいらなかった。

そこに、扉をノックした後に長い黒髪の若いメイドが入ってきた。その後にフェアリーが一人ついて歩いてくる。

「お茶をお持ちいたしました」

メイドが持ってきたティーポットからティーカップに紅茶を注ぐと、後ろをついていたフェアリーが、カップを受け皿に乗せて運んだ。最初はシャイアに、そして次はエルヴィンに、その時だった。フェアリーは少しバランスを崩して、エルヴィンの服に紅茶を少しばかりかけてしまった。それに気付いたメイドは、慌ててハンカチを取り出し、エルヴィンにかかったお茶を拭き取った。

「申し訳ありません、ご主人様!!」

そのときエルヴィンは、蠟人形のように表情を固めて、自分にお茶をかけたフェアリーを異常な憎悪を込めた目で見ていた。メイドは、主人の怒りを静める為に、何度も「申し訳ありません」と頭を下げた。

エルヴィンは突然手を上げて、メイドの近くできょんとしていたフェアリーを叩き落した。

「キャン!!」



フェアリーは子犬のような悲鳴を上げて、床に叩きつけられて転がった。

「こおの虫けらがあつ！ この俺の服を汚しやがってえ！」

エルヴィンは人が変わったように怒り狂い、床に落ちたフェアリーを何度も踏みつけた。エルヴィンの修羅の如き形相は、見紛う事なき狂人だった。

「おやめ下さいご主人様！ その子は何も分らないんです！」

メイドは形振り構わずに、フェアリーの上に覆いかぶさった。突然飛び込んできた異物に驚いたエルヴィンは、体勢を崩して後ろに倒れた。

「くつ、貴様あつ！」

「お許し下さい。この子はわたしのフェアリーです。罰ならわたしが代わりに受けます」

「何を言っている。フェアリーは全て俺が買い入れたものだ。それをメイド共に預けているだけにすぎん。俺が俺の物をどうしようと勝手だ。そいつはもういらん」

エルヴィンは立ち上がってメイドに近づいた。

メイドはフェアリーを抱いて、エルヴィンが近づいただけ後ろに下がった。

「そいつを渡せ」

メイドは激しく首を振って否定した。

エルヴィンは興奮と狂気の交錯した異様な笑みを浮かべて剣を抜いた。

「ならば、お前も処分する」

エルヴィンが剣を高く掲げると、じっと傍観していたシャイアが言った。

「あなた、お止めになつて」

エルヴィンは剣を下ろして、母親に自分の我を訴える子供のように、幼くて滑稽な顔になった。

「だってシャイア、こいつは俺にさからうんだよ。ユーディアブル

グの王であるこの俺に……」

「いけません。そんなつまらない物を斬っては、あなたの威厳に傷がつきますわ。王ならもっと大きく構えなくては」

シャイアは、エルヴィンの頬をなでて、艶かしい上目使いで見上げる。

「ねっ」

エルヴィンは、妖艶な刺激に頭がしびれる様な感じがした。

「そ、そうか、なるほど、確かに君の言うとおりだ」

「許してあげるから、お行きなさい」

メイドは深々と頭を下げて出て行った。

エルヴィンが出かけてから、シャイアはまだ慣れない屋敷の中を歩き回っていた。すると、さっきのメイドがシャイアの前に現れた。

「奥様、先ほどはありがとうございます」

シャイアはメイドが抱いているフェアリーを見つめた。腕や折れた羽にしっかりと包帯が巻いてあり、傷の手当てがしてあった。

「馬鹿な人ね。そんなものの為に殺されるところだったのよ」

「あの、この子は何も分らないんですけれど、それでも大切な友達なんです。本当に、馬鹿な事を言っていると思いますけど……」

メイドがもじもじしていると、コツペリアが目の前に飛んできて、フェアリーのこめかみの辺りに両手を当てて見つめた。

「え？ なに？」

「おまじないさ」

コツペリアが戻ってくると、シャイアは言った。

「あなた、名前は？」

「エレンです」

「わたしの側で働いてくれないかしら、エレン」

「奥様のお側で？」

「駄目かしら」

「いいえ、わたくしなどでよろしければ、何なりとお申し付け下さ

い！」

「そう、じゃあみなでお茶にしましょう。庭にテーブルとお茶の用意をするようメイドたちに言いなさい」

突拍子のない命令に、エレンは目を丸くした。

「この屋敷の人たちは働きすぎなの。お陰で屋敷自体が殺伐としていていけないわ。使用人にはもつと心に余裕を持ってもらわなくてはね」

シャイアの提案は、屋敷に働く者にとって、この上なく素晴らしいものだっただけだ。

「すぐに伝えます！」

エレンは久しぶりに喜びからの笑顔を浮かべた。

シャイアはあまり他人と慣れ親しむのは好きではなかったが、屋敷の使用人たちだけは、自分から進んで親交を深めるようにした。

その後すぐにシャイアは使用人たちの給金があまりにも安い事を知った。彼女はすぐに給金を倍にしてやり、家族が多かったり病気の肉親を抱えているような物には特別な手当ても与えた。

エルヴィンは、面倒な事は全て部下にまかせっきりになっていたので、それに気付く事はなかった。

夜中、誰もが寝静まる頃、シャイアはコツペリアを連れて、ランプを片手に屋敷の中を徘徊していた。

間近に聞こえる小波の音が、暗闇に溜息をつきたくなるような優しさを与えていた。

シャイアはその中を、音を立てないように歩いていく。やがて二人は、地下へと続く階段を見つけた。

「この先だね」

コツペリアの言葉に従って、シャイアは階段を下りていく。冷たい闇の底には、全てを拒絶するような鉄の扉が佇んでいた。さらに大きな錠前が、この屋敷の征服者の頑なな意思を伝えてくれた。

コツペリアが真紅の瞳できっと見つめると、錠前が真つ二つにな

った。分解して鉄屑となった錠前が高い音を立てて石床の上を跳ねる。シャイアは別に慌てもせず、屋敷の主でもあるように堂々と鉄の扉を押し開けた。

その牢獄とも言える部屋には、隅の方で燦るランプと中央のベッド以外には何も見当たらなかった。

シャイアがベッドに近づくと、そこには老婦人が寝ていた。息はあるが、肌の色が異様に青黒く、白髪はばさばさに乾いていて、少し引つ張れば根こそぎ取れてしまいそうな感じがした。

「そこにいるのは誰ですか？」

老婦人は目を開けたが、シャイアの事が見えていないようだった。「わたくし、シャイアと申します。エルヴィンの妻ですわ」

「おお、あの子は結婚したのですか」

老婦人は、嬉しそうに微笑を浮かべた。

「あなたは、お母様ですね」

「ええ、セシリーと申します。わたくしは見ての通り悪い病気なもので、他の者に病が移らないようにここで寝ているのです」

シャイアはセシリーの老いた手を取って、自分の顔にあてがった。「これが、わたくしですわ」

セシリーは、シャイアの顔の部位を一つ一つ触って溜息をついた。「美しい……でも、どうしてそんなに悲しんでいるのでしょうか。わたしは、あなたの事が哀れで仕方ありません」

「お母様……」

セシリアの全てを見透かしたような言葉が重くのしかかった。シャイアは胸の奥に針で刺されたような痛みを感じた。

翌日、エルヴィンが鹿狩りから帰ってきてから、三階の空き部屋に母が寝ていることを知った。

エルヴィンがその部屋を探し当てて扉を乱暴に開けると、母親の側でシャイアと何人かのメイドが看病していた。

「な、何をしているんだい」

エルヴィンは、シャイアに見つめられると、酷く狼狽えた。

「ごめんなさいね。あなたに断りもなく勝手にこんな事をして」

エルヴィンは何も答えず、シャイアを疑り深い目でみつめている。そこにエレンが出てきて言った。

「申し訳ありません、ご主人様。わたくしが奥様にお話したのです」  
「何だと？」

エルヴィンは眉を潜めた。

「お母様はもうすぐお亡くなりになるそうよ。あんな暗いところで一人で死ぬのはお可哀想でしょう。だからわたしがここに移すように命令したの」

「もうすぐ死ぬって、まさか医者に見せたのか……」

エルヴィンは青ざめた顔をして、狼狽振りをより一層深める。シャイアはそれを見て面白そうに微笑んだ。

「お医者様は、どんな病気かは分からないけれど、後数日の命だと言っていらしたわ」

「そうか、どんな病気かわからないか。もうすぐ死ぬのは確かなんだね」

「ええ」

エルヴィンは『病気』という言葉聞いて、落ち着きを取り戻し、それどころか喜ばしいような笑顔を浮かべた。

「亡くなるまでの間だけ、ここに置いてもいいでしょう」

「ああ、わかったよ。シャイア、僕はね」

「わかってるわ。お母様は自分の病気が移るといけないから、あんな所に寝ていたのよね」

「わかってくれているのならいいんだ」

エルヴィンが出て行くと、シャイアは心で嘲笑った。

医者の見立ては、シャイアが言った事とはまったく違っていた。本当はエルヴィンの母は何らかの毒素による中毒症だった。普段から何らかの方法で少しずつ毒を体に取り入れていたのだ。シャイアだけがそれを知っていた。

何て肝の小さい男なのかしら。あんな屑にこの街はもつたいないわね。

シャイアは母の寝顔を見つめて、裏に潜む魔性の部分を歪んだ笑みにさらけ出していた。

シャイアは水面下で活発に動いていた。フェアリープラントに関する情報収集は当然だが、商家の娘らしく商売事にも力を注いでいた。まず目をつけたのが、売りに出ていた二つの宝石鉱山だった。

シルフリアには豊かな輝石が眠っていると言われていたが、それを掘り出そうとする者は殆どいなかった。いざ掘ってみて宝石が出ないとなれば、大貴族でも一気に没落するほどの負債が出るのだ。例えば宝石が出ても駄目になる場合もある。宝石鉱山の経営には非常に高いリスクがあった。だが、シャイアはそんな事は恐れもしなかった。早速、地質学者を集めると、高い賃金を払って細かく調査させた。その結果、宝石は確実に出るという事が分かった。

シャイアはエルヴィンの下に赴いてすぐに交渉した。

エルヴィンは、二階の自室で椅子に座り、ワインを片手に窓から見える海を眺めていた。そこにシャイアが入ってくると、彼は心から歓迎する笑みで迎えた。

「君も一緒にどうだい。海を見ながら飲むのもいいものだよ」

シャイアはそれには答えず、エルヴィンの首に両手を回してまわりついた。シャイアの柔らかい感触と甘い香りに、エルヴィンは目眩を起しそうになった。

「ねえ、お願いがあるの」

シャイアが耳元で囁くと、エルヴィンはうつとりとした顔で言った。

「君が願う事なら何だって叶えてあげるよ、言ってごらん」

「本当に？　じゃあ、宝石鉱山を買いたいわ」

「何だって？」

エルヴィンは急に顔色を変えて立ち上がった。

「宝石鉱山だつて、それだけは駄目だ」

「どうして？ さつきは何だつて叶えてくれるって言ってくれたのに」

「いや、その、宝石は危ないんだよ。大貴族のシルヴァンヌを知らないのかい？ シルヴァンヌ家は宝石で失敗して、一気に没落してしまったんだよ」

「知っているわ。彼らは貴族だもの、商売には向いていなかっただけの事よ。わたしは商家の娘よ。経営には自信があるの」

シャイアはエルヴィンの首にすがり付いて、相手の目を逃がさないように見つめた。

「だいじょうぶ、わたしを信じて。シュラードを必ず大貴族にして見せるわ」

「……………わかったよ」

シャイアの甘えた声に誘われて、エルヴィンはいとも簡単に折れた。

「ありがとう、あなた」

シャイアは夫に軽く唇を重ねると、一度部屋を出てから、相当量の書類を持って戻ってきた。

「後はこれにサインしてくればいいわ。これで鉱山は全てあなたのものよ」

「本当に大丈夫なんだろうね」

「心配しないで、近いうちに素晴らしい宝石をお見せするわ」

エルヴィンは疑いもせずに、十数枚の書類に自分の名前を書いて判を押していった。

二つの宝石鉱山は、それぞれコランダムとクリソベリルが産出されるはずだった。

シャイアはすぐに坑夫と監視員を集めて、宝石の採掘に着手した。宝石の研磨職人や流通ルートの確保にも抜け目はなかった。

しかし、採掘が始まってから二日たち、三日たっても宝石が出たと言う報告は上がってこなかった。

「宝石はまだ出ないのかい？」

コツペリアが無表情で聞くと、シャイアは椅子に座ったまま、別段変わった風もなく言った。

「これくらいの事は予想していたわ」

「宝石が出ない事がわかっていたのかい？」

「宝石は出ているのよ。ただちゃんと回っていないだけよ」

「どういう事だい？」

「大貴族のシルヴァン又家は、エメラルド鉱山を所有していたわ。素晴らしいエメラルドがいくらでも出るのよ。それでもシルヴァン又は潰れてしまったの。それと同じ理由よ」

コツペリアはさっぱり意味が分からず首をかしげた。

「あなたの出番よ」

シャイアの瞳に、飢えた雌豹のように攻撃的な光が宿った。それを見たコツペリアは、何だかいい予感がした。

シャイアは使用人に馬車を用意させた。行き先を告げると、御者の老人は慌てて止めようとした。

「鉱山に行くですって？ とんでもない事ですよ。あそこは奥様のようなお方が行く場所ではございません」

「いいから、言う通りになさい」

有無を言わさぬ一言に、御者は仕方なく馬車を出した。

シャイアは鉱山に行く前に、鉱山の麓にある町に立ち寄った。最近までは何も無い小さな町だったが、宝石鉱山が開かれてからは、多くの職人達が移住してきて賑わっていた。

上等な造りの馬車が埃っぽい町の中を走ると、それを見慣れない町人たちは否応なしに注目した。馬車は研磨工場の前で止まり、そこから漆黒のドレスの麗人が、不吉な感じのするフェアリーを連れて出てきた。彼女が工場に入っていくと、研磨工たちは作業を止めて貴婦人の姿に見とれた。職人達の着ている服はそれぞれ違うが、



薄汚れた上着一枚とズボンとう組み合わせは一緒だった。

「わたくしはシャイア・シュラード、鉱山の持ち主よ。責任者を呼びなさい」

突然のシャイアの登場に、職人達の間明らかに困惑した空気が流れた。すぐに管理人と称する男がやってきた。男はたくましい体つきで、脂ぎった顔に職人らしい精悍さがあつた。

「これは奥様、こんな所までいらつしやるとは……」

シャイアはわざとらしくそれを無視して、研磨された青い宝石の一つを摘んだ。

「素晴らしいサファイアねえ。こんなに宝石があるのに、どうしてわたしのところには一つもこないのかしら？」

「奥様、これは別の鉱山から運ばれてきた宝石なんですよ」

シャイアは職人達が磨き上げた宝石を一瞥した。ざっと見ただけでも、ルビー、各種サファイア、キャッツアイ、アレキサンドライト等、かなりの数があつた。

「わざわざ別の鉱山の宝石をここで磨くわけ？」

「わしらだって食っていかなけりやなんのです。だから仕事は多い方がいい。他の鉱山から仕事を持つてくることだってありまさあ」

「ここにある種の宝石は、全部わたしの鉱山から出るものよねえ」

「それはたまたま他の鉱山でも同じような宝石が出ているだけでさあ」

男は悪びれもせずに当然のように答えた。

「本当にい？」

男はシャイアに睨まれると、背中に冷たい汗が流れた。シャイアの目は恐ろしく冷酷な上に殺気立っていた。それに合わせるようにコッペリアが研磨工を一人ずつ睨んでいく。見られた者は言い知れぬ恐ろしさを覚えた。

「ほ、本当でさあ。だいたい、奥様みたいな金持ちに、わたらの仕事の何が分かるというんです」

男が開き直ると、シャイアは完全に見下してそれを見つめた。

「言っておくけれど、嘘をついたら必ず後悔する事になるわよ。正直に言うなら今のうちよ」

「嘘なんて何もついちゃあいねえ」

この男を始め、職人達は完全にシャイアを見くびっていた。シャイアにもそれは分かった。もうこれ以上話をしても無駄だった。

シャイアは鉱山に向かった。険しい山道だが、鉱山に行くまでの道は馬車でも何とか通れるくらいに整備されていた。凹凸の激しい道で馬車は酷く揺れた。そのせいもあって、シャイアの機嫌は最低最悪に損なわれていた。

ぼつかりと大口を開けた洞窟の前で馬車は止まった。鉱山の入り口で監視員の一人がシャイアを迎えた。

「これは奥様、こんな薄汚い場所によくいらつしました」

このときシャイアは二つの違和感を覚えた。一つは、監視員がシャイアが来る事を知っていた事だ。恐らく、町の誰かがシャイアが来た事を知らせたのだろう。二つ目は、監視員が銃を持っていなかった事だった。十六人の監視員に一丁ずつ長銃を渡してある筈だった。

「あなた、何故銃を持っていないの？」

「いや、はや、何と言うか。大変申し上げ難いのですが、宝石が全く出ないので、銃も無用かと思ひまして……」

「……ま、いいわ。ここに坑夫と監視員を全員集めなさい」

「は？ ここに全員ですか？」

「そうよ」

「しかし、今すぐとなると、これはまた、難しいと言うか……」

「余計な事は言わなくていいわ、早くしなさい」

怒りを押し殺した声に監視員は圧倒された。さらにシャイアに見据えられると、まるで悪魔に睨まれているように足がすくんだ。

監視員は逃げ出すように洞窟の奥へ消えていった。

坑夫と監視員が全員集まるにはしばらく時間がかかった。監視員はすぐに集まったのだが、一様に汗臭く汚れた姿の坑夫たちはもた

もたしていた。まるで、わざとシャイアをじらしているようにも思えた。集まった坑夫の中には、シャイアに悪態をついたり、嫌らしい目で見たりと、オーナーに対してあらざる態度を取る者が多かった。コツペリアは、その時までは大人しくしていた。

二つの鉱山から十六人の監視員と百人近い坑夫がようやく集まると、シャイアは良く通る声で言った。

「あなたたち、わたしに何か言う事があるでしょう」とたんに沈黙した。

「無駄だと思うけど、一応忠告しておいてあげる。嘘は言わない方が身の為よ」

そして、ざわめきが起こった。坑夫たちは、シャイアを変人扱いして笑った。それに勢い付いて、一人の坑夫が手を上げて出てきた。「おう、言いてえ事ならあるぞ」

他の坑夫が「何だ、言ってみろ」と茶化すと笑いが起こった。

「給料が安すぎんだよ！ 宝石も出ないのに毎日穴掘りばかりさせられてよお、冗談じゃねえ！」

「お給金は標準的だと思うけどお。だいたい、宝石を横取りして、その上に給料を上げるだなんて、図々しいにも程があるわねえ」

「何だと！ おい聞いたかみんな、俺達が宝石を横取りしているだよ！」

坑夫たちの中から『証拠を見せろ』という声が上がると、誰もがその声に賛同した。

「ふうん、よく分かったわ。後悔するわよ、あなたたち」

シャイアが目で合図すると、コツペリアが坑夫たちの前に飛んできて、左右を行ったり来たりした。そして、シャイアに不当な不満を訴えた坑夫の前で止まり、嫌な笑みを浮かべる。

「な、なんでえこいつは……」

真紅の瞳に見据えられると、坑夫の本能が危険を訴えた。

「お前、可哀想にねえ。もうすぐ死ぬみたいだよ。少しくらい死ぬのが早まってもいいよねえ」

「はあ？」

その坑夫が不可解に眉を寄せると、耳の近くで奇妙な音がした。とたんに両腕の感覚がなくなって、肩が異様に軽く感じた。

「ああ？」

男の両腕が、肩より少し下の辺りから消えていた。

「あ……あああああっ！！？ う、腕があっ！！！ お、俺の、俺の腕ええええっ！！！！」

両腕は男の足元に転がっていた。切り落とされたところから血が赤い滝となって流れ落ちる。他の坑夫たちは何が起こったのかわからずに啞然とした。

「いてえよお！！！！ いてえよおっ！！！！ ひーっ、死んじまうっ！！！！」

「そうかい、痛いのかい。じゃあ今楽にしてやるよ」

コッペリアが楽しそうに笑うと、絶望的な表情を貼り付けたままの男の首が真上に飛び、坑夫たちの前に重い音をたてて落ちた。とたんにパニックが起った。

首と両腕を失った坑夫の体は、血を撒き散らしながら両膝をつき、ゆっくりと前のめりに倒れる。その拍子に、坑夫のポケットから宝石の原石が散らばった。

「なあんだ、ちゃんとあるじゃなあい」

「ひ、人殺しいっ！」

坑夫たちは口々にそんな事を言った。シャイアは冷酷に屈強な男たちを見据える。彼女は坑夫が死んだ事など、何とも思っていないかった。

「人殺しですって？ 宝石を盗んだ坑夫は、殺されても文句は言えないのよお。坑夫だったらそれくらいは分かっているわよねえ」

コッペリアは、今度は監視員の一人に目をつけた。

「一粒でも宝石を盗んだ者は、一人の例外もなく有罪よ」

コッペリアが迫ってくると、監視員たちは散り散りに逃げ出した。コッペリアはその中の一人をしつこく追い回す。

「ひつ、嫌だ、助けて！」

「逃げるんじゃないよ。死が少し早まるだけさ」

六枚の翅が開き、監視員に向かって伸びる。監視員は剣と化した六枚の翅に貫かれて断末魔の悲鳴をあげた。コッペリアは翅の刃が体から突き出して痙攣する監視員の体を持ち上げて、全員の目に届くように晒した。命が風前の灯の監視員は、口から血を滝のように吐き出して事切れた。その時に服の中からカットされたサファイアが何個か落ちてきた。コッペリアが死体を坑夫の集団の中に投げ捨てると、さらに狂った悲鳴が起こった。

その惨劇に運よく生き残った監視員の何人かが腰を抜かして失禁した。

耐え切れなくなった数人の坑夫が、気も狂わんばかりの姿を晒して、その場を逃げ出そうと走り出す。すると、どこから銃声が響いた。逃げだした坑夫たちが次々に倒れていく。全員、頭を撃ち抜かれて即死していた。

前から長銃を携えた黒服の兵隊が歩いてきていた。

「彼らは新しい監視員よ。みんなプロの殺し屋なの。宝石を盗む悪い子たちは、容赦なく殺すように言ってるから」

坑夫たちはシャイアの前に身を投げて、地面に頭を擦り付けた。

「許してください、俺達が悪かった！　どうか命だけは！」

「盗んだ宝石も全部返します！」

坑夫も監視員も、宝石を盗んだ覚えがある者は、必死に頭を下げて許しを願った。

「まず、持っているものをここに出しなさい」

坑夫と監視員たちは、持っていた宝石や原石をシャイアの足元に出していった。宝石を持っていなかったほんの一握りの坑夫は許されて、すぐに仕事に戻された。

全ての坑夫たちが盗んだものを出すと、シャイアの足元には宝石が山と積まれた。

「最初からこうしてくれれば、許してあげたのにねえ」

シャイアは坑夫たちの運命を決める裁判官だった。屈強な男たちはすっかり萎縮し、悪魔のフェアリーと容赦ない殺し屋たちに囲まれて、生きた心地がしなかった。

「横流しした宝石の分は、働いて返してもらおうよ。そうねえ、向こう一年間はただ働きしてもらいましょうか」

「そんな殺生な！ 家族だっているんです、勘弁してくださいええ！」  
坑夫の一人が言うと、みんなシャイアに目で訴えた。シャイアはそれらを一蹴した。

「わたしは不当な要求はしていませんでしょう。盗んだものを働いて返して欲しいと言っているだけよ。それが嫌なら全て耳を揃えて返してちょうだい」

坑夫たちは完全に沈黙した。これで判決は決まりだった。

「さて、後は役に立たない監視員はもう必要ないわね。今まで盗んだ宝石の分は、指の二、三本で許してあげましょう」

町人たちは突然現れた異様な一団を、気味悪そうに見つめた。指を切り落とされた監視員達が、血の雫を落としながら、痛々しい姿で町の中を歩いていった。

それに少し遅れて、シャイアたちの馬車が再び研磨工場の前に到着した。

シャイアが工場に入ってくると、管理人の男が飛んできた。男は側を飛んでいるコッペリアが、皮袋を二つ背負っているのが気になった。

「奥様、まだ何か御用で？」

「仕事を依頼したいのだけれど、その前にこれを見てから正直に答えなさい」

「土産だよ」

コッペリアが管理人に皮袋の一つを投げた。管理人がそれを抱きとめると、想像以上の重さに眉をひそめた。何かと思って開けると、「うわあぁっ！！？」

悲鳴をあげて袋ごとそれを投げ出した。袋から転がり出た坑夫の生首が、職人たちを総立ちさせた。

「よく考えて答えなさい。嘘を言ったら、その坑夫と同じ事になっちゃうかも」

「はわ、お助け……」

「ここにある宝石は誰のものなのかしら？」

「も、もちろん奥様の物です！　ここにある宝石は、全て奥様の鉱山から出た物です！」

「あらあ、おかしいわねえ。さっきと言っている事が違うじゃない」

「あ、あれは、その、ついついあんな事を言っちゃまって、本当に馬鹿な俺でした」

管理人は恐ろしさに体を震わせて、よく分からない言い訳をした。

「あなたも一年間ただ働きよ、いいわね」

「そんな奥様、そりゃああんまりだ！」

「いいじゃない、宝石を横流しして大分儲けたのでしょうか？」

「滅相もねえ！　俺はただ坑夫どもに頼まれた宝石を……」

と管理人が言いかけたとき、側にあった円形の研磨盤が置いてあった机ごと真つ二つになり、その片割れが管理人の足元で踊った。

管理人は悲鳴をあげて腰を抜かした。

「正直に言って言ったでしょう」

「申し訳ありません！　出来心だったんです！　どうか命だけは取らないで下さい！」

シャイアはごくつまらないものを見る目で管理人を見下げた。

「このわたしを小娘だと思って馬鹿にしたのが運の尽きだったわね」

シャイアは、コッペリアから宝石の原石が詰まったもう一つの皮袋を受け取った。

「これ、お願いね。いい加減な仕事をしたら承知しないわよ」

「は、はいっ！　お任せ下さいませ」

管理人は慌てて皮袋を受け取ると、研磨工の一人に渡して「はやく仕事に取り掛かれ！」と職人たちを急かした。

「あと、出来上がっている宝石は持つて帰るから用意しなさい」

「はいっ！ 畏まりました、少々お待ちを！」

管理人は一々返事に不自然な緊張を込めた。シャイアが宝石を受け取って出て行くと、肩の力を抜いて安堵したが、ふと下を見ると不幸な坑夫の首が転がっていたので、息が止まりそうになった。

冗談じゃない、こんなところ今夜にでも逃げ出そう……。

管理人が脱走の決意をしたとき、シャイアがドアを開けて顔だけを出した。管理人は反射的に背筋を伸ばして再び緊張した。

「逃げようなんて考えない方がいいわよ。殺し屋を監視員として雇ってあるからね。さっきも逃げようとした坑夫が何人が殺されたわ」

シャイアは管理人の希望を粉々に打ち砕いて去った。わざわざ管理人をどん底に落とすタイミングを計ったのだ。管理人は絶望のあまり放心してしばらく動かなかった。



### 天使は微笑み、悪魔は嘲笑う - 3

丸テーブルに数多の宝石を広げると、エルヴィンは予想以上のものに驚き、一瞬声が出なかった。

「君は何て素敵なんだ！ 君のような妻を持つことが出来て、わたしは幸せ者だよ！」

エルヴィンは立ち上がり、シャイアをきつく抱きしめる。シャイアは拒みはしなかったが、薄笑いを浮かべる表情の中には、明らかに嫌悪の色が表れていた。

それからというもの、鉱山の経営は滞りなく、宝石の売買によって月に数千万という利益が出るようになった。

エルヴィンは普段は遊んでばかりいるが、たまに思い出したように部下を連れて仕事に出かけた。その仕事に出るときはエルヴィンは、いつも興奮と嬉々が入り混じった異様な顔をしていた。

シャイアはそれに一度だけ同行したことがあった。エルヴィンはあまりいい顔はしなかったが、シャイアがどうしてもと言うのを拒む事もできなかった。

強烈に照りつける夏の日差しが眩しい朝だった。暗色系のドレスを好むシャイアも、さすがにこの時期は白色系のドレスを着る事が多かった。コッペリアはいつも通りの紫のドレスで、暑かろうが寒かろうが顔色一つ変えない。

エルヴィンはシャイアの為に馬車を用意して、自分は部下二人と共にそれぞれ馬に跨った。部下たちは何故か大きな荷車を引いていた。そして、エルヴィンと部下たちは、剣と共に、重量感のある櫓の棒と、拳銃も携帯していた。

「あまり気持ちのいいものではないよ。正直言って、君にはついてきて欲しくないんだけどね」

シャイアが馬車に乗るときに、エルヴィンは言った。この男はい

つもシャイアを側に付けたがるので、こんなことを言うのは珍しい事だった。

「夫のしている仕事を知らなくては、本当の妻とは言えせんわ。一度くらい見せて頂いてもよろしいでしょう？」

「そう言ってくれるのは嬉しいけどね。でも、これつきりにしてくれよ」

コッペリアはエルヴィンの表情の変化に気をつけていた。シャイアの同行を嫌がる彼の顔には、まるで楽しみを邪魔される子供のような、邪険な色が浮かんでいた。

コッペリアはシャイアの隣に落ち着くと、馬車が走り出すなり言った。

「これは仕事なんかじゃないねえ。遊びだよ、遊び」

「ま、そんなところでしようね」

「どんな遊びなのかは分からないけどねえ」

シャイアは無言で馬車の窓から馬上のエルヴィンを見ていた。部下に何か指図している姿は凛々しく見えた。ギャンブルにのめり込む姿は情けない。女遊びが過ぎるのは嫌らしい。しかし、それらの遊びはまだ人間らしい。シャイアは、エルヴィンの中に潜む人間らしからぬ何かを感じていた。

エルヴィンの言う仕事というのは、税金の取立てだった。こんな仕事は部下に任せておけばいいはずなのだが、なぜか領主自らが勇んで出て行った。

ユーディアブルグは海岸線に面する街で、海岸近辺には裕福な者が多く住み、海岸から離れるにつれて貧しい者が増えていった。エルヴィンの仕事は、海岸から最も離れた地区で行われた。

シャイアは馬車を降りて僅かに顔をしかめた。海から最も離れた場所には、多くのあばら家が建っていて、いかにも貧民街という様相だった。普段は領民たちが貧しいながらも元気良く暮らしている姿が見られるところだが、今はエルヴィンたちを警戒しているように、ひっそりとしていた。

エルヴィンは、早速手近にある一軒に入っていく。部下はそれに続き、すぐに中から悲鳴のような声が聞こえてきた。シャイアが中を覗くと、エルヴィンがボロを着た一人暮らしの老人を、棒で打ち据えていた。

「払えないだとお！ 払えないで済むと思っっているのか！」

「許して下さい、こんな貧乏暮らしでは、あんな重い税金などとても払えません」

「何だその言い草は！ 家畜以下の領民が、俺に意見するのか！」

エルヴィンが高揚した笑いを浮かべて棒で老人の頭をぶったたくと、老人は流血してたまらず後ろに転げた。

「ぐあああ……」

苦しむ老人を見ていたシャイアは、この上なく素晴らしい物を見つけて、歪んだ微笑を浮かべた。

エルヴィンは部下に命令して、少しでも金になりそうな物を片っ端から取り上げた。それらは部下が引いてきた荷車に乗せられた。

シャイアはさりげなく家屋の中に入って、エルヴィンたちが出て行くと、すばやく老人に近づいて、皺だらけの手に数枚の金貨を握らせた。それを見た老人は驚き、流血しているのも忘れて、シャイアの事を見上げた。シャイアは唇に人差し指を当てて、老人が声を出しそうになるのを止めた。

「それで怪我を治しなさい」

シャイアはそれだけ囁くように言うと、さっと家屋を出て行った。老人は感動のあまりに涙を流し、壊れかけた扉に向かって、両手を組んで額が地面に付きそうになるほど頭を下げた。まるで女神に祈りを捧げているような姿だった。シャイアが老人に手渡した額は、奪われた財産の十数倍にもなった。

ユーディアブルグの税金は、フラウディア王国の中でも屈指の高さで、貧しい領民たちにはとても払える額ではなかった。これはエルヴィンが、搾取と証する遊びを楽しむために設定された額と言っても良かった。

エルヴィンはそれから調子付いて、次々と家屋に入っては、貧しい領民たちを苛めた。大怪我を負わされる領民など、一人や二人ではなかった。シャイアはその度毎に、不幸な領民たちに金貨を握らせて、手渡したものの以上の感謝と尊敬を獲得していった。

そして、その日最後の取り立てで、エルヴィンの本性があらさまになった。それは、シャイアは想像を遥かに上回るものだった。三人の家族と一人のフェアリーが住んでいた。

エルヴィンはノックもせずに、ドアを蹴り開けて入っていった。中には、寝たきりの母親と、シャイアとそう年の変わらない娘、まだ十歳にもならない男の子がいた。

シャイアが後から入ると、娘と目が合った。栗色の髪を後ろで結わえた可愛い娘で、着ている服は継ぎだらけのおんぼろだが、十分に魅力的だった。側には桃色の髪の虚ろな目をしたフェアリーがいて、怯える娘と何も感じていないようなフェアリーの姿が、シャイアには妙に印象的だった。

男の子は敵意をむき出しにした目をエルヴィンに向けて、奥のベッドで寝ていた母親の方は心配そうにこちらを見ていた。

「税金を今すぐ払ってもらおうか」

エルヴィンがニヤニヤしながら言うと、娘が前に出てきた。

「今は払えるお金はありません。でも、近いうちに必ずお支払いしますから、今日はどうかお引取り下さい」

「フェアリーを買う金があるのに、税金が払えないと言うのか」

「この子は、買ったんじゃないやありません。大怪我をして倒れていたのを拾ったんです」

「そんなゴミを拾って飼いなすとはな、どうかしている」

娘は自分のフェアリーを侮辱されたとき、怯えていたのが嘘のように、エルヴィンをきつと睨み付けた。

エルヴィンは無慈悲さで塗り固めた無表情で、目だけを動かして中を見回した。そうすると、母親の枕元にある紙袋が目についた。目の前の娘を押し退けて母親に近づくと、男の子が両手を広げて前

に立ちはだかった。

「どけ！」

男の子は、エルヴィンの平手で殴り飛ばされて、ベッドの足元に倒れた。

「カイル！」

母親が叫ぶと、娘が駆け寄ってカイルと呼ばれた少年を抱き起こした。

エルヴィンは袋の中身を見て、満足するような笑みを浮かべた。

「薬じゃないか。税金も払わずに、こんなものを買い込むとはな」

「それは母さんの薬なんです。母さんは心臓が悪くて、その薬がないと数日で死んでしまうんです。お願いですから、それだけは勘弁して下さい」

娘が懇願すると、エルヴィンは薬を放って娘の腕を掴んで引き寄せた。

「なら、お前がいい。お前なら高く売れるだろう」

「やめて下さい。カンナを連れて行かないで」

「黙れ！」

エルヴィンは母親の訴えを一蹴し、カンナの顎を掴んで自分の方を向かせると、さも楽しそうで嫌らしい笑みを浮かべた。

「うーん、いいな。家畜にしては上玉だ」

そのときエルヴィンは、自分の足元にカイルがいるのを認めた。

「このろくでなし！ 姉ちゃんを放せ！」

カイルは思いっきりエルヴィンの脛を蹴り上げた。

「ぐああっ！」

エルヴィンはたまらず片足立ちになり、無様にぴよんぴよん跳ね回り、後ろに倒れたかと思うと、脛を押さえながら今度は左右に転げ回った。シャイアはその姿に思わず笑いが漏れた。

「エルヴィン様！ 大丈夫ですか！」

部下の一人が近づくと、エルヴィンは立ち上がって部下を押し退け、すばやく拳銃を取ってカイルに銃口を向けた。その顔は怒りの

余り表情を失っていて、無表情の中に異様な気迫を漂わせていた。さすがのシャイアも、まさかと思った。

「身の程知らずめ、死ね！」

エルヴィンは何の躊躇もなく引き金を引いた。

拳銃が火を噴く直前、娘の側にいたフェアリーが非常な速さで飛んで来てカイルに体当たりをした。カイルは押し飛ばされ、次の瞬間に耳を劈く銃声が鳴り響き、フェアリーはカイルの身代わりになって胸を撃ちぬかれた。

その一瞬の出来事に、その場に居る誰もが啞然とした。ただ一人、コッペリアだけは落ち着いて状況を見ていた。

フェアリーはきりもみしながら床に落ちた。真っ赤な血が広がっていくと、カンナは放心気味になって、フェアリーに近づいた。

「リリイ！」

カイルが名を呼んでも、フェアリーは起きなかった。カンナは小さな体を抱き上げて、服が血だらけになる事などおかまいなしだった。

「リリイ、目を開けて……」

リリイは主人の声に答えて目を開けた。その目を見て、カンナは胸に感動と悲しみが込み上げた。いつも虚ろだったリリイの瞳に、生気のある光が宿っていた。リリイは一生懸命に口を動かして何かを言おうとしていた。その健気な姿を見ると、カンナの中に凄まじい怒りが燃え上がった。

「鬼！ 悪魔！ あなたなんて人間じゃない！」

娘は怒りをエルヴィンにぶつけた。するとエルヴィンは狂人的な笑みを浮かべて再び拳銃を構えた。

「悪魔で結構だ」

再び銃声が起こった。カンナは理解できない衝撃を受けて、母のベッドに倒れ掛かった。胸が熱いと思って見ると、リリイが撃たれたのと同じ場所から紅が広がっていた。

「姉ちゃん！！？」

「カンナ！！？」

母親とカイルは同時に叫んだ。カンナには、その叫びは聞こえなかった。リリイを抱いたまま横に崩れていった。

「リ、リリイ……」

リリイは、カンナを愛くるしい瞳で見つめていた。カンナもそれに微笑で答えた。

しかし、エルヴィンは二人に与えられた最後の安らぎをも奪い取った。リリイの翅を無造作に掴んでカンナから引き離すと、遠くに投げ捨てたのだ。

「くだらん茶番だ」

「やめろ、やめろーっ！」

カイルは泣きながらエルヴィンに組み付いた。所詮は子供である、カイルはあっけなく蹴飛ばされて壁に叩きつけられた。

カンナは、最後の力で這いずり、床に血糊をつけながらリリイの姿を追った。リリイも同じように這いずって、カンナに近づいていく。二人が手を伸ばし、もう少しで触れ合おうとした時、エルヴィンは卑劣にもカンナの手を踏みつけて、それすら許さなかった。

「馬鹿が、何も理解できないフェアリーなどに必死になりやがって、どうしようもない屑共だ」

カンナとリリイは、手を触れる事も出来ずに、そのまま息絶えた。エルヴィンはそれだけでは飽き足らず、泣き喚くカイルと母親に銃口を向けた。だが、引き金を引く事は叶わなかった。拳銃がいきなり弾け飛んだのだ。

「何だ？」

エルヴィンの拳銃は床を滑っていった。エルヴィンがそれに気を取られていると、コッペリアが目の前に来ていたので驚いた。

エルヴィンはいきなり腹部に衝撃を受けて真横に吹っ飛んだ。悲鳴を上げる間もなく土壁が崩れるほど強く叩きつけられて悶絶した。「屑は貴様の方だ」

コッペリアは床に下りると、カンナとリリイの手を重ね合わせた。

その時に、既に死んでいる二人の顔が、少し安らいだように見えた。  
「この娘はこのフェアリーを愛していた。だからフェアリーも答えた。何もわからないんじゃないよ。分かってても、心に鍵をかけられているから、言葉に出す事が出来ないだけなのさ」

エルヴィンは部下たちに肩を持たせて、咳き込みながら言った。

「シャ、シャイアっ！ お前のフェアリーが、この俺を屑呼ばわりしたぞ！ 使い魔の癖にふざけやがって！」

入り口で呆然と見ていたシャイアは、早足で家屋に入り込んでコッペリアを抱き上げた。

「ごめんなさいね。後でよく言っただけだから、もう行きましよう」

シャイアは、カンナとリリーの哀れな姿を見て、すぐに目を逸らした。

シャイアが馬車に乗るとき、家の中から聞こえてくる母親とカイルの泣き声が耳に届いて、たまらない気持ちになった。

帰りの馬車の中で、シャイアはめずらしく塞ぎこんでいた。カンナとリリーの姿が頭に焼き付いて離れなかった。

どうして、あんな顔をしていたの。無下に殺されたのに、無意味に殺されたのに、どうしてあんな……………。

今思うと、カンナとリリーの顔は穏やかだった。シャイアにはそれが不思議でたまらなかった。

同時に、エルヴィンの事を思うと、吐きたくなくなるような気持ちになった。シャイアは自分の事を、相当卑劣な人間だと理解しているが、エルヴィンの卑劣さはそれとはまったく次元が違っていた。シャイアの場合は、復讐心から生まれた卑劣さであって、それはシャイアという人間を象徴するわけではない。しかし、エルヴィンの卑劣さは元から持っている資質と言えた。卑劣という二文字は、エルヴィンという人間の一端を担うのだ。

シャイアは考えるのを止めて、大きく息をついた。コッペリアが隣に立っていて、窓から外を見ていた。



「よく我慢したわね。殺しちゃうかと思ったわ」

「殺したらお前の具合が良くないだろう」

「そうね。つらい思いをさせたかしら」

「お前が復讐を果たすまでは、お前の良い様にする。約束だからね」  
コツペリアは外を見るのを止めると、シャイアに寄り添って座った。

「説教するんじゃないのかい。よく言って聞かせるとか言ってたじゃないか」

「するわけないでしょ。あの男は屑以下だわ。わたしもいい加減疲れちゃった。そろそろ退場してもらおうかしら」

まだその時ではないが、シャイアの思う通りになるのは時間の問題だった。

シャイアは、宝石の方がうまくいくと、今度はジュエリーの専門家を集めて、宝石店の経営に乗り出した。自分の名前をブランド名にして、シルフリアの貴族街に店舗を構え、ジュエリーの販売を始めた。

シャイアの事業は、アンナ以外の誰にも知らされることはなかった。エルヴィンとは言えば、シャイアからアレキサンドライトの指輪やサファイアのタイピンなどが送られると、もうそれだけで有頂天になり、シャイアのやっている事を詳しく聞こうとはしなかった。さらにシェラード家の屋敷の家具や調度品は、シャイアの手によって、いつの間にか前よりも上等なものに総変わりしていて、それもエルヴィンを喜ばせた。

シャイアは度々セシリーの寝室に足を運んでいた。哀れなセシリーは日に日に弱っていき、医者の見立て通りに数日後にはもう虫の息だった。母親がそんな状態になっても、エルヴィンはただの一度も見舞いに来なかった。

セシリーがいよいよ危ないという時に、シャイアはメイドたちを外に出して、病人の枕元で椅子に腰掛けた。

「お母様、あなたの御子息は罪深い方ですわ」

シャイアが耳元で囁くと、昏睡していたセシリーは息を吹き返したように目を開けて、光を失った目でシャイアを見た。

「ああ、シャイア……」

セシリーは衰弱が露になった震える手を伸ばした。シャイアがその手を握ると、セシリーの目じりから涙が零れた。

「全て、全てわたしが悪いのです。あの子が領民に酷い事をしてるのは知っていたのに、母としてそれを咎めることが出来なかった。わたしは弱すぎたのです」

「わたしが代わって罰を与えて差し上げますわ」

「わたしにも、あなたのような強さがあれば、あの子は残酷にならずに済んだのに」

「そんな風にされても、あんな男を愛するのですか」

シャイアは、セシリーの甘さと優しさに苛立ち、語気を強めた。

「全ては私が悪いのです。この病はわたしの弱さに対する罰なのです」

「……お母様は食事に毒が入っていると知っていて食べ続けたのでしょう」

セシリーが頷くと、シャイアはさらに言った。

「あの男は、財産を独り占めする為に、お母様に毒を盛り、お母様はそれを甘んじて受けた。それは優しさでも潔さでもありません。ただの逃避ですわ」

セシリーは厳しい言葉にも微笑を浮かべた。その表情には、死の間近にした人間の諦めが滲んでいた。

近づきつつある死は、セシリーの感性を達観させた。ただシャイアの手を握っているだけで、冷たくも暖かい、そして恐ろしくも純粹な、そんな光のようなものを感じた。

「あなたはとても優しい子です」

「わたしが、優しい？」

「最後にわたしの事を叱ってくれました。今までわたしを叱ってく

れた者など誰もいなかったのに」

「あなたが余りにも愚かで、言わずにはいらなかっただけです」

「分かっていますよ。あなたはそういう人です」

シャイアはため息をついた。セシリーに見つめられると、何も見えないはずなのに、全てを見透かされているように感じた。

「ユーディアブルグをお願いします。あなたなら、きつと変えられる」

セシリーはそれを最後に再び昏睡して、二度と目を開ける事はなかった。

「お願いされてもねえ。わたしは復讐の為に利用できるものを利用するだけですわ」

シャイアは届かないと知りつつ、セシリーにそう言って立ち上がった。

セシリーは翌日に亡くなり、シャイアと使用人たちだけで簡単な葬儀が執り行われた。エルヴィンはその時ですら顔を出さなかった。

「あの男を追い出すのに、何か面白い方法はないかしらね」

シャイアはテラスに出て、大海を眺めながら言った。シャイアはこの景気は気に入っていた。夏の日差しは強いが、海から吹き上げる風は程よい涼しさで、潮の香りが爽やかな午後だった。青い海は銀色に輝き、波打ち際では上半身裸の子供たちがはしゃいでいる。

コッペリアが飛んできてテラスの柵の上に立った。

「その気になればいつでも追い出せるんだろう」

「ただ追い出すだけじゃつまらないでしょ。それに、あの人には今まで犯した罪に対する代償を払わせるべきだわ」

「あいつを苦しめればいいのかい？」

「ま、そういう事かしら」

「だったら、うっちゃっておけばいいさ」

シャイアは外を見ていて、門の前に子供がいるのに気づいた。遠くてよく見えないが、男の子のようだった。シャイアは気になって

部屋を出た。

庭先でメイドのエレンに会った。エレンは箒でレンガ道を掃いていて、あのフェアリーも飛びながら箒を持って、器用に掃除をしていた。

「あーっ、奥様だ」

フェアリーが箒を捨てて、いきなりシャイアの胸に飛び込んできた。シャイアは少し驚いた後に微笑してフェアリーを抱きしめた。

「ちよっと、何やってるのライムっ！」

エレンは慌てふためき、こけそうになりながら走って来た。

「奥様に失礼でしょ、離れなさい！」

エレンはライムをシャイアから受け取ると、むっと頬を膨らませて見つめた。ライムは幼子のように笑っていた。

「本当に申し訳ありませんでした」

エレンが深く頭を下げると、シャイアは手を振った。

「気にしないで頂戴」

ライムは、今度はコッペリアに近づいた。

「ねえねえ、アルがシュークリーム作ったんだって、後で一緒に食べに行こうよ」

「何だつて、よし、今すぐ行くよ」

「わーいっ」

ライムが諸手を挙げると、エレンは苦笑いを浮かべた。

「まだ仕事終わってないでしょ」

「えーっ、ライムも一緒にいきたい」

ライムに悲しげに見つめられるとエレンは弱かった。

「しょうがないわね、出来るだけ早く戻ってきてね、まだまだ仕事はあるんだから」

「エレン大好きっ！」

ライムはエレンの頬にキスをする、コッペリアとつるんで屋敷に飛び込んでいった。

シャイアもエレンも、少し呆れたような様子でフェアリーたちを

見送った。

「不思議ですね。やっぱりあのおまじないが効いたのでしょうか」  
ライムは、コッペリアのおまじないを受けた翌日から、人間と同じようにおしゃべりをして、自分の考えで動くようになった。前までは物を運ぶ事くらいしか出来なかったが、今では教えれば何でも覚えてくれた。

「本当にいい子で、もう自分の子供みたいに可愛いです。ただ、ご主人様をものすごく嫌ってるんです。遠くから姿を見ただけでも逃げちゃうんですよ」

「当たり前よ。犬や猫だって、自分を苛める人間には近づかないわ。ましてやフェアリーはそれ以上に敏感なんだから」

シャイアは、エレンを横切って、「お仕事頑張ってるね」と申し訳程度に声をかけた。

普段は屋敷の入り口から馬車に乗って出かけるので、屋敷から門扉の距離など気にしたこともなかった。歩いてみて、初めて敷地の大きさを実感した。シャイアが門扉についた時には、後ろで掃除をするエレンの姿が豆粒ほどの大きさになっていた。

門の外には少年が立っていた。その顔には見覚えがあった。

「あなたは、この前の」

「この、悪魔！」

少年はシャイアが言い終わらないうちに石を投げた。シャイアは咄嗟にドレスの袖で顔を覆った。少年は足元の石を拾っては投げた。「悪魔、悪魔っ、あいつの仲間みんな悪魔だ！」

シャイアは手を下ろして少年を見つめた。すると、少年は石を投げるのを止めた。

「カイル、だったわよね。何かあったの？」

シャイアの意外な言葉に、カイルは目を大きく開いて硬直した。張り詰めた空気が少年を責めて、それに耐え切れなくなると堰を切ったように涙が溢れた。

少年は泣きながら、シャイアの前から走り去った。

少年が去った後も、シャイアはしばらく門扉の前に立っていた。打ち寄せる波の音が、苦しいほど悲しげに響いていた。

それからユーディアブルグは急激な変化を遂げていった。

まず、シエラード家の屋敷で働いていたフェアリーワーカーが次々としゃべりだし、彼らはメイドや執事たちと一緒によく働いた。フェアリーたちが意思を持った事に使用人たちは一様に喜んだが、エルヴィンだけは極度に気味悪がっていた。

街の方では内政と開発の両面から変化が始まっていた。税金はある日突然に今までの半額になり、貧困なほど税額が軽減されて、貧民街の人々など、税金を免除されているようなものだった。これはシャイアが独断で決めた事で、これがシャイアの功績である事は抜け目なく納税者に伝えられていた。

それと同じころ、その日暮らしの特に貧しい人々に、シャイアから寄付金が与えられた。生活苦を強いられていた人々は、涙を流してその金を受け取ったという。

エルヴィンは取り立て以外には関心がなく、後の事はすべて部下に任せきりで遊んではかりいたので、シャイアのしている事にしばらく気づかなかった。

シャイアは慈善事業をしているわけではなかった。彼女の中にあるのは、父の復讐をするという一点のみである。その力を手に入れるために、ユーディアブルグを掌握しようとしていた。その為には誰を味方につければいいのかよく心得ていた。

## 天使は微笑み、悪魔は嘲笑う - 4

エルヴィンはこのところ不機嫌だった。自室に閉じこもり、誰も近づけなかった。母親を殺してまんまと財産を自分のものにしたし、生活には別段変わった事もない。しかし、どうも使用人たちが余所余所しいように感じられた。そして何よりも、フェアリーたちがメイドたちと会話しながら楽しそうに仕事をしているのが気に障った。

「そもそも、なぜ突然フェアリー共が意思を持ったのか。フェアリーワーカーは意思をもたないはずなのに……」

フェアリーたちが意思を持つのは、エルヴィンにとって悪い事ではないはずだった。自由意志を持ったフェアリーを買うとなれば、一体で数百万はするのだ。ただ、そういうフェアリーを作るのには、フェアリークリエイターという専門化の力が必要だった。工場で大量生産されているフェアリーワーカーが意思を持つなどという事はある得なかった。

エルヴィンは考えながら落ち着きなく部屋を歩き回った。何となく窓から外を見ると、フェアリーたちが庭に集まっていた。彼女らは丸テーブルや椅子を用意して、そこにアルお手製の料理が次々と運ばれてきた。

見ていたエルヴィンは忌々しげに歯を食いしばり、顔は怒りで歪んだ。すぐに外に飛び出して、大股でフェアリーたちのお茶会に入した。

「何をしている、虫けら共！」

その大喝にフェアリーたちは震え上がった。しかし、怖がりながらも、その場から逃げ出す事はない。彼女らには最高の守護者があったからだ。

「うるさいねえ。邪魔するんじゃないよ」

料理をつついていたコツペリアが振り向くと、エルヴィンは本能

的な恐怖によって一步後退した。

「貴様ら、何様のつもりだ、人間に使われるだけの虫けらの分際で……」

コッペリアは飛び上がると、ゆっくりエルヴィンに近づいた。エルヴィンはさらに後ずさる。

「文句あるのかい」

ピジョンブラッドの双眸に見つめられると、エルヴィンは何も言えなくなった。

「僕たち、お仕事はちゃんと済ませたよ」

「そうよ、お掃除だってちゃんとやったんだから」

アルとライムが言うと、ほかのフェアリーたちも同意の声を上げた。

「くっ、俺は王だぞ、ユーディアブルグの支配者なのだ。その俺に逆らうのか」

エルヴィンが無意味な虚勢を張ると、フェアリーたちは可笑しそうにクスクス笑い出した。

「な、なにを笑っている！」

「違うよ、一番えらいのは奥様だもん、ね」

ライムが言った事にどのフェアリーも頷いた。フェアリーにとって権力や身分など無意味なものだった。子供に近い感性で、思った事を素直に言うだけだ。それは多くの場合、真実をついていた。

エルヴィンはショックを受けて呆然とした。

「邪魔するならあっちへ行ってくれないかい」

コッペリアに言われると、エルヴィンはフェアリーたちのお茶会など忘れたように放然として歩き出し、シャイアの事を探し回った。しかし、シャイアは出かけていて見つからなかった。

この頃シャイアは、町外れの墓地に良く通っていた。途中で必ず大きな花束を二つ買い、一つはエルヴィンの母に手向けた。

シャイアの前には、二本の杭を十字にしただけの簡単な墓が二つ



あった。シャイアはその前に、二つ目の花束を置いた。

何を思っているのか、何の感情もない冷淡な表情で、粗末な墓を見下ろしていた。

「いつもお花をありがとう」

シャイアの後ろから子供の声が聞こえた。振り向くと、すぐ後ろにカイルがいた。

カイルは、花を手向けていたのがシャイアだという事を知ると、驚いて何を話せばいいのか分からなくなった。

シャイアが微笑すると、カイルは落ち着きを取り戻して言った。

「……どうして、お姉ちゃん、あいつの仲間じゃないの？」

「わたしはあの男が大嫌いよ」

「じゃあ、どうして一緒にいるの？」

「大人の事情つてところかしらね」

シャイアは再び墓を見つめた。

「二つあるわね。もう一つはフェアリーの？」

「リリイは、姉ちゃんと一緒に埋めた。もう一つは、母さんなんだ」

シャイアは息を呑んだ。まるで、自分事のように胸が苦しくなった。

この二つの墓は、撃ち殺されたカンナとリリイと、その後亡くなった母親のものだった。

「あの後すぐだったよ。姉ちゃんが死んだ後、母さんはずっと悲しんで、泣きながら死んだんだ」

「辛いわね」

「うん、辛いけど、でも負けない、負けるもんか」

カイルは青空を見上げて、思いを馳せた。少年は家族を失っても、決して希望を捨てなかった。

「学校に行きたい。学校に行つて、偉くなって、姉ちゃんたちの仇が取りたい」

シャイアは眉をひそめた。学校に行くことが、どうしても敵討ちには繋がらなかった。

「あの男を倒したいの？」

「そりゃあ、あいつは憎いけど、あいつを倒したって姉ちゃんも母さんも、リリイだって喜ばないよ。だから僕は、偉くなって貧乏人でも幸せに暮らせる国を創りたいんだ。その方が姉ちゃんたちも喜ぶと思うし」

シャイアの体に電撃が走った。カイルの敵討ちは、シャイアの想像できない領域にあった。ただ、相手を追い続けて討ち殺すだけが復讐と考えていたシャイアには、とてつもなく重い言葉だった。

希望を胸に、熱っぽく語っていたカイルが、急に萎れた花のようになつて俯いた。

「……お金がなくても行ける学校があればいいのに」

「学校、造つてあげましょうか」

「え？」

「お金がなくても行ける学校をね」

「造れるの？」

「今すぐには無理だけれど、近いうちには」

カイルは希望に満ち溢れた、子供らしく清々しい笑みを浮かべた。

「本当に？ 約束できる？」

「ええ、約束するわ」

「お姉ちゃん、ありがとう！」

カイルが礼を言うと、シャイアは顔も見せずに去っていった。シャイアの背中が沈んだ感じが漂っていた。カイルはシャイアの姿が見えなくなるまで手を振り続けた。

シャイアにとって、カイルの言った事は衝撃だったが、迷いはしなかった。いまさら後戻りなど出来ないのだ。

わたしは、お父様を陥れた奴らを、追つて追つて追い続けて殺す、ただそれだけ！

健気な少年との邂逅を終えて、シャイアの魔性の部分が再びヴェールを脱いだ。これから本当の復讐が始まる。

シャイアが屋敷に帰ると、玄関先にエルヴィンが立っていた。エルヴィンは憔悴しきっていて、何かに怯えているように、顔を引きつらせていた。

「あなた、どうなさったの？」

「フェ、フェアリー共が、あの虫けら共が、俺よりお前の方が偉いと言った」

「まあ、そんな事を鵜呑みになさっているの？ フェアリーの言うことなんて、子供の戯言と一緒にすわ。気にする事はありません」

シャイアに諭されて、エルヴィンはぱつと顔を明るくした。

「そうか、そうだよ。でも、フェアリー共は許せない。すぐに処分しよう」

「それは困りましたわね。あの子達はコツペリアと仲良しですから、処分をするなんて言ったらコツペリアが怒ると思いますわ」

エルヴィンは、コツペリアの名前が出てきただけでぞつとした。

彼はコツペリアの事を考えるだけで、否応なしに危険を感じるのだった。

「君のフェアリーだろう、何とか言って説得しておくれよ」

「それは無理ですわ。あの子は力の強いフェアリーですから、時にはマスターに逆らう事だってありますのよ。それに、フェアリーたちは前の何倍も仕事をしているじゃありませんか。お陰で屋敷には塵一つ落ちていませんわ。処分する必要なんてありません」

「でも、あいつらは僕を馬鹿にしたんだよ」

「お気になさらない事です」

シャイアはそっけなく言って、階段を上がっていった。後に残されたエルヴィンは、母親に注意された子供のように下を向いてしゃぶくれていた。

それを境に、シャイアはエルヴィンに対して異常に冷たくなった。使用人たちもますます余所余所しくなり、フェアリーたちには極度に嫌われる。エルヴィンはいつしか孤独を感じるようになっていった。

間もなくユーディアブルグで大規模な開発が始まった。シャイアは、エルヴィンが貯めこんでいた膨大な税金を勝手に使って、港の開発と下水道の整備を手配した。

海岸沿いの町なので、港の開発には大きな意味があった。船の往来によって流通の幅が広がり、さらに漁業など海に係る仕事も激増するだろう。そうなれば、貧しい階級の領民の多くが仕事を得るだろうし、海産物によって食料難もかなり改善されると予想できた。

下水道は今のところは中流以上の領民までしか整備されていないかった。つまり、下水道は海側にしかなかったのだ。陸側の貧しい地区は、下水道が整備されていないために酷い環境になっていた。下水道を整備すれば、町全体が清潔になり、貧しい人々の環境も劇的に改善されるだろう。

シャイアの采配は的確だった。常に貧しい人々を視野に入れるのは、彼らこそが真に強い力を持っているという事を知っていたからだ。

この開発によって、貧しい階級にも仕事が増え、外からもどんどん人間が入ってきて、街は一気に賑わった。

さすがのエルヴィンも街の変化に不審を感じて部下に調べさせた。そして、ついにすべてを知ることになった。

シャイアは広間にいて、いつもエルヴィンが腰掛けていた玉座のように立派な椅子に座っていた。そこにエルヴィンが乱暴に扉を開けて、激しい剣幕で入ってきた。

シャイアの傍らにはコツペリアがいて、周りには申し合わせたようにメイドや執事たちがいた。

「どういう事だ」

「何が？」

「とばけるな！ 俺の金を勝手に使って、ろくでもない事をしやがって！」

「あなたのお金って、税金の事？」

「知れた事を！」

シャイアは、エルヴィンを嘲るような調子で言った。

「税金は領民のお金よ。領民のお金は領民の為に使うのが筋つても  
のでしょう」

「奴らは俺に支配される身だ！俺の存在なしでは生きて行けない  
のだ！そんな家畜共の為に金を使うなど、もっての他だ！」

シャイアはエルヴィンの滅茶苦茶な言い分に笑みを漏らした。

「あなた、本当にお馬鹿さんねえ。税金なんて溜め込んでおいても  
意味がないのよ。税金を回して街の景気が良くなれば、自然と領主  
の懐も温かくなるわ。そんな簡単な事も分らないなんて」

「何だその言い草は！俺を馬鹿にするような言葉は許さん！」

「そう、じゃあそろそろ終わりにしましょう。あなたにはもう愛想  
が尽きたわ」

「望むところだ！今すぐ出て行け！」

エルヴィンが出口の扉を指すと、シャイアは足を組んで、すまし  
顔で椅子に座り続けた。

「貴様、女王にでもなつたつもりか」

「そう、わたしはユーディアブルグの女王よ。あなたなんて足元に  
も及ばない」

「ふざけるな！俺の言つた事が聞こえなかったのか！」

「出て行くのは、あなたの方よ」

「何だと？」

シャイアの余りにも堂々とした態度に、エルヴィンは我知らず動  
揺した。

「だって、このお屋敷にあるものは全てわたしの物だもの。わたし  
が出て行くのはおかしいでしょ？」

「ははっ、何を言っているんだこの女は、どうかしているぞ」

エルヴィンが同意を求めるように、使用人たちの顔を見回すと、  
誰もが深い哀れみを込めた目で見返した。

「おい、お前たち……」

突然、高笑いが響いた。エルヴィンは愕然と優雅に笑うシャイアを見つめた。

「あなたは、わたしに全ての財産を譲渡するという契約をしたのよ。今あなたに残されているのは、貴族の肩書きだけ」

「そんな契約はしていない！」

「まだ気付かないの？ 本当に愚かな男ねえ。しょうがないから教えてあげるわ。前に契約書にサインしたでしょ」

「あれは、鉱山の契約書だろう……」

「ちやあんと内容を確認しないから、こういう事になっちゃうのよ」  
「う、うわああああっ！」

エルヴィンは突然発狂すると、頭を抱えて絨毯の上に蹲った。激しく混乱していたが、シャイアが言っている事が事実なのは分かった。

「魔女だ、お前は魔女だ！ 人間じゃない！」

「そうねえ。自分でも悪魔じみていると思うわ。でも、あなたにだけは言われたくないわねえ」

エルヴィンは息を吹き返したように立ち上がり、懷から拳銃を出してシャイアに向けた。周りのメイドたちが驚いてシャイアから何歩か離れた。アンナとコッペリアだけは、シャイアの側から離れなかった。

「そうよねえ。結局あなたにはそれしかないのだわ。気に入らないことや思い通りにならない事があれば、力だけでねじ伏せる。何て小さくて弱々しいのかしら」

「こ、殺してやる！」

エルヴィンは立て続けに引き金を引いた。しかし、銃声と共に発した弾丸は、コッペリアの力によって全てシャイアの直前で弾け飛んだ。

「馬鹿な……」

「ざあんねえん、わたしにそんな玩具は効かないわよお」

エルヴィンは呆然としていると、アンナが前に出てきた。普段は目立たない娘だが、今は強靱な意志を持ってエルヴィンの止めの一撃を見舞った。

「もう誰もあなたを領主などとは思っていません。今ではここにいらつしやる奥様こそが、名実共にユーディアブルグの領主なのです」  
「み、認めないぞ、俺は認めない」

「あなたに認めてもらう必要はありません。貧民街から奥様こそが領主に相応しいという声が起こり、それは瞬く間に街中に広がりました。領民に認められた者が領主となるのは当然の事ではありませんか」

アンナの静かで激しい攻撃に、エルヴィンは体を震わせて後ずさった。そこに追撃をするようにシャイアが言った。

「あなたが今まで苛め殺してきた領民たちの苦しみを、これからたつぷり味わいなさい」

エルヴィンは震える手で、再び拳銃をシャイアに向けようとした。がその刹那、腹部に強烈な衝撃を受けて後ろに吹き飛び、扉に激突して拳銃を手放した。

「あ、ぐはあつ……」

エルヴィンが腹を押さえて苦しんでいると、コツペリアがはつきりと言った。

「もうお前の居場所はないんだよ、さつさと失せな」

エルヴィンは、まるで毛虫のように這い蹲り、やっとの事で扉に縋りながら起き上がった。その姿は入ってきた時に比べて著しく落魄としていた。

「訴えてやる……」

「好きにすればあ、無駄だと思うけどね」

エルヴィンは泣きそうな子供のように顔を歪めると、幽鬼のようにゆらりとした動きで扉を開けて出て行った。その後を追うように、シャイアの高笑いがしばらく屋敷に響いていた。

天使は微笑み、悪魔は嘲笑う……END



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8425o/>

---

闇色の翹

2011年2月8日22時40分発行